に向て最近要塞戰の實例教訓を垂れんとす、啻に光榮ある勝利の外、千歲の下、其戰術上に遺すべきもの豈に尠少ならんや。築城の術今日の如く進歩せず、武器の精鋭亦今日の如くならざるも、單に要塞戰として、史上に其比を求むるも、其攻擊の難度到底其比を見ざるなり。

古來著名なる要塞戰*

一八〇八年十二日攻圍開始「攻」佛軍(勝) サラゴサの攻城	四九、〇〇〇 重砲五〇門	三、〇〇〇	死傷	六〇	
繼續六十一日間	「守」四軍(敗) 三一、〇〇〇 砲一五〇門	二二、〇〇〇	死傷及 疾病	七〇、〇	
一八一三年一月攻圍開始「攻」普露連合軍(勝) ダンチヒの攻城	三五、〇〇〇(重砲一五〇門) (西)頑強なる抵抗の後降服 「守」佛波蘭來因(敗) 二九、〇〇〇 砲五〇〇門に減却し陥落後全く捕虜となる				
繼續十一ヶ月間	(連合英の分艦隊海正面より市街を封鎖す(同盟)系祭ある守城の後糧食彈藥缺乏の爲め降服				
一八二八年五月攻圍開始「攻」露軍(勝) プライラの攻城	一八、〇〇〇 砲九〇門	四、〇〇〇	將官四人 將校百十八人	死傷	二二、二
繼續三十八日間	「守」土軍(敗) 八、〇〇〇 砲二七八門	三、〇〇〇		死傷	三七、五
一八二八年七月攻圍開始「攻」露軍(勝) ヴアルナの攻城	二〇、〇〇〇 砲六五門	六、〇〇〇		死傷	三〇、〇
繼續攻城動作開始より七十日間	「守」土軍(敗) 二〇、〇〇 砲一六二門	一三、〇〇〇		死傷及 疾病	六、五〇
(露)艦隊海正面より封鎖す(土)內艦者ありて降服す					
一八二九年五月攻圍開始「攻」露軍(勝) シリストリヤの攻城	一〇、〇〇〇 重砲九六門	二、六八〇	將校一人將校百十五人	死傷	二六、八
繼續四十四日間	「守」土軍(敗) 一五、〇〇〇 砲二三八門	六、〇〇〇		死傷	四〇、〇
一八五四年十月攻圍開始「攻」佛英土サルヲ(勝) セバストポールの攻城	一七〇、〇〇〇 砲八一四門	五四、〇〇〇	死傷及 失踪	三一、七	
繼續十一ヶ月間	「守」露軍(敗) 一九五、〇〇〇 砲一四七門	一〇二、六七〇	死傷及 失踪	五二、六	
(連合)連合軍の艦隊は海正面より港を封鎖す(露)數回の激烈なる解圍戰の後最後の大逆襲を受け材料船船を毀壞して退却す					
一八七〇年八月開始「攻」獨軍(勝) ストラスブルクの攻城	四〇、〇〇〇 重砲一六八門	九三三	將校三十九人	死傷	二、三
繼續攻城動作は二十九日間	「守」佛軍(敗)	二三、〇〇〇 砲四〇〇門	二、五〇〇	死傷	一一、〇
(佛)降服					
一八七〇年十一月攻圍開始「攻」獨軍(勝) ベルフオールの攻城	二三、〇〇〇 重砲九七門	二、一四〇	將校八十八人	死傷及 失踪	九、〇
繼續百〇五日間	「守」佛軍(敗)	一七、七〇〇 砲三二九門	四、七五〇	將校三十二人	死傷及 失踪	二六、八
(佛)三日間に亘る大出擊は擊退せられ遂に降服す					
一八七〇年八月開始「攻」獨軍(勝) メッツの攻圍	一九七、〇〇〇 砲六五八門	五、八〇〇	將校二百四十二人	死傷及 失踪	二、九
繼續六十九日間	「守」佛軍(攻) 一七三、〇〇〇 一五七〇門	佛軍十七萬人捕虜となる			
(佛)二日に亘る大出擊は擊退せられ飢渴の爲め降服す					
一八七〇年九月開始「攻」獨軍(勝) 巴里の攻圍	重砲二四〇門 野砲六七〇門	二〇〇、〇〇〇 一一、二〇〇	將校死傷五百十人 失踪十人	死傷失踪及其他	五、六
繼續百三十二日間	「守」佛軍(敗)	四〇〇、〇〇〇 重砲八〇〇五門 野砲六〇〇門	二五、〇〇〇 (內)三分一は捕虜	死傷及其他	六、〇
(佛)數回の大突擊功を奏せず糧食の缺乏と抵抗力盡きて遂に降服す					
一八七七年十二月十日開始「攻」露ルーメ(勝) プレヴナ最後本戰	一二〇、〇〇〇 砲五八五門	一、九〇〇	將官一人將校五十九人	死傷	一、六
繼續二時間	「防」土軍(敗)	五〇、〇〇〇 砲六〇門	死傷五、〇〇〇 傷	其他	一六、七
(土)土將オスマンパシヤ四万三千餘人を率ゐて降服す					

のみ通閲するも、今や築城術の精幾倍し、武器の精亦幾倍す、兵員砲門の數今回より多きものあるも、武器の威力到底同日にして語るべからざるなり、今や戰鬪記事に移るに方り讀者は予輩が此包圍戰を全く別個の紀事となし且此紀事の初頭は南山戰に接續するものなるを知らざるへからず。

其二　戰鬪概觀……上の一……第一回總攻擊に對する豫備戰の經過

今先づ攻擊戰の一般經過を知らざるべからず、陸上よりする旅順包圍の序幕は、南山の攻擊に依て開かれたり、同時に海面よりは封鎖の宣言を見る、五月二十六日、南山の攻擊に對し西山分遣隊は、之に應援を與へ、終に攻畧の目的を達し、翌二十七日には南關嶺を占領し、更に其翌二十八日には、一支隊を以て柳樹屯及びダルニーを占領し、二十九日には軍の各隊、三十里堡西方約一里の高地に、三十日を以て、安子山台子山線を占領し、同日海軍に於ては、砲艦及驅逐艇を放て、強行偵察を行ひ、二日間に亘り港口の掃海を決行し、六月十三日に至り日として間斷なく、或は偵察、或は掃海或は營城子双台溝附近の砲擊を行ひ、或は機械水雷の沈置を行へり。十四日陸上に於ては、威力偵察を行ひ、海上よりは、第三驅逐隊及水雷艇隊之に勢援し、敵艦隊亦出動し包圍軍陣地を砲擊したり。敵艦は十八日に於て出戰し、廿三日には大擧出戰利あらず、港内に敗退したり。廿六日陸軍は安子山盤道溝西方高地亂泥橋東方及南方高地双頂山劍山線を占領し、廿七日海上に在りては、水雷艇隊敵哨艦に夜襲を試みたり。七月三日敵軍大擧して逆襲し來り、劍山の奪回を計りて成らず、八日第六艇隊は夜襲を決行し、九日には敵艦出戰利あらずして敗退し、十一日水雷艇隊又夜襲を行ひ、砲火を見ざること一旬、陸上にありては、攻擊の準備を整へ、其機會を待てり。二十四日驅逐艦敵艦隊を破りたり。二十六日陸軍は營城子、偏石柳子附近及大白山附近を占領し、海面に在りては掃海隊大に龍王灣に苦戰し、翌二十七日攻圍軍大に活動を開始し、敵艦龍王塘附近より軍の左翼を砲擊す、此日バーヤン、港口外に敷設水雷の爲めに傷けり、長嶺子英名石線は此日を以て占領に歸し、三十日に至り、右縱隊は旅順街道以西より、中央縱隊は干大山に、左縱隊は土城子南方高地より、大孤山東方高地を占領し、露軍全く圍郭内に逃退す。八月五日敵艦隊鮮生角附近に於て我艦隊の破る所となり、六日露軍自ら水師營を燒けり。七日日本軍大孤山攻擊を開始し、翌八日之を占領し、敵艦我陣地を砲擊す。九日小孤山を占領し、敵逆襲を試みて敗る。十日は是れ敵艦大擧遁竄を計り、黃海に大激戰を演じたるの日なり、露艦隊の運命此日を以て殆んど決す。十四日干大山より北東溝北方

高地及隋家屯西方高地に亘る線を占領し、十五日碾盤溝南方及小東溝東北高地を占領す。十六日攻圍軍司令官は降伏の勸告を行ひ、此の機會を以て、獨乙皇帝が其臣民にして、包圍内に在る、非戰鬪員に下せる勅旨を傳ふ。翌十七日籠城軍々使は降伏を拒絶し來る、是に十九日第二回本線總攻撃の擧あり。

其三　戰鬪概觀……上の二……第一回本線總攻撃より第二回本線總攻撃に至る狀況

第一回本線總攻撃に於ける効果は果して如何、翌二十日に於て石橋北方標高一四七の高地を占領し、二十一日には刺兎溝北方高地を二十二日には盤龍山東西砲臺の占領を見たり。露軍は其の崂嶗嘴砲臺より包圍軍陣地を砲撃するを以て、日進、春日兩艦は大に之を砲撃せり。九月二日旅順の兵營に向ひ野砲及海軍砲を以て威嚇砲撃を行ひたるも、翌三日露軍の猛烈なる砲撃及強襲の爲め、眼龍北方に於ける作業を妨害せられ、對盤龍山工事の大部分を破壞せられたり。九日に至り對濠作業大に進み、對クロパトキン砲臺の坑道作業は壘前五十米突に達し、十一日には水師營南方に於ける作業は其七十米突に達し、此頃敵艦隊は港口の掃海を行ふを以て、我より強行偵察を敢行し、是に於て第二回本線總攻撃を行ひたり。

其四　戰鬪概觀……中の一……第二回本線總攻撃より第三回本線總攻撃に至る狀況

第二回本戰總攻撃の結果は、九月二十日を以てクロパトキン砲臺及水師營南方高地の六壘を奪取せしも、其翌二十一日には、二〇三高地の激戰其一角に在りし攻圍軍の一部隊の舊位地に退却するの止むをなきに至れり。二十七日籠城軍二龍山砲臺の攻路に向ひ砲火を集注し、猛烈に逆襲し來れり。翌二十八日より連日港内の敵艦を砲撃し、二日には東鷄冠山攻路に對する逆襲を撃退せり。四日より七日に亘り敵艦の砲撃を續行し、鹽廠南方高地に於ける速射砲及機關砲を破壞し、老虎尾半島の倉庫に火災を起さしめたり。九日二〇三高地の敵二龍山に向ひ運動せるを發見し妨害を試み、十一日右翼隊は龍眼南方鐵道橋附近を占領す。此頃に至り、大口徑砲の敵艦射撃命中彈少なからず。又我働作を妨ぐる反射鏡を破壞し、又

敵艦ペレスウキットに命中し火災を起さしめ、敵の水原此日を以て閉塞したり。

大口徑砲松樹山砲臺に命中し、十六日中央隊は鉢卷山の砲臺及、二龍山中腹の塹濠を占領す。十九日敵猛烈に二龍山、及東鷄冠山に對する對濠作業を妨害するに拘はらず、工事益其歩を進め、又連日大口徑砲を以て敵艦機器局を砲撃し、旅順市街に火災を起さしめ、二十六日更に攻城砲及海軍砲を加へ、主として松樹山、二龍山、東鷄冠山、椅子山、案子山、白玉山、造船所、及軍艦を砲撃し、二十七日東鷄冠山北砲臺凸角部外岸穹窖の一部を破壞し、二十八日海軍砲を以て、西太陽溝、椅子山、案子山東港内の軍艦機器局、及旅順舊市街を砲撃して火災を起さしめ、大口徑砲攻城砲を以て、二〇三高地を砲撃し、二十九日砲撃を續行し、西太陽溝の火藥庫を爆發せしめ、三十日第三回本線總攻撃を行ひ、右翼隊及中央隊の一部を以て、松樹山、二龍山、雞冠山、の外岸を占領し、又中央隊の一部はP砲臺の占領を固め、左翼隊は瘤山の一壘を占領す。

其五　戰鬪概觀…中の二—第四回本線總攻撃を行ふべき豫備戰の經過

第三回本線總攻撃の翌三十一日、大口徑砲及海軍砲を以て、港内及造船所を砲撃し東雞冠山砲臺東部斜面を占領し、十一月一日より、間斷なく連續して、大口徑砲海軍砲の砲撃を行ひ、東港及市街北端の武庫に火炎を起さしめ、松樹山舊砲臺の火藥庫、及機器局附近の火藥庫を爆發し、大火災を起さしめ、攻撃下旬に亘り、二十六日を以て第四回本戰總攻撃を決行し、而かも松樹山以東の諸砲臺に對する大强襲、未だ其の功を奏せず。

其六　戰鬪概觀…下…最後の本線總攻撃及開城の經過

第四回本線總攻撃の結果、松樹山以東の諸砲臺に對する强襲未だ奏功を見ずと雖も、二十九日には此諸砲臺の穹窖及側防の破壞を決行しつゝ、又二〇三高地に向ひ、强襲を決行すること數回、其塹濠を奪取し、翌三十日朝來更に大强襲を行ひ、終日に亘れる大激戰の結果、終に二〇三高地を奪取す、是れ實に旅順要塞の致命傷にして、有名なる中將コンドラチエンコ、少將イルマン之に戰死し、中將フォーク之に負傷

す。十二月三日左翼に於て、彼我軍使會同して各自死傷を收容せんが爲め、一部の休戰を爲したり。二〇三高地已に我軍の手中に歸し、旅順港内は其敵制を受く、敵艦及建造物に對する着彈の、自ら正確を得るは必然にして。又從て各砲臺に對する攻擊作業も、大に進捗すべきや勿論なり。十二月六日海軍砲を以て、港内の敵艦を射擊し、命中甚だ多く、連續射擊を强行し、損害を與ふる多大なり。六日二〇三高地よりの觀察に依れば敵艦の損害激甚にして、或は沈沒し、或は海底に膠着し、或は傾斜し、其已に戰鬪力を失ひたるものなることを知れり。又赤阪山を占領したる結果敵軍使の情を容れて、五日間の休戰を爲せり、七日より大口徑砲を以てする敵艦の射擊を續行し又白玉山東南麓及機器局附近の倉庫等に命中し、又内部の砲擊を行ひ、十一日に至り港外に逃出したるセバストポリを除き敵戰鬪艦以下八隻全く無力に歸したるも尚ほ老虎尾機器局、魚雷營附近及船艇の射擊を行へり、十二日水雷艇隊は港外に泊せるセバストポリを襲擊し、十四日又其襲擊を續行し、十五日尚ほ敵驅逐艇に對し襲擊を行ひ、三十一日を以てセバストポリ全く戰鬪力を失ふに至る。之に先たつ六日即ち二十六日を以て、東鷄冠山北砲臺胸牆に大爆破を行ひ、大突擊の結果、全く之を占領したり。全線に亘るに攻擊の步度大に進み、二十二日には右翼部隊を以て、後三羊頭村北方高地、及西方半島高地を占領し又後楊樹溝東方高地に於ける防禦工事、松樹山、二龍山及日砲臺に對する重砲の攻擊を以て、激甚なる損害を與へ、二十四日は右翼團隊は後三羊頭村、小房村、大劉家屯を占領し、是に於て右翼方面一帶、敵の前進陣地を占領するを得たり。二十八日二龍山正面の胸墻に大爆破を行ひ、全砲臺を占領し、三十一日松樹山砲臺の胸墻を爆破し、終に同砲臺を占領し、全線今や一躍して要塞を蹂躙せんとす。敵帥其終に爲すべからざるを見、降を請ふ、三十八年一月二日、終に水師營に於て開城規約を調印したへに、曠古の要塞戰たる旅順包圍戰は終結せり。

其七　戰鬪經過と外間想定との對觀

上述は是れ事實上の經過なり、當時要塞攻擊の時日を要する長遠なるに對して種々の想像を下せる、内外の批評は少なからざれども、タイムスの軍事批評家が、彼の精細なる眼光を以て、驗索して以て下したる判斷は、本記を讀むの前、事實と對照し、

如何に其想察と相映じたるかを味ふを要す。何となれば日本自身すらも其當局者にあらざる限り其經過の想定は勿論、其終結の時機、狀況を知るに難く、況んや外間の想像に於て其肯綮を得んとするも、殆んど不可能の事に屬しありしと雖も、其外間に於ける精透なる想定推解も時として事實を見たるよりも以上に永久予證に其利害を敎示するものなくんばあらざるを以てなり。其要旨に曰く

日本第二軍は五月五日を以て遼東半島に上陸し、其二十六日には一蹴して南山を陷れ、六月二十六日を以て旅順攻擊の全線進軍を行ひたるものゝ如し。是れより約一ヶ月の間、日本公報の何等示す所なきが故に、其行動の如何を明知する能はずと雖も、要は其目的としてステッセル將軍の占據地域に局限を加へ、其略取したる地點には攻城の爲めに要する砲臺の築造を施さんとするに在るや明なりしなり。七月十六日に至り、露國は要塞より致せる報告を公にし、其月三、四、五、三日間に連續せる行動の幾分を窺はしめ、其損害三百に達し、敵日本の損害は更に之に倍蓰することを示し、敵の塹壕を奪取し得たるを言ひ、又敵の强大なる增援軍は、七月六日を以て青泥窪に到達したるを言へり。日本首府に於ては是等の敵報を認むる所なく、

又否認する所もなく、唯其艦隊司令長官が港口を嚴監し、機會だにあらば水雷艇をして偵察を行はしめ、又機械水雷を沈設しつゝありといふの外伺ふべき所なきなり。其後八月七日露京に於て發表せられたる、ステッセル將軍の所報は、主として七月二十六日乃至二十八日に亘れる、三日間の事情を報告せるものにして、日本軍を擊退し、其損害を與へたる七萬に及び、多數の攻城砲を失はしめたりと云ふも、かゝる至大の損害を生ずべき大强襲の行はれたるにあらず、唯其決勝的行動の豫備として、全線に亘れる攻擊の續行せられたるを徵知するに過ぎざるなり。展開せる日本軍は五箇師團より成れることを露軍の發見せしは七月三十日午前四時にあり、日本軍已に水師營の南半哩老虎尾岬尖に於ける、露艦隊の錨地を去ること、約六千米突に於ける、狼山の陣地を占領し、其結果は北方砲臺の一部實際に占領せられたるか或は沈默の止むなきを見たるかの一にありしならん。（是れ第一回本戰攻擊前の七月三十日露軍圍郭內に逃れたる時に於ける占領線を指すものなり前段參照を要す）狼山砲臺の瞰制域及射界は共に狹く、西方標高四百四十二呎の山地、東方標高約同呎山地との間、半哩に達せざる隘隙より港口錨地點に向ひ、砲火を送

るを得べく又東港及船渠附近には其間接射撃を行ふを得べし。要するに七月三十日に於ける日本軍攻撃の進捗は、二個の利益を得たるものなり。其一は港内に於ける艦隊が、至重なる危険に安ずるにあらざるよりは、一錨地に停止する能はざるものなり、其二は、露軍一地點より他の地點に移動せんとせば、日本軍の容易に之を偵知するを免れざるべからず、露軍之を避け得るにあらざれば、其射標とならざるを得ざるなり。ステッセル將軍日本軍優勢なるが故に、又其陣地に危險なるが故に退却を下令し、之を第二陣地に移らしめたりと云ふも、即ち所謂本防禦廓内に入りたるものなり。（前段參照）又八月十日黄海大激戰の前夜即ち八月九日の夜半に於て、日本軍は大孤山、小孤山の二地點を占領せり。此等の地點は、要塞の東正面に於ける重要陣地にして、大孤山の位置は本防禦線に對し二哩、丙港船渠に對し三哩に在りて、標高六百四十五呎を有し、小孤山は大孤山の南方一哩にあり、西面高頂は要塞に對し、千三百米突、船渠に對し約四千四百米突に在り、標高は四百五十呎を有す。此の二個の重要なる陣地と、露軍の陣地と對峙するものは、標高五百呎乃至五百五十呎を有し、尚其後方に、六百二十呎及六百五十呎を有する二丘阜を有す。兩山已に日本軍に歸し、其工事を敏速にし、延長急速なるに於ては、要塞の北方及東方正面に於る日本軍の位置は、正に確實と爲り、露軍防禦の全部面は、其市街、船渠、港内錨地の凡てに於て、日本軍の彈程内に在るものなり。是れ八月十日艦隊の逸走を企てたる所以なきにあらざるを見る可し。八月十六日日本軍の致したる勸降書は、ステッセル將軍の肯せざる所となりたり。翌九月中旬より下旬に亘れる期間に於て、二個の角面堡は日本軍の手に落ち、露軍は其貯水池を失へり。之に關するステセル將軍の報告は、必ずや露京に於て訂修せられたるなるべく、日本軍の猛烈なる强襲を行ひたるとを說くも、（九月廿日の第二回本線攻撃を指す）其自家の損害を明言せず、必要なるべき紀事を省略し、不用なる點を詳述し、其軍隊士氣の奮起を報ずるに過ぎざる所以のものは、其反面に損害の大なるを證するに似たり、日本軍の損害に關する推算は、一の易斷の如く、何れの場合に於ても、其不正確なるを證すると同時に、一方に於ける日本軍の砲火威力は、今は露軍より位置を轉じ露軍其防禦工事を拋て逃るゝ前、已に日本軍の砲火を被り、攻撃の已に秩序に就きたるを證するものなり。情報を總合すれば、攻圍作業は日に進捗しつゝありて、重要なる陣

地の已に其の占領の手に委せられたるは明かなるを見るに足れり。九月十九日、日本軍の砲撃を加ふるや、ウイレン少將揮下の艦隊は、逸出を企てたるが如く、港外に於ける其掃海艇隊の行動と、青島に於ける獨逸人の期待とは相應じて之を證するに似たり。二十日其大形汽船は、水雷を沈置しつゝ、忽如として其影を沒ずるに至れるは、自ら水雷に罹りたるものなるべく、同時に他の行動を止め、凡て港内に退却したり。其後旅順の總攻撃は、十月廿六日より開始せられ、第三回本戰總攻撃を指す其攻撃準備は其規模從來に比して廣大なりしなり、多數の重砲を備へ、其進歩の時間は急速ならずとするも、攻撃作業は日に繼續し、時々進捗しあるに相違なく之に比例して防禦軍は、其力日々減退し、其勢時々に窘蹙しつゝあるに相違なきなり。此の如くにして攻圍は進歩するも、一定の時期を限りて攻陷の必すべきものにあらず、唯陷落は數週を餘すべきの商量は下し得べき判斷なりと謂はざるべからず。或は防禦軍司令官は、其最後を老鐵山砲臺に托し、こゝに死守すべきや計るべからずと雖も、是れ唯日本軍が之を閉鎖し、單に之に關せざるも可なるべし、何んとなれば、日本軍の目的は、必ずしも防禦軍司令官にあらず、其勇敢なる幕下の貔貅にあらず、實は主として視ながら其手に自由ならざる、殘存艦隊其ものなればなり。而れども其砲撃は間斷なく續行されつゝあり、少なくも其攻撃が、假令白玉山砲臺の南方に、一時其幾分の避躲を求め得たりとし、之れに砲彈を送ることの困難なるべきは勿論なりと雖も、港内に密集せる艦隊は、限りある區域内に於て、其安全を求め、砲彈を避けんとするも得べからず。船渠、武庫機器局等に對して、高照尺の砲彈は、之を破壞する大なるものあらん、唯殘存艦隊の狀態、實に已に不良にして、逸脱の隙なきものありと雖も、嚴格なる考算より云へば、實際戰鬪航海に堪へざることの立證を得るまでは、尚ほ其有力なることゝ思料せざるべからず、是等の殘存艦隊を撃滅せんには、日本軍が西部砲臺を其手に收めざる限り、爲す能はざる所にして而かも、其の西部砲臺も、一方二龍山、松樹山の瞰制を受けざるべからず、故に此の事實は激戰を説明して餘りあるなり。而して最後に加へられたる打撃は、十一月三十日に於ける二〇三高地の攻陷これなり。これが爲めに、軍艦は其避線を失ひ、巨彈は容赦なく其暴露したる船體を見舞ひ、尚ほ内方防禦も、其火力を蒙むるに至れり。二龍山鷄冠山砲臺の攻撃は、日本軍其重砲陣地を得る能はざりし爲め、攻撃至難な

りしも、二〇三高地の攻陷と同時に、要塞の運命は已に日本の手中に把獲せられたるものなり。ダイムスは尙ほ是等攻圍の經過時日二百四十有日を時期に概括すれは、三期に分つを得可しとし、下の時期分類を試みたり。第一期は五十一日間、即ち五月六日より六月二十六日に至る間を單純包圍の時期とし、第二期は三十日間、即ち六月二十六日より七月二十六日に至る間を遠距離攻擊及防禦の時期とし、第三期は百五十九日間即ち七月二十六日より一月一日に至る間を近接攻擊即ち攻圍本戰と爲せり。此分類は作業的に依るものにして、此分類と實働經過とを比較するに、其所謂第一時期には、南山戰以來日本軍が安子山、盤道溝西方高地、亂泥溝東方、及南方高地、双頂山及劍山線に在り。第二期の終期に於ては、營城子偏石柳子、大白山附近に在り。然れども、ダイムスの所見は、七月三十日露軍圍廓內に逃れたる時期を指すものならん、故に第二期の末日は七月三十日と爲すべきが如し。予輩はダイムスの分類法を取らず、本線總攻擊の實働を以て四期に分類したるとは前に已に說明したる所なり。

第二節　攻圍戰本紀

其一　第一回本線總攻擊

A　其豫備戰

五月二十六日、南山を攻陷したる後、奧軍の中央部隊たる第一師團は、鐵道線路に沿ふて南下し、左翼たる第三師團の一部隊、大連灣を占領したるの時を以て、第十一師團は鹽太澳に上陸し、第一部隊は前進して、三十一日南河口より毛頭子山線に達し、たり、第二部隊は、安子山臺子山に在りて防禦軍と對峙の狀態に在りたり。旅順攻擊軍たる乃木軍司令部は六月六日を以て到着し、是において、第二軍は第三、第四、兩師團を擧げて北進したり。第三軍の編成新たに北泡子崖に成り攻圍戰の位置に就けり、第三軍は後に第一、第十一、第九師團、弘前兵團、徒步重砲大部隊、海軍重砲隊、戰利重砲隊、特設工兵隊、野戰砲兵團、氣球隊、野戰衞生隊等より成れり。

此時に於ける露軍の狀況を見るに、彼の南山に敗るゝや、鐵道に依りて營城子附近、

に退却し、青泥窪にありし者は、小平島北方高地、鷄冠山以西に退却し、石山溝東側標高一七八高地の東北麓、安子嶺南方高地に防禦工事を施し、黄泥川、大上屯西方高地に位置し劍山、歪頭山、鷄冠山高地に亘る線を監視線とせり。六月十三日敵は有力なる一部隊を以て偵察を強行し來り、薄暮に至りて退却し、十四日は敵の砲艦二隻戰艦一隻黑石礁附近より、我陣地に向ひ砲擊數發を行ひ、約四十分にして西方に向て去れり。十八日午後四時四十分、敵艦三隻、驅逐艇八隻、小平島附近に現はれ、我陣地の左翼に向ひ、一發の砲彈を送れり、双臺溝附近工事は益增加し、且つ探海燈を設置し、其近海及我陣地を探照せり、殊に劍山歪頭山に位置せる敵は、其高地より我陣地を瞰制し、不利言ふべからず。是に於て、六月廿六日右縱隊の左翼は、盤道西方及高地に向ひ、同地の敵を攻擊して之を占領し、右縱隊は三隊に區分せられ、右翼隊は亂泥橋東方高地に向ひ、大なる抵抗なく、同地を占領し、中央隊は亂泥橋南方標高三六八及黄泥川大上屯北方高地に向ひ、途中若干の敵を驅逐し、午後一時頃より三六八の高地に據れる敵(歩兵約一大隊機關砲及砲若干)を攻擊して、稍々頑强なる抵抗に遇ひしも、午後五時頃、全く同高地を占領せり。左翼隊は雙頂山に向ひ、若干の敵を擊退し、同高地を占領せり。是に於て軍の第一線は、右翼安子山より盤道西方約一吉羅米突に在る高地、亂泥橋東方及南方の高地を經て、雙頂山に亘る線に在り、三六八の高地(即ち劍山)歪頭山及小平島の占領は、我軍の爲め大に大連灣の掩護を確實ならしめたると共に、彼我從來の位置を轉倒し、敵の陣地及其背後の狀態を知るの便を得たり。此の戰鬪に於て、戰利品の主なるものは、六珊知米突速射砲二門、砲彈二百なり

此場合に於て特に注意すべきは雙台溝方面の敵情之れなり。安子嶺方面、同高地一帶の稜線より、其東南約三吉羅米突の山嶺附近に亘り、老座山方面王家店南方の高地に亘り、防禦工事を施こせり。敵已に劍山、歪頭山の險を失ふ、其不利全く位地を顚倒するが故に、之が恢復を計るべきこと是れなり。七月三日、敵盤道及黄泥川大上屯方面に來襲す、我右縱隊の右翼隊方面に於て、敵狀變化を見ずと雖も、其左翼隊方面に於て敵斥候の出沒、頻々として活動の色あり。七月四日午前五時、敵の歩兵約一中隊、岔溝北方約千米突の高地に現はれ、五岔營子及其北方に在る我監視部隊に向ひ發射す、我兵之に應じ午前九時に至る、同時敵兵約二中隊、岔溝村内より前

進して、其南方約二千米突の高地を占領し我陣地の左翼に向て射撃を開始し、同時同村北方高地に在りし敵兵約一中隊も、亦盤道西方の我高地に向ひて急射を加ふ我兵之に應射し銃戰最も熾なり。九時四十分左縱隊の右翼隊に屬する砲兵、岔溝南方高地の敵を砲撃す、敵兵高地稜線の後方に匿れ爾後前進せず、此の如くにして、遂に日沒に至る。午後十一時半、敵の一小部隊牧城驛南方高地より盤道西方の我陣地に向ひ夜襲し來りしも、我兵直に之を撃退す。七月五日午前二時半、敵の歩兵前日の位置より前進を始め、盤道西方高地に在る我陣地前約五十米突の地點まで近迫せしも、我守備兵之を撃退す。天明に至り、敵は再び攻撃を試みしも、其目的を達すること能はずして止む。午前八時敵の銃火漸く緩む、同九時頃に至り逐次退却を始め、偏石棚子及溝口東北高地に出沒し、午後一時以後終に其影を失ふ。

更に左縱隊方面を見るに、七月三日其右翼隊方面は、唯敵斥候の出沒を見るのみなれども、其の中央隊に於ては午後一時より二時に亘り敵の砲兵約八門、王家店南方に現はれ、歩兵少くも二中隊、劍山方面の我陣地に向ひ攻撃し來る、當方面の守備たる歩兵隊の大部此敵と射撃を交換す、午後四時三十分頃、同隊の一部に對せる敵は

増加隊を得て前進を始む、第一線の歩砲兵機關砲隊と協力し之を撃退す。午後五時二十分頃、敵砲約四門、大石洞西方高地附近に布陣し、中央隊の第一線に向て射彈を雨下す、午後七時に至り、全正面の敵兵、逐次大白山方向に退却し、其砲兵のみ依然其陣地に在り、午後八時三十分、敵兵約一大隊軍樂を奏し、大白山方向より攻進す、我第一線は僅に陣地兩翼の守備兵を殘し、其餘を以て逆襲に轉ず、敵兵我喊聲に驚き退却す。此日我中央隊に來襲せる敵は、歩兵約二大隊、砲約十二門、機關砲二三門にして、此夜大白山東方一帶の高地より、王家店東北高地に亘る線に停止せり。又其左翼隊方面は、午前五時三十分、老坐山北方一帶の高地に在りし我前哨は、敵兵前進の徴を認む、同六時に至り、敵兵約二小隊、標高一九五の高地に、同一中隊、標高一二七附近の高地に現出し、我兵と射撃を交ゆ、午後一時より二時に亘り、敵兵増加す、我前哨部隊本陣地に歸還す、午後三時五十分、敵兵約二中隊、密集隊形を以て、老坐山北方鞍部を下り、前進を始む、標高三一二附近に在る、我砲兵中隊之を急射す、敵兵潰亂して退却す、午後六時半、敵兵約一大隊、老坐山南方高地に散開し、射撃を始む、同四十五分、少なくも四門の敵砲、同山の北方鞍部に現出し、我左翼大隊を猛射す、我砲兵之に

應射し敵砲を沈默せしむ、此夜敵兵壯間の位置を固守して動かず。

七月四日右翼隊方面に方り、午前七時半、敵の歩兵一中隊は南岔溝東方高地に他の一中隊は同村東南約千五百米突の高地に現はれ、工事を始む、乃ち我砲兵大隊(一中隊缺)之に向ひ急射す、敵兵忽ち稜線の後方に匿る、同時安子嶺附近に在る、敵砲四門、我砲兵に向つて砲火を開始す、我砲兵遮蔽の位置に轉じ、主として敵の砲兵を射擊す、爾後情況の變化なく夜に至る。此日當面に在りし敵は、多くも歩兵一大隊、安子嶺に存りし敵の火砲は新式速射砲少なくも四門、舊式六門なりしが如し。又中央隊方面に方りては、午前一時より二時に亘り、一二中隊の敵兵劍山に向ひ兩回突擊を試みしも、我兵の爲め擊退せらる、午前敵の歩兵一大隊半、劍山及我陣地の左側(劍山の東南約三千米突に在る高地)に向ひ前進す、我第一線の歩砲兵急射を以て、其前進を阻碍す、既にして王家店西方較部に在る敵砲約八門、我に向て發射す、午前七時當方面の敵は、歩兵約三大隊に增加し、我防禦線の前方八百乃至千米突の地點に散開し、第一線と射擊を交換す、其の砲兵は前日の位置より、劍山及我砲兵陣地を猛射す、同三十分敵の歩兵約二中隊、大石洞方面より前進し來る、依て午前八時我豫備隊は、西部猪圈子溝に向ひ前進す、午前十一時に至る間、敵兵屢々前進を企てしも、我隊の猛烈なる射擊に支へられ、終に其目的を達せずして止めり、正午頃我前面の敵の兵力約七大隊半に上り、劍山西方に尙ほ約一聯隊の敵兵あり、午後一時二十分、劍山東麓に在りし、我砲兵二中隊、西部猪圈子溝西南約千五百米突の高地に陣地を變換し、敵歩兵火の損害を避く、午後三時五十分、敵の砲兵再び劍山を猛射し、其歩兵は屢々前進を企てしも、同地守備隊の强硬なる抵抗に遇ひ、終に其目的を達すること能はず、然れども王家店南方毛道溝東方高地並に安子嶺側面に在りし敵の砲兵は其射距離六千米突に達し、其曳火射擊の威力精度共に猛烈を極め、我砲兵は甚しく苦戰し、又高地上に在る我散兵も其位置を保守すること困難なるに至れり、加之中央隊前面の敵は、目下歩兵約十大隊に增加し、加ふるに敵の軍艦現出して、我左翼隊に向て砲擊を爲すに至り、戰況轉た苦し、乃ち午後六時豫備隊たる歩兵を鐘家屯附近に進め、左縱隊長の令下に屬せられ、又目下戰場に到着しある重砲三中隊を盤道附近に、同二中隊を黄泥川大上屯東方に進め、各陣地を占領し、以て中央隊の戰鬪を援け、海軍陸戰重砲隊は南沙河口附近に陣地を占め、戰勢を張る、此夜敵は戰線に在り

て夜を徹し、銃聲終夜止まず、午後十一時頃、隊數未詳の敵兵、劍山を襲撃せしも、我兵之を擊退す、又左翼隊方面に在りては、午前六時頃老坐山北方鞍部、敵の砲兵陣地に向て、砲火を開始す、敵は二三回應射して默す、然れども其歩兵は、同山北方一帶の高地稜線に散開して、我第一線を猛射す、午前十一時半、敵の歩兵約一大隊西方より老坐山に向ひ前進す、仍て我豫備隊を第一線に增加す、午後三時頃、敵兵漸次增加し、戰勢稍々活氣を呈す、五時頃老坐山北側に在る砲兵も亦射撃を始め、彼我の銃砲聲甚だ熾なり、午後六時敵艦近海に現出し、我陣地を射撃し、我兵苦戰す、然ども敵の歩兵は敢て高地を下り前進し來らず、其兵力約三大隊なり。七月五日に在りては其右翼隊に於ては異狀なしと雖、中央隊方面に在りては午前二時半、敵の歩兵一部隊、我劍山守備たる歩兵二中隊に向ひ、正面及側面より突撃し來る、我兵格闘して之を撃退す、午前六時三十分頃より、敵兵退却を始め、午前十時に至り、一部は大白山一帶の高地に停止して工事を始め、大部は陸續西方に退却せり、午前十時半、我歩兵一小隊劍山西南稜に在る舊小哨の位地を回復せんと欲して前進し、敵の十字火により、小隊長負傷し、終に其目的を達すること能はずして還る、午前十時四十分、王家店南方高地に在る敵の砲兵、我第一線殊に劍山に向ひて射撃を開始し、約一時間に及ぶ、爾後緩徐なる速度を以て時々我が陣地内を射撃せり、又其左翼隊方面に在りては、此日朝以來老坐山附近に在りし敵の大部退却せし者の如く、同上一帶の高地上に只監視兵あるのみ、而して大白山東方高地上には、敵兵工事を施しつゝあり、午前十一時頃より、敵の艦艇五六隻、龍王塘沖附近に現はれ、時々雙頂山及黄泥川、大上屯附近の我陣地を砲撃し、午後六時に至る。

此の如くにして我軍依然舊陣地、即ち右縱隊は、其右翼隊を以て安山子附近より王家屯南方高地に亘る線を、左翼隊を以て王家屯南方高地の南麓附近より、盤道附近に亘る線を占領し中央縱隊は、盤道東南側高地より亂泥橋東南約二千米突に亘り右縱隊は、其右翼隊を以て、亂泥橋南方約三千米突の高地より、劍山、黄泥川、太上屯附近を經て、雙頂山に亘る線を占領し、敵は雙盔溝附近より、圍屏溝東北方高地、安子嶺毛道溝東方高地を經て、大白山に亘る線に在りて、彼我相對峙す

以上三日間の戰闘に於てせし露軍の動作は、單に偵察戰又は威嚇的動作にあらざること明にして察するに敵は其防禦線を堅固にせんが爲め、我軍に奪取せられた

る劍山を恢復し、尙ほ爲し得れば、青泥窪に於ける我施設を破壞し、以て旅順の命脈を永からしめんとするの企圖なりしが如し、而して我軍が、其攻擊の爲めに得たる幾多の經驗、即ち敵砲の威力、及射法、攻擊部署、及其實施夜襲の方法等は、蓋し後來我軍を益すること敢て僅少にあらず。敵の死傷に關しては其詳細を知る能はずと雖も、諸種の情報を綜合するに、三四百を下らざるが如し、又其兵力は歩兵約十三四大隊、大砲少くも二十四門、丙八門は最新式速射砲なりしがごとし。此のごとく七月三日より五日に亘れる敵逆襲を强行して終に劍山奪回の功を奏せず、我に在りては其占領を確實にし、南山鹵獲砲十二門を亂泥橋東方高地に配置し、又海軍重砲六門を西部猪圈子溝西方約千五百米突の地點に配置し、其の他、次に加ふべき打擊の準備に汲々したり、敵は盛に安子嶺方面に防禦工事を施こし、七日夜は我前哨に來襲して退却し、八日には安子嶺方面の砲臺、我左縱隊の右翼陣地を砲擊し、十二日には午前三時機關砲を有する敵兵約一中隊、我左縱隊中央隊の小哨前四百米突に現出し、我兵之れを擊退せり、翌十八日には敵砲兵我右縱隊の左翼、及び左縱隊の右翼を砲擊せり、敵情概ね此のごときに方り、總進擊の令は下れり、二十二日各部隊は、

前面の敵を攻擊するの令を受けたり、此夜敵の歩兵約一中隊黃泥川太上屯附近に於ける我前哨を襲擊し來りしも、我兵之を擊退し、二十三日一兵團を右縱隊及左縱隊の中間に於て、豫定の陣地に就かしめたり、是に於て、七月二十六日此攻擊部署に依り運動を起したるも、早朝來の濃霧に妨げられ、午前七時半、攻擊を開始す、敵は頑强なる砲戰を交へ、特に其右翼に在りし敵砲兵は正午頃まで盛に砲擊を行へり、我砲兵地形の爲め充分なる效果を收むるに至らず、之れが爲め我歩兵は正午頃、既に前進を始めたるも、敵の强硬なる抵抗に遮られ、漸く營城子、偏石棚子附近、及大白山附近を占領して日沒に至れり、同夜戰鬪隊形の儘夜を徹す七月二十七日には午前六時再び攻擊を開始し、我砲兵先づ砲火を開き、右縱隊及中央隊の大部溝口北方約二千米突の高地に向ひ前進せしに、敵は我砲兵に對して默して應ぜず、而して歩兵の近接を見るや、忽ち猛火を以て之れを迎へ、且つ傾斜急峻なる高地の斜面を攀登せざるを得ざるがため、數回の攻擊其功を奏せず、頗る苦戰せしが、午後三時頃、我砲火の援助に依り、歩兵の一部辛ふじて同高地巔頂の一部を占領せり、然れども不撓なる守兵の抵抗と近傍よりする敵の側射とは、日沒に至るまで全部の占領を許さ

ず、劇戰奮鬪最も甚し、又左縱隊は主として大白山東方標高一九五の高地に向ひ、攻擊せしが、地形と敵の動作前記の如くなるに加へて、午後二時半頃より、敵の艦艇數隻龍王塘附近に現出し劇烈に我左翼を砲擊し、大に前進運動に阻害を與へ、攻進最も惱む、午後五時頃更に行ひたる我前進運動も、亦目的を達すること能はずして止むに至れり、依て夜襲に決し、廿八日午前一時より三面合擊し、翌朝五時に至り、遂に之を占領したり、七月廿八日拂曉より更に攻擊を續行せしに、各方面の敵兵終に其頑强なる抵抗力を消耗し、午前九時より退却を始め、正午に至り各縱隊全く敵の陣地を奪取す、尋て之を追擊して、午後四時過、豫定の如く長嶺子、英名石の線を占領せり。敵の主力は旅順の本防禦線內に退却せしものゝ如し。雙臺溝、安子嶺、及大白山附近の敵の陣地は最も峻嶮なる地形を利用し、約二ヶ月の日子を以て築設したる半永久性の堡壘にして、之を據守せし兵力は、旅順守兵の殆ど全部を盡し、砲數約六十門、少なくも其四門は重砲なりしが如し。諸種の情報に依るに、二十六、七、八、三日間の戰鬪に於て、敵の死傷は少なくも一千餘名にして、重砲二門、速射砲三門、機關砲三門、其他若干我に歸したり。七月二十九日我軍占領せる線上に停止し、隊伍の整頓彈藥の補充等に多忙なり、又前面の情報偵察に從事す、七月三十日昧爽軍は夜暗を利用して、敵の陣地に近迫し、天明と共に攻擊を開始し、右縱隊は旅順街道以西の地區より前進し、果敢に敵を攻擊し、午前十一時頃、全く土城子南方一帶の高地より、大孤山東方高地に亘る線を占領す、敵は旅順要塞內に遁入し、爾後西塞の備砲を以て我陣地を探射す、敵は百餘の死屍を戰場に遺棄せり、軍は此姿勢に在りて、直に攻擊作業に着手せり、我軍旅順の市街を距る一里乃至二里なり。

七月二十六日以來連日に亘る總攻擊の結果と、二十六日に於て、營城子、偏石棚子附近及大白山附近を占領し、二十七、八、兩日の攻擊を以て、長嶺子、四字形山及龍頭山を占領し、三十日を以て土城子南方の高地より大孤山東方高地に亘れる線を占領したるものにして、タイムス記者の所謂、第一時期線を爲すものなり。而れども、大孤山小孤山の高地線にして、尙ほ敵の手中に在る限り、未だ全く敵を圍中へ牢蓋し得たりとなすべからず、敵は干大山(水師營北方約三千米突)より水師營東北約五百米突の高地附近を經て、八里庄西北約千米突の高地に亘り、盛に工事を施したり。加ふるに大孤山、小孤山、に割據せる敵は我攻擊準備作業を防害すること甚し、是に於

て軍は先づ此敵を擊攘するに決し、同日午後四時頃より攻城砲の一部を以て、大孤山を砲擊し、次て左翼隊をして同地を攻擊せしむ。左翼隊は午後七時半頃、運動を起し、地形の嶮惡と日沒來の暴風雨とを冒し、突擊を行ひ、夜半敵陣地の過半を占領す。八月八日朝、敵兵其陣地の一部を頑守し、同時敵艦數隻鹽廠近く來りて我側背を縱射し爲めに一時我前進を中止す。午後に至り再び攻城砲を以て砲擊を開始し、同時敵艦を砲擊せしむ、暫時にして敵艦港内に遁入す、尋て日沒頃、我歩兵更に突擊を行ひ、遂に山上の敵を擊退し、大孤山は午後八時半、小孤山は九日午前四時半、全く我有に歸し。敵は諸砲臺より盛に我陣地内を砲擊せり。

彼れの大孤山、小孤山、を失ふは副線に於ける劍山、歪頭山に於けるが如く、而かも直接本防禦線に對する日本軍の威嚇力を加ふること大なるが故に、此奪取は防禦軍の爲めには痛擊たらずんばあらず、是に於て八月九日午後一時半、敵歩兵五六中隊大孤山、及小孤山に向ひ襲來す。同日前面の諸砲臺、及鹽廠附近海岸に現出せる敵艦腹背より盛に我を砲擊し、爲めに我兵頗る苦戰に陷りしも、頑強に抵抗し、夕刻全く敵を擊退せり然れども敵の砲擊尙ほ依然たり。此戰我側背に向てする敵艦の砲擊、一時最も我を苦しめたるも、此方面に對したる海軍砲と、我聯合艦隊に依りて充分の掩護を得たり。兩山占領の結果、我海軍砲を以てせる旅順市街の砲擊、意外の効果を奏し、七日午前十時頃より、市内に火災を起し、午後一時にして止み、又此日午前九時四十分頃、敵艦レトウキザンに命中して、少からざる混雜を與へ、且つ汽船一隻(約二千噸)を擊沈せり、敵は砲臺及軍艦より火力を同砲に集注しつゝあるも、我に損害なし、八月十二日午前十時頃より、海軍砲を以て、旅順西港内にある、敵の戰鬪艦を砲擊す。八月十三日、五家房附近にありし約百名の敵兵、同日午後同地を燒き、東鷄冠山に退却せり。八月十四日夜、右翼隊は運動を起し、前面の敵を擊攘し、干大山より小東溝北方高地、及隋家屯を經て、隋家屯西方高地に亘る線を占領せしも、磐溝西南、及小東溝北方高地の敵兵、堅固に防禦工事を施し、頑強に抵抗せしため、之を奪取するに至らず、專ら砲兵を以て盛に敵を砲擊し、遂に夜に至る。此夜最も敵と近迫して相對峙し、八月十五日朝來更に砲擊を開始し、午前十一時頃、全く碾盤溝南方及小東溝東北高地を占領せり。

以上は是れ第一回總攻擊前に於ける經過の概要なり、今や茲に特記せざるべから

ざることあり、兩山及碾盤溝高地の喪失は、殆んど一方に於て、攻擊の進歩たると同時に、防禦軍第一の致命傷なりと謂はざるべからず。兩山の位置のみを以てするも、砲火は容赦なく其好目標として本防禦線内に落下すべし、多數の非戰員の運命甚だ憫むべきなり。日本天皇は參謀總長山縣元帥に聖旨を下し、元帥が聖旨を奉じて包圍軍司令官に傳へたる訓令に曰く、『大元帥陛下は至仁の聖旨を以て、旅順口要塞内に在る非戰員をして、成るべく鐵火の慘害を免れしめんことを望ませ給ふ、此聖旨を體し、貴官は旅順口要塞内に在る、婦人、小兒僧侶、中立國の外交官、觀戰將校にして避難を希望する者を、青泥窪に護送し、該地碇泊場司令官に引渡す可し、作戰に影響するの虞なしと認むるときは、旅順口要塞内に在る、前項以外の非戰員をも、同じく避難せしむることを得』と是に於て、司令官は十六日朝、軍參謀山岡少佐を軍使として、敵の前哨に差遣し、(水師營北方五百米突)天皇の聖旨、並に勸降書を、敵の要塞參謀長に手交せしめたり、回答を期するに、翌日午前十時を以てし、尚ほ此機會を利して獨乙皇帝の旨を下したる、海軍少佐ホブソン、及大尉ギルゲンハイムの、同地を去るべき令旨の傳達を托せんとす。十七日約の如く、敵の軍使來りしも非戰員の避難、及勸降を拒絶せり。依て軍參謀は、右獨乙皇帝の命令を二海軍官吏に手交せんことを露の軍使に托したり。勸降の拒絶は、或は其決心の軍人として、不可なきにあらずと雖も、非戰員避難の拒絶の如きは、防禦軍司令官の爲めに、痛惜すべき失當なり。當時防禦軍の被りたる損害の程度如何、其程度を差引きたる最後の可抗力量如何は、頗る疑問たりしなり。タイムス軍事記者は、批評を試みて曰く、勸降の時機に於て、露軍の損害の少量にあらざりしは勿論なり、南山の役に於て、日本軍の手に埋葬せられたるもの七百餘に上りたるより見れば、少なくとも其總數千五百の損害を受けたるべく、ステッセル將軍の報告に依れば、七月二十七日より二十九日に亘りて、死傷三千五百四十を生じ、又八月八日より十日に亘りて、千九百二十七名を生じ、其他の小交戰に於て、約五百名を生じたるものなり、尚其防禦戰より生ずる日々の損害亦少なからざるべきが故に、病院内に收容せられたれつゝある傷者は、六千に下らざるべし、尚ほ病者をも積算せば、最後の戰鬪力は二万を越えざるべし。此の如く防禦軍の受けたる、少なからざる損害と、其現に有する兵力如何に拘はらず、司令官の勸降に應へたる所は、極めて明白なり、曾て其初期に於て、彼は

其部下に向ひ、予は決して汝等に命ずるに、降伏を以てせざるべしと確言したるが故に、其約言に對し、日本軍の强襲を受け、之に對抗すべきは彼の義務なり又露軍の感謝と勅旨とに報ずる爲め、此武士的決心を貫行するものなりと。

B 其總攻擊

大孤山、小孤山、展盤溝攻陷以來、我軍は已に本線總攻擊の體勢に在り、敵帥我勸降に應ぜず、是に於て八月十九日早朝、總攻擊を開始したり。

右翼隊は石板橋北方二百十四米突高地の敵を攻擊し、午後二時半、其一部を奪取す、敵の抵抗頗る頑强にして、前後二回我第一線に向ひ逆襲し來りしも、我兵悉く之を擊退し、八月二十日午後零時半、標高百七十四米突の高地を奪取し、續で椅子山方面の敵を攻擊し、八月二十一日頑强なる敵の抵抗を排除し、遂に太平溝東南約千二百米突の高地より刺兎溝北方高地に亘る線を占領す。

中央隊及左翼隊は相連繫して前進し、總攻擊開始の夜八里庄附近より、五家房北方高地、王家屯附近を經て、小孤山西麓にある線に達したり、盤龍山東砲臺前並に東鷄冠山北砲臺前より、敵兵電流を通ずる鐵條網を張り、更に其內方一面にも鐵條網を布設しあるを以て、之が破壞に勉めたり、前日來我攻城砲並に海軍砲射擊、頗る良好にして、敵壘殊に盤龍山東砲臺、東鷄冠山北砲臺、及中間新堡壘共に、著しき損害を與へたり。是に於て、中央隊は廿一日未明、盤龍山東砲臺に向ひ、突擊を實行せるも、猛烈なる敵の機關砲の射擊と、鐵條網の破壞未だ充分ならざりしとに依り、之を攻略するに至らず、此日未明左翼隊は鐵條網を破壞し、東鷄冠山北砲臺に向ひ、彈雨を冒して猛進し、午前八時同砲臺東方約三百米突に在る中央堡壘を奪取せるも、比隣砲壘より猛烈なる側背射の爲め、損害甚しく、九時頃止むを得ず、之を抛棄せざるを得ざるに至れり。二十二日午前九時、中央隊は盤龍山東砲臺に突入し正午頃其約三分の二を奪取す、然れども砲兵複廊に據り、頑强なる抵抗を持續し、且つ同西砲臺より猛烈なる側射を受け戰況頗る慘憺たり、恰も此時、中央隊は其豫備隊より步兵二中隊を第一線に增加し、此二中隊は當時の狀況西砲臺を攻略するの必要を認め、猛火を冒して突進し奮戰激鬪終に西砲臺を奪略し、間もなく遂に全く盤龍山東砲臺を占領せり、此夜敵兵數回逆襲し來り、兩砲臺を奪回せんとして果さず、是に於て中

央及左翼隊は望臺西北高地及東鷄冠山北砲臺を奪取せんとし、翌二十三日夜、力を協せて攻擊を開始し、左翼隊の一部は望臺西北高地に達することを得たるも、敵機關砲は側方面より雨注し來り、全く猛火の中に陷り、損害を受くること多大、遂に山麓の死角に避退するに至れり、其遺憾想ふべきなり。中央隊は望臺西北方百米突の高地に向ひ左翼隊は望臺及東鷄冠山北砲臺に向ひ更に攻擊を企て、其目的を達すること能はず。

連日に亘れる第一回本線攻擊の結果は、盤龍山東西二砲臺を占領したり、十九日以來の死傷實に四千五百六十三、內戰死將校五十七、下士卒四百五十一、負傷將校六十五、下士卒二千百五十一、生死不明將校四名、下士卒千二百五十名なり、其如何に猛烈果敢なる强襲を行ひたるやを測知すべきなり。

今や顧みて此の間に於ける海上の形勢を見ざるのべからず。何となれば、陸面攻圍の進行に伴ひ敵艦の窘迫彌急なるを以て、必ずや逸脫を計るべく、已に逸脫し來るとせば龍闘虎搏の奮戰を海上に見ざるべからざればなり。

其二　第二時期以後に於ける日本海軍の運動

A　封鎖掃海及强行偵察

五月二十六日南山の攻陷するや、日本艦隊は金州半島を封鎖したり、司令長官の發したる封鎖宣言に曰く、『本官は帝國政府の命を受け、明治三十七年五月二十六日清國盛京省遼東半島南部、即ち貔子窩より普蘭店に至る一直線以南の沿岸を、帝國軍艦の充分なる兵力を以て封鎖し、並に之を維持する事、並びに封鎖を破らんとする一切の船舶に對し、國際法及帝國と他の中立諸國との條約に於て許容せられたる一切の强制手段を用ふべきことを茲に宣告す』と。旅順艦隊は已に其手足を拘束せられたり、出て丶戰はんか潛て自滅せんかの二者、其一を選まざるべからず、こゝに注意すべきは、浦鹽艦隊との策應、換言すれば、逸脫して浦盧に合せんが爲め、一方よりも浦鹽艦隊を出動せしめ、他方よりは旅順を逸脫せんとを計れるとこれなり、

此企望は敵の爲めに無理ならぬ計畫なりと謂ふ可し、故に浦鹽艦隊の行動は、單に日本の交通線を脅威せんとするの僥倖を希ひたるのみに止まらざるを知るべきなり。

陸上に於ける第一回本線總攻擊を終れる時期、即ち八月二十四日に亘れる時期間於て、海軍の行動は、右封鎖の宣告を以て始まり、掃海隊の掃海、小艦隊の强行偵察を主とし、六月二十三日、八日十日の二大海戰、及び他方に於ける浦鹽艦隊の出動の爲め、我運送船の被害、之に對する索敵行動、八月十四日の蔚山沖の大海戰等を包含するものなり。就中八月十日の海戰を以て、旅順に於ける敵の浮動力は、全く其力を失ひ、八月十四日を以て浦塩艦隊亦其力を喪失す、故に八月十日及十四日の海戰は、互に敵戰略の脈絡を詮表したるものにして、此時期に於ける最も注意を要する戰鬪なりとす、加ふるに是れ海戰以來の艦隊戰鬪として、大海戰たればなり。予輩が比較的に紀事に細を用ひたるも、これが爲めなり。

先づ其一般經過としては、强行偵察は五月三十日を以て、其第二回第一回は第二時期に屬し五月廿日なり第五章參照)を決行し、砲艦四隻驅逐隊二、水雷艇隊二は、三十日午前一時旅順港外に達し、敵要塞の砲火を冒して、更に港口の偵察を强行せり、此偵察中、第三號砲艦は敵彈を受け、戰死下士一名、負傷下士卒三名を出し、砲一門を損ぜり、其他の艦艇には一も損傷無し、敵は老鐵山に、新に一照燈を据へ、又其の山腹には一二の砲臺を新造せるを發見せり。其後第四驅逐隊が封鎖勤務中、四日午後七時四十分、敵艦グレミヤスチー形の爆沈するを見たり、同驅逐隊は當時鮮生角に近づき敵狀監視中、崂嶝嘴砲臺より十數發の砲擊を受けしを以て、少しく南方沖合に之を避けしに、港外に在りしグレミヤスチー形の敵艦、我に向ひ砲擊しつゝ進行じ來りしが、幾許もなく城頭山の南方約一海里と思はるゝ所にて、大爆煙を擧げ沈沒せり。又其側に在りしガイダマーク形の一敵艦も、同時に其艦影を沒せり。敵は城頭山老鐵山下に沿ふて、頻りに掃海を施行しつゝありしものゝ如く、掃海艇と思はるゝ船艇は、城頭山下に群集し、尙數隻の老鐵山東方に運動するを見たり、是等の船艇は、敵艦の沈沒と共に、惶惶港内に遁入せり。第四驅逐艇は數個の敵彈を受しも一の損傷なし。又一方に於て掃海隊は大連灣の掃海を强行し、其作業は三日以來南方長濤の支障ありしに拘らず、豫想外に進捗し、六日午後二時迄に發見爆沈せる

其二—第二時期以後に於ける日本海平の運動
A—封鎖掃海及强行偵察

敵の機械水雷四十一個に及ぶ、又曾て敵の水雷攀導者たりし者を利用し、一の有望なる航路をも發見し、已に小吃水船を航通せしむるを得るに至れり。此日第三艦隊司令官は松島艦より、其陸戰隊を南三山島に上陸して、其狀況を偵察せしめ、又砲艦隊は午前零時過旅順港外に至りて、第三回强行偵察を行ひ、敵は猛烈なる砲火を以て之を邀へ、第四號砲艦は敵彈を蒙むると八個に及び、多少の損害あり、卒一名戰死し、二名微傷を負ふ、又第六戰隊は、七日八日の兩日蓋平角より熊岳河附近に亘る、海岸に屯在せる敵を砲擊し、尙ほ遼東灣沿岸に於て、多少の偵察を遂げたり、其の報告に依れば、敵は蓋平縣附近に上陸するに備ふる爲め、其沿岸に約參千の步騎兵を屯し、土民の言に依るに、海岸各所に監視哨を配置し居れり、何れも我艦隊の砲擊に逢ひ、內地に逃遁せり。七日の砲擊中、曾々南行の汽車熊岳城の北方約三里にて停止し、直に北方に引返せり、爾後八日迄、汽車の通過するを認めず、八日朝蓋平角附近に於て、敵の步兵約二個中隊騎兵一個中隊の一群を猛擊して、多大の損害を與へたり、七日營口を出てたる外國船々長の言に依れば、此砲擊の爲營口に在りし露兵三千砲二十門は同地を撤退して、北方に去れりと云ふ。又八日第十水雷艇隊が復州灣にて捕へたる露兵二名は、興德縣萬家嶺を發し、復州灣より乘船し、旅順口に向はんとしたるものにして、騎兵第四旅團第一聯隊に屬する騎兵なり、其言に依れば、萬家嶺、瓦房溝、瓦房店には步兵二個聯隊、騎兵一個聯隊半、砲八門あり。五月二十八日より三十一日迄に、二度に到着せり、其指揮官はサムシン少將なり、此兵力は土民が此附近にある敵の兵數約五千と云ふに略ぼ一致す。又捕虜の言に依れば、南行の汽車は萬家嶺まで、一日三四回通じ居るも、其以南は稀れに瓦房溝まで徐行すと、此日掃海隊の作業大に進み第一區を掃了し、尙ほ北三山島西約千米突及南西に敵沈沒艦あるを發見せり。又第四驅逐隊は、十日午前十一時より、約二時間、營城子双臺溝附近の敵兵を砲擊し、是亦多少の効果を見たり。又當時大連灣附近を巡邏せし第二驅逐隊は、正午頃小平島附近まで出て來りたる、敵の驅逐艦四隻を發見し、之を鮮生角迄追擊せしが、敵は急速背進して遂に旅順口に入れり。十三日夜、山本大尉の指揮せる艦載水雷艇隊は、第三驅逐隊及び第一、第十四、第十六水雷艇隊掩護の下に更に旅順口の强行偵察を行ひ、各艇敵に發見さるゝことなく、探海燈光の下を潛りて、豫定の位置に巧に機械水雷を沈置して歸航せり。十四日第三驅逐隊及び第

一、第十四、第十六水雷艇隊は小平島附近に於ける我陸軍の威力偵察に勢援する爲め、朝來小平島以西の陸岸に在る敵兵、及び敵の哨所等を砲擊しつゝありしが、午後零時三十分頃敵艦ノーヴキク、及び驅逐艦十隻旅順口の方向より突進し來るに會し各隊は盛に之と砲戰しつゝ漸次退却して、敵を誘致せしも、午後三時頃に至り、敵は遂に引還せり、我に一の損害なく、各隊は日沒後再び當夜の豫定哨區に進めり。

B 浦鹽艦隊の來襲—上村艦隊の索敵行動

此旅順艦隊一部の突出の一方には、浦鹽艦隊の出動せるあり。十五日我運送船常陸丸佐渡丸を沖の島附近に要擊し、常陸丸に搭乘したる、近衛後備歩兵聯隊長須知中佐聯隊旗を燒き敵彈に斃る、以下六百三十五名難に殉じ、海に投じ身を以て免かるゝ者僅に九十餘名、佐渡丸は將に沈まんとして僅に免かる千秋の恨事之に過ぎたるはなし。之に對し上村第二艦隊司令長官の索敵行動は、濛雨の爲めに遮ぎられ、其目的を達する能はざりしも、濛氣四塞の間、其巨艦を縱横に馳走せしめ不測の危害に遭遇せざりしは、予輩の滿足せざる可からざる所なり。同長官が深く常陸丸の遭難を恨事としたるは、其報告の文辭に溢るゝを見る。曰く『十五日午前八時、哨艦對馬の無線電信に依り、敵艦隊沖の島附近に現はれ、南方に航行するを知り、直に水雷艇隊を急行せしめ、對馬壹岐間の水道を警戒し、西方より來る船舶に對し、竹敷に避けしむべきを命じ、又門司港務部に電報を發し、西航の船舶を停止せしむべきを傳へ、在竹敷及哨艦服務中の諸艦に、無線電信を以て、至急來會すべきを命じ、本隊は對州南端を經て急航せり、當時天候次第に險惡となり、暴雨之に伴ひ屢々後續部隊を見失ふに至りしが、神崎附近に至り、一艇隊を本隊に合せ敵艦隊を北方より壓せんが爲め、針路を沖の島の北方に取れり、此間哨艦對馬は絶へず敵艦隊と觸接を保ち、敵情に關する報告を努めたり、正午哨艦對馬より、敵艦隊は沖の島南方約十五海里にありて北西に航進すとの報に接し、次て濛雨の爲め艦影を失すとの報に接す、午後一時半、沖の島南約五海里に於て、再び敵艦隊を發見せしも、濛雨の爲め直に之を見失ひたりとの報に接せり、依て針路を右轉し、敵艦隊の所在地たる沖の島の南方に邁進せしが、此時濛雨最も烈しく、視界益々狹く、敵と會せば直に接戰距離に入るべきを思ひ、益々各艦を戒飾しつゝ航進し、敵を搜索せしも、遂に之を發見す

るを得ず、此時哨艦對馬列に入るの報に接す、茲に於て本職は敵艦隊が濃氣濃密なるに乗じ既に北方に退却せるものと判斷し、之を追尾せんが爲針路を北方に轉ぜしも、雨愈烈しく視界益々狹く、敵影を發見するの望殆ど絶ゆ、依て翌朝敵と會戰するの望を以て速力を增加し、敵の退路を扼するの地點に針路を定む、此間我艦隊諸艦が高速力を以て、濃氣四塞の間に不規の運動を行ひ、毫厘の故障なかりしは、本職の滿足する所なり、此夜艇隊をして索敵運動を執らしめしも、其目的を達するを得ざりし、十六日黎明豫定地點に達す、此の時天候回復し視界亦廣かりしも、遂に敵の隻影を見ず、依て更に進路を轉じ索敵運動を繼續せしも、其効なく、十七日敵艦隊は尙本邦沿岸に在るものゝ如きを以て、之を邀擊せんが爲め、巡洋艦隊を以て搜索列を張り南下せり、此日天候至て平穩にして、視界廣く、心窃に搜索の好望なるを期せしも遂に敵艦隊に會せず、同日午後對州の北端を距る北東約百海里の地點に來りしに、無線電信に依り、北海道方面にあるの情報に接したるが故に、索敵運動を止め、同十九日歸港せり、此行動中約四畫夜の搜索運動は遂に何等の効なくして歸港するの止むを得ざるに至りしは深く遺憾とする所なり、』と

C　六月二十三日旅順口外の海戰

浦鹽艦隊の日本海出動と隔つる僅かに數日、旅順艦隊は逸脫を計れり。（其破損艦艇の應急修理稍成れりウキッツ、ツキットゲフトの公報之を證するに似たり）二十三日早朝より敵艦隊（戰鬪艦ペレスウエート、ポルターワ、セワストポリ、裝甲巡洋艦バヤーン巡洋艦、パルラダ、デアナ、アスコリッド、ノーウキク）は數隻の掃海汽艇を先頭とし、漸次に港外に出んとするものゝ如く、封鎖勤務にある我哨艦は、無線電信を以て、其擧動を警報せり。爰に於て、敵の出動に對する豫定の計畫に基き、各方面にある諸隊は直に發動の準備を整へ、在泊艦艇は遂次に出港して、急速旅順港に向ひ、特別任務にある艦艇の外、我艦艇は悉く豫定の位置に集中せり。是より先き、第一驅逐隊（司令海軍大佐淺井正次郎）第四驅逐隊及び第十四艇隊等は港外にありて、終始敵の動靜を監視せしが、午前十一時頃に至り、敵艦隊は戰艦ッエザレウキッチ、レトウキザ

ウキットゲフト少將（旅順艦隊司令官）六月十四日附の報告に據るに旅順艦隊の各艦修繕工事は皆成功を以て終れりウフトムスキー少將の下に在る各戰鬪艦、レーッエンスタイン大佐の司令の下に在る各巡洋艦及び各水雷艇皆整備を告げたり此れ各當該吏員の不屈不撓の勉强と公正無私の獻身とに由るものなり第一艦隊の將卒皆建全なりとあり

ンボペーダを加へ、全力を擧て港外に出現し、其數多の掃海船艇は、我機械水雷敷設面を航破して、漸次に通路を開かんとするを見、屢々近きて之を防害し、午後三時、第四驅逐隊第十四艇隊は此掃海を掩護せる敵の驅逐艦七隻と砲戰して之を擊退し、其一隻は我砲彈の爲めに火災を起し、港内に遁入せり、次て敵艦ノーウキック、其驅逐艦を掩護する爲め近き來り、我を砲擊せるを以て、我驅逐艇隊は遂に退却して戰隊に合せり。然るに敵は其掃海を急行し、敵の艦隊はノーウキクを先頭とし、掃海汽艇の後方に從ひ、沖合に出て來り、午後四時過ぐる頃、第三戰隊は其部下を集團して、敵と觸接を保持し、漸次に之を南方に誘致せり。敵は始めは、南東の針路を取りしが、次て正南に變針するが如くなりし、此時第一戰隊は、遇岩南方に於て、猶ほ敵の視界外にありしが、先づ驅逐隊水雷艇を集合して、襲擊準備を爲さしめ徐々に敵の洋中に出づるを待ちしが、午後六時十五分に至り、始めて敵艦隊を明に遇岩の北西約八海里に見たり、敵はッエザレウキッチを先頭とし、戰鬪艦を前に、巡洋艦を後に、十隻の單縱陣をなし、ノーウキク及逐驅艦七雙を右側に置き南に向へり、我艦隊は戰鬪旗を掲て、戰機の熟するを待てり。午後七時三十分、彼我の距離一萬四千米突に入り、

我艦隊は敵の隊列に對し、倒まにイの字を畫きしが、敵は次第に右方に針路を轉し、我と同方向に進まんとするもの〻如く、我も少しく右方に轉針して、終始敵の先頭を壓せり。然るに午後八時を過ぐるの頃、敵は遂に針路を北方に反轉し、旅順口に向ふ如くなるを以て、我艦隊は一齊に右八點に回頭し、横陣を以て暫らく之を追ひしが、時將に日沒(八時二十二分)に近く、水雷攻擊の時機、漸く熟せしを以て、午後八時二十分、驅逐隊水雷艇隊に襲擊を命じ、同時に艦隊は左八點に回頭して單縱陣に復す。各驅逐隊水雷艇隊は直に我艦隊の後尾を過ぎ、疾風の如く敵艦に向て進めり午後九時三十分の頃第十四艇隊は、港外約五海里に於て、敵艦隊の後尾に對し既に第一の襲擊を試み、第五驅逐隊之に續けり、敵の艦隊は愴惶序を亂し、旅順口に向ひしが、遂に港内に入る能はずして、午後十時三十分の頃、皆港外螢子營の砲臺の前面より、城頭山の下に投錨せり。之より終夜、我驅逐隊は敵艦隊、及び敵要塞の無數の探海燈と、猛烈なる防禦砲火を冒して、天明に至る迄、連續前後八回餘の襲擊を爲せり、此襲擊中奏功を確認したるは、午後十一時三十分頃、鮮生角の方向より迂回して急進したるは、第十六艇隊の攻擊にして、若林少佐の指揮せる白鷹はペレスウエー

ト型と見へたる敵艦の艦首に對し、斜に二個の水雷を發射したり、大襲撃の効果に付ては、敵防禦砲火の音響激甚なりしと海面を打てる敵彈に依り無數の水柱上りし爲め、我艦隊より確實に之を認め得たるものなし。翌日(廿四日)天明港外を偵察したる第四、第五驅逐隊、其他哨艦の見る所を綜合すれば、敵艦隊は數に於てベレスウエート型戰艦一隻を減し、他にセワストポリ型戰艦一隻デアナ型一等巡洋艦二隻は、自力にて航行し得ざるまで損害を受けたるものと認む、蓋し當夜月明にして襲撃に便ならざりしと、敵艦の碇泊陣列、我發射線に對して狹少の正面を現したる爲め、攻撃の効果は多大ならざりしも、我攻撃隊に於ても、敵砲火の猛烈なりしに拘らず、損傷意外に少なく、第一驅逐隊の白雲は敵彈に士官室を破られ、火災を起し、同時に舵機を損し、下士卒三名戰死し、宮川少軍醫外下士卒二名負傷し、第十四艇隊千鳥は、其後部機罐室に炸發せざる巨彈を受けたると、第二十艇隊の第六十四號艇、第十六艇隊の第六十六號艇が少許の損害を受けたると、第十二艇隊の第五十三號艇の准士官一名負傷したるに過ぎず、各戰隊の諸艦に至りては素より損傷なし。

此の如くにして敵の逸脱行動は失敗せり、爾後海面事なく唯六月二十七日、我一水雷艇は夜襲して一艦に命中し攻撃し來りたる驅逐艇の一隻を撃沈したるのみ。

六月廿日附アレキシーフ大守の報告に曰く水日旅順艦隊臨時司令長官(ウキトゲフト少將)より接手したる報告に據るに六月廿三日夜(此れは廿二日より廿三日に渉る夜)外海七哩なる外錨地警備の爲め水雷八隻を派遣し既にして各水雷艇は近接し來れる敵の各水雷艇を撃退したりしが此の戰鬪中エッセン少佐、スミルノフ大尉及び水兵二名負傷し我水雷艇隊は天明に及ぶころ港内に歸れり午前八時「ノーウキク」「ザアナ」「アスコリッド」「セバストポーリ」「ポルタワ」「ツエザレウキチ」「ポヒエダ」「ベレスウエート」「レトウキーザン」「スーヤン」「パルラダ」は單縱陣をなし出動す此の間數設水雷捜索各水雷艇は錨地の東側に水雷十箇を發見爆破す之を檢するに此の水雷は前夜旅順口外に近づき來れる敵水雷艇の敷設したるものの如し午後二時我艦隊は掃海船若干隻及び水雷艇若干隻を先頭として單縱陣をなし航路を南方に取り日本哨艦二隻は水雷艇隊と共に終始我艦隊の動靜を監視せり海岸を距ること二十哩に日本艦隊の此方に航走するを認む近づきて之を見るに其の艦隊は二等戰鬪艦一隻、一等戰艦四隻、一等甲鐵巡洋艦四隻巡洋艦七隻、三等巡洋艦五隻、汽船一隻及び三十隻の二水雷艇隊より成れり日本艦隊は漸く近づくや其の水雷艇隊を海岸と我艦隊との間に曳きて牽制せしめんと準備するもの丶如し其の意表し夜間水雷艇をして攻撃を加へ以て我若干艦をして陣形を破り早朝全艦隊を擧げて我を攻撃せんと策するに似たり本職は敵の勢力大に優勢を占め又水雷艇の多數なるに鑑みて旅順に歸り臨機の動作に出るの寧ろ危險少きを察して旅順に歸るに決し午後七時我艦隊は轉舵して旅順に向ふに敵は之を妨げんとせず又近接し來らざりき十時錨地に着して投錨せり此歸航中我殿艦數隻は日本水雷艇の攻撃を撃退したり此の夜月明敵は黎明に至るまで水雷艇攻撃を加へたるも之れ撃退したり朝に至り敵の放てる魚形水雷十箇海岸我諸艦附近に浮游するを目撃したり此れ敵が十二ケーブル以内に近接する能はず長距離より發射したるを以て命中せざりしなり水雷艇は集團して攻撃し遂くとも其の二隻だけは沈没したりと信ず

北二一第二時期以後に於ける日本海軍の逆動
C六月二十三日旅順口外の海戰

D　七月一日浦鹽艦隊の南下……上村艦隊の追擊

浦鹽艦隊の六月十五日の運動は、單に運送船の擊沈にあらずして、海峽を通過せんとするの目的に在り。七月一日午後六時四十分、敵艦ロシア、グロンボイ、リューリックの三隻、對馬東水道を南下し、海峽を通過せんとす、我艦隊は對馬壹岐の間に於て、其前路を扼し之に迫りしに、敵は我艦隊を認むるや、急に舵を轉じて、北々東に逸走せり。此時彼我の距離約十二海里、艦隊は全速力を以て之を追躡せしも、時漸く薄暮に近く、將に敵の形跡を失はんとす。我水雷艇隊の一部は益々進んで、二三海里に迫りし時、敵は探海燈を照し、猛射防戰に努む、我艦隊は益之に迫りしも、砲戰距離に達するに至らずして、午後八時五十分、突然燈火を滅して暗中に沒せり。我艦隊は百方之を搜索せしも遂に之を發見するを得ず、我艇隊も亦水雷發射距離に達するに至らずして敵を逸せり。

E　其後の旅順口海面

旅順方面に在りては第六艇隊(司令海軍少佐丙田良隆)は、七日夜旅順港口に在る敵の哨艦を襲擊する爲め、雨と霧とを冒して港口に近き、索敵せしも天明に至るまて敵を發見せず、然るに翌八日午前五時三十分に至り第五十八號艇艇長(心得海軍中尉中牟田武正)の黃金山下濠氣の內に、敵艦アスコリッドの碇泊するを認めたるを以て之れを襲擊せしが、其効果は明なるを得ず。同水雷艇隊は敵の要塞より、猛烈なる砲擊を受け、第五十八號艇、第五十九號艇に於て各下士二名重傷を負ひたるのみ。

翌九日午前七時頃より敵艦バーヤン、パルラダ、ボルタワ、ノーウキック砲艦二隻驅逐艦七隻は數多の掃海船艇を先頭として漸次に港外に出て、同日午後鮮生角より龍王塘附近まで來れり、我驅逐艦隊の一部は敵の掃海を妨害するの目的を以て、屢々之と砲戰し第三艦隊の一部は小平島附近に在りて之と對應し午後二時頃に至り、敵艦バヤーンと多少の砲火を交換せしが、午後四時に至り、敵は漸次に港內に退却せり。我艦隊には驅逐艦朝潮に於て給仕一名輕傷したるの外、一の損害なし。第六水雷艇隊は十一日午前零時過旅順港外防材附近に進航し、港口の哨艦チアナ型に對

し襲撃を試み、第五十七號艇艇長海軍大尉三田村誠造第五十九號艇艇長心得海軍中尉大寺盡吉は之に對し水雷を發射せしが、其効果は明ならざりし、敵は猛烈な砲火を以て防禦せしも我艇隊には一の損傷なし。其後海上砲火を見ざる一旬廿四日午前三時海軍大尉桑島省三の指揮せる第十四艇隊、並に特に同艇隊に附屬したる第十號第十一號の兩砲艦及三笠富士の艦載水雷艇は、鮮生角の東灣に潜伏せる、敵の驅逐隊を攻撃し、艦載水雷艇より發射したる魚形水雷は、確に三個の爆發を認め、又砲艦二隻は敵に近きて、之に猛烈なる砲火を加へたり。其結果は煙霧の爲め明ならず、我艦艇には一も損傷なし。又海軍中佐廣瀬順太郎の指揮せる掃海隊は、二十六日午前十一時過龍王島附近に於て掃海中、一砲艦は敵の水雷を拘束して之を除去せんとするとき、掃海索推進器に搦みて、進退の自由を失ひ、潮流の爲め鮮生角の方向に流され、敵の要塞及砲艦等より、猛烈なる射撃を受けたるを以て廣瀬中佐は、自ら他の砲艦を指揮し、敵砲火の下に僚艦を救助曳行する際、敵の驅逐艦急行し來りて水雷を發射せしも幸に命中せず、苦戰約一時間の後、漸く小平島の方向に退避するを得たり。此戰鬪中、救助砲艦は敵彈三個を受け、卒二名戰死し、廣瀬中佐荷村少尉?)外士卒九名負傷せり。八月五日午後四時頃、驅逐艦曙艦長海軍少佐九津見雅雄)艦長海軍少佐竹村伴吾の二隻は、敵情偵察の爲め、旅順口港外に至りしに、敵の驅逐艦十四隻急に我に向ひて突進し來り、彈着距離に入る頃、其四隻は南西に七隻は正南に、他の三隻は鮮生角の方向に針路を取り、我を包圍せんとするものゝ如く、我が二艦は午後四時四十分、約五千米突の距離より、敵と猛烈なる砲火を交換しつゝ針路を北東に取り、鮮生角の方向に進みたる敵驅逐艦三隻の前面に出で、之を壓迫猛撃したるに、敵は直に艦首を轉じて港口に遁走す、依て之を追撃し、午後六時過ぎに至れり。此時我驅逐艦電(艦長少佐篠原利七)も亦來り合し、更に南方に分離せる敵の驅逐艦十一隻に近き迫りしが、是れ亦港口に向ひたるを以て戰鬪を止めたり。我三艦には一の損傷なし、敵の驅逐艦は午後六時頃悉く港内に入れり、敵の損害に至りては明ならずと雖も、我三艦が敵の十四隻を壓迫攻撃して其活動の目的を達せしめざりし勇猛の動作は、全軍の歎賞して措かざる所なりし。

F　八月十日の大海戰

今や旅順艦隊の最後を決すべき大海戰を記せざる可からず、聯合艦隊は八月十日旅順口を脫出して、南下せんとする敵艦隊を洋中に邀擊して、之を破れり。此日朝來敵は港外の掃海を急行せるが、午前八時頃、バーヤン及び砲艦の外、諸艦悉く港口を出て、蠻子營砲臺の下に整列し、多數の掃海船及びノーウキックを先頭とし、主力艦隊之に續き、漸次洋心に進み、先づ自己の水雷敷設面を避けんが爲め、暫く西方に航し、後更に南東に針路を變ぜり。是れ我が哨艦が敵の動靜に關し、逐次電報せし所にして、其脫出最早疑なきに至れり。是より先き、我艦隊の諸艦は、特別任務炭水補充中の者の外、萬一を慮りて豫定配備に就き居たるを以て、主力艦隊は遇岩の南方にて、正午頃より西南西に向て進行せしが、此時敵艦隊は既に遇岩の西北西約十海里に其隊形を顯はし、旅艦ツェザレウキッチを先頭として、戰鬪艦六隻を前に巡洋艦三隻を後に、舳艫相銜んで單縱陣を成し、別にノーウキック及び驅逐艦八隻を其左側に置き、一隻の病院船を遙の後方に隨へたり。我が主力艦隊は、爲し得る限り、之を洋中に誘致せんと欲し、午後一時左八點に回頭して、橫陣を張り、暫く南々東に進みしも敵は一意南東方に向ひ、逸走せんとするものゝ如くなるを以て、我は更に左八點に回頭して、逆番號單縱陣となり、漸次左方に轉首して、敵の先頭を壓し、各艦徐々に遠距離射擊を開始し、敵も亦直に之に應ぜり、時に午後一時十五分なり、然るに幾くもなく敵は其針路を轉じ、南方に向ひ我艦の後方に出でんとする如くなるを以て、我は敵列に對して丁字形を畫かんと欲し、午後一時三十分右十六點に一齊回頭を爲し、約六千乃至八千米突の距離を以て、其先頭に集彈せしが、敵は再び左方に轉じて、南東に向ひし爲め、其陣形は波形を呈して重疊し、我主力艦隊は漸次北方に航進して、之を掩擊せしかば、後列に占位せる敵の巡洋艦は、大に狼狽したるものゝ如く、皆船艦の非戰側に出て、敵の隊形は自然に不規則なる二列縱陣の如きものとなり、專心戰鬪を避けて南東に向ひ、逸走せり。是に於て我主力艦隊

アドミラルマッセヴイチ報告に曰く
八月十日早天我旅順艦隊は出發し午前九時に至りて悉く港外に出でたり我艦隊は戰鬪艦六隻、巡洋艦アスコリド、ダヤナ、パルラダ、ノーウキクの四隻、水雷艇八隻より成り日本艦隊は左の勢力より成りて我が艦隊に追尾せり即ち其の第一分艦隊は戰鬪艦、朝日、三笠、富士、八島、敷島及び巡洋艦日進、春日より成り其の第二分艦隊は巡洋艦八雲、笠置、千歲、高砂より成り其の第三分艦隊は巡洋艦秋津洲、出雲、松島、嚴島、橋立及び戰鬪艦鎮遠より成り外に水雷艇約卅隻ありたり我艦隊は敵艦の戰列を通過せんとして運動したり其の間敵の諸水雷艇は我前面に浮動水雷を布き我回轉をして極めて困難ならしめたり
午後一時我艦隊は四十分間交戰の後敵の戰列内を通過するを得て山東方面に向て針路を取りしに敵は全速力を出して我

も右に轉回して、敵の前路を遮らんとせしが此の企圖は時期少しく後れし爲め、其目的を遂ぐると能はず、已むを得ず敵と平行航路を取り、我先頭は敵列の中央と並頭して之を追擊せしが、敵は漸次に其針路を左方に取り、距離次第に遠行たるを以て、午後三時卅分射擊を中止せり。此時に方り、我乙艦隊は後方に占位して、敵の退路を抑へ、丙艦隊は主力艦隊の左後方五海里の處に在りて、未だ此の初回の會戰に參與せざりき。此隊制を以て敵を追ふこと約三時間に及び速力漸次彼を後殿して遂に少しく其前方に出て、午後五時三十三分山東角の東方約四十

艦隊を道尾し徐々我を控制して五時再び互に戰鬪を交へ對時間に渉りしも彼我孰れも何等の利益を占むるに至らざりき。此の會戰中我艦隊司令長官は戰死し戰闘艦ツェザレヴィチ艦長負傷して知覺を失せり殆ど同時に同艦は機關及び舵機を損傷し已むを得ず四十分間停止したり他の諸艦は之が爲にツェザレヴィチを圍繞して回轉するの已む無きに至る因て司令官ツェザレヴィチ艦長ヴクトムスキー公は司令長官の職を取るツェザレヴィチは既に艦隊に追隨するゝと能はずして其の嚮導を失するに至れるを以て夜に入て後南方に針路を取り我汽力を以て浦鹽斯德に到達せんと企てたり夜間諸水雷艇より攻擊を受け翌早天山東角附近に出づ艦隊司令官は同艦の損傷を檢査し其の程度を確認して其の遂に浦鹽斯德に到達する能はざるを斷定し因て同艦長をして修繕の爲め膠州灣に進行することを許したり

戰死者中には司令長官ウキトゲフド少將、航海長アザレフ大尉、航海士官ドゥケイシエヴキチ少尉あり負傷者負べるは本艦(參謀長マツセヴキチ大佐)及び外八名なり下士卒には戰傷若干名あるも今之を確知するを得ず

本艦は午後(十二日)九時膠州灣に逃したり港内には既に遠洋艦ノーヴキク及び水雷艇ベスチュンミーありたり

海里の地點に於て彼我先頭約七千米突に近づける頃、再び戰鬪を開始し漸次接近して、敵の先頭を壓迫し我砲擊益々顯著なる効果を呈し、激戰約三時間の後敵の砲爽破々裂べたる如くなりしが、午後六時三十分頃、敵の先頭艦ツェザレヴィチの司令塔に我十二吋砲彈の爆裂すると、同時に其舵機を損じたるものゝ如く急に左舷に二回轉して自己の列中に突入し、敵の陣形之より亂れ各艦或は右し或は左し、殆ど一處に群居せるものゝ如し、是に於て主力艦隊は漸次北方に轉行して、敵の前路を包み、乙艦隊の二艦も我後尾に來り合し、敵を三千二百乃至五千米突の距離に置て、掩擊頗る勉む、敵は愈々潰亂して、各艦各自に西方に逃れんとするもの、如くなりしが、恰も好し後れて戰場に到達したる丁艦隊の一部及び他の一隻は、敵の北方に出て之を横擊し、主力艦隊は左四點に回頭し梯陣を以て益々敵に迫りしが、敵艦隊は全く四分五裂の狀態となりデスコリッドブーヴキック及び驅逐艦數隻は、先づ南東に逃走せんとし、我後方を警戒し居たる丙艦隊に猛擊せられ、更に多少の損害を蒙むれり。然るに最も遺憾なるは戰鬪いまだ終らざるに、日は全く沒し、遂に盤戰に於て敵を擊滅することを能はず、各艦隊は戰鬪を我驅逐水雷艇隊に讓りて各豫

定航路に向へり。是れより先き、我驅逐隊水雷艇隊は戰場外に在りて戰鬪の進行に注視し居りしが、日沒頃より漸次敵に觸接し、其主力が旅順口に退却するを追ひ、晝間の戰場終點より遇岩附近までの間、各隊個々に敵を認めて襲擊を爲したりしが、其効果に至りては暗夜の爲め明ならず。又主力艦隊、乙艦隊、丙艦隊は夜に入りてより、敵の南下するを防遏する爲め、各豫定航路を取りて黃海を南下し、翌未明より針路を反轉し、搜索列を東西に張りて、航行せしが、丙艦隊は午前五時三十分アスコリッドの南航するを發見し、約四時間之を追尾せしも、敵の速力較々優りたるを以て、遂に追及する能はず。又乙艦隊も朝鮮沿岸附近にて敵の驅逐艦二隻を發見追尾せしが、敵は全速力にて白翎島附近の淺處に逃入り、日沒に至り其影を失へり。又主力艦隊も、驅逐艇一隻を發見し、之れを追擊したるも、速力及ばずして之を逸せり。

此の連續せる戰鬪に於て、敵の戰艦は我主力艦隊の攻擊目標たりしを以て、其損害の多大なるは、我砲彈の効力に徵し、信じて疑はざる所にして、其死傷も必ず少なからざるべし。但し巡洋艦に至りては、比較的損害少なしと認む、我諸艦は長時の激戰に比して損害意外に少なく、孰れも戰鬪航海に支障なし、死傷は全艦隊を通じて將校以下百九十三名驅逐隊水雷艇隊にて將校以下二十三名なり。

之を露國側の報告を總合せる、マリーネルンド、シャウの紀事に徵するに曰く、浦鹽に於ける露國艦隊と相合せんがため、八月十日午前六時ウイットゲフト少將は、旅順艦隊を指揮して出發せり。同艦隊は左の勢力に依りて成立せり。

戰鬪艦　ツエザレウイッチ（司令長官ウイットゲフト少將旗艦）レトウイザン、ポビエダ、ペレスウエート（司令官ウフトムスキー少將旗艦）ポルタワ、セワストポリー

大巡洋艦　アスコリッド（フォン、ライッエンスタイン少將旗艦）バルラダ、ヂヤナ

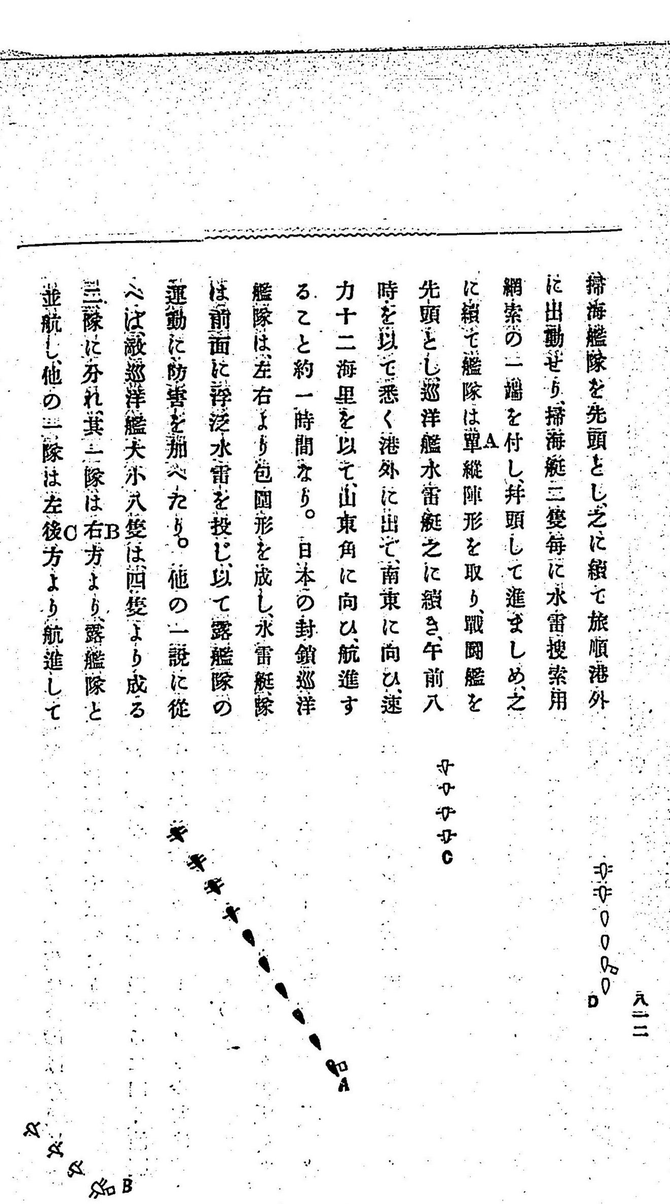
小巡洋艦　ノーウイック

水雷艇　八隻

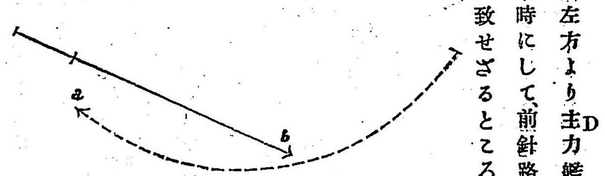
大巡洋艦バヤーヤンハ敗設水雷に依り損傷したる爲め港內に殘留せり

日本艦隊が如何なる封鎖配備を取れるやは、唯港口前方を監視せる、巡洋艦の二三隻と數隻の水雷艇とを知るあるのみ、主力艦隊の所在は明ならず、露艦隊は一隊の

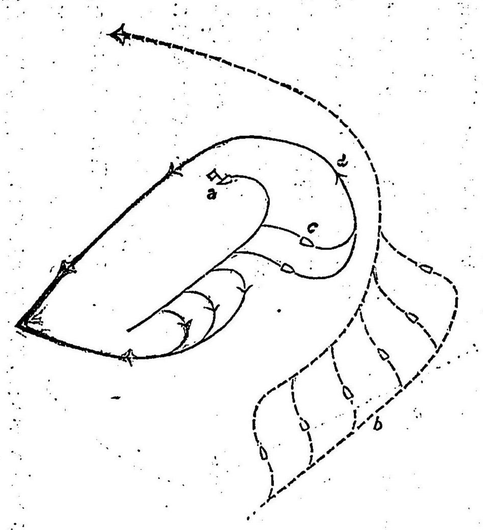
掃海艦隊を先頭とし之に續て旅順港外に出動せり、掃海艇三隻毎に水雷捜索用網索の一端を付し、并頭して進ましめ、之に續て艦隊は單縦陣形を取り戰闘艦を先頭とし、巡洋艦水雷艇之に續き、午前八時を以て悉く港外に出て南東に向ひ、速力十二海里を以て山東角に向ひ航進すること約一時間なり。日本の封鎖巡洋艦隊は左右より包圍形を成し、水雷艇隊は前面に浮泛水雷を投じ、以て露艦隊の運動に防害を加へたり。他の一説に從へば敵巡洋艦大小八隻は四隻より成る三隊に分れ其二隊は右方より、露艦隊と並航し、他の二隊は左後方より航進して



觸接を保ち、時に遙か前方に、小巡洋艦現はれ次で午前十一時頃左方より主力艦隊現はれたり、是に於てウイツトゲフト提督は、針路を右轉し、又少時にして、前針路に復して遠距離戰を開けり。第二次の戰闘狀況に於ては、其說一致せざるところあり、甲は曰く、ツエザレウイツチ及アスコリッド乘組將校の一部は、右舷に敵を見て、通過戰を行ふこと數次に及びたるも遠大なる距離は、射撃の効果に達すべきなしと、乙は曰く敵主力は遠距離を取て先頭を通過し、右舷に旋回し、單に通過戰を行ふこと一回なりしと。此通過戰後、南東の針路を續行したる露艦に對し、日本艦隊は、敵の右方に於て轉回し、齊しく十海里乃至十二海里距離の度疑ふへし)の間隔を取りて並進せり、露艦隊は以爲らく、日本艦隊の機器氣罐は長期に亘れる封鎖勤務に依り、已に衰へ、從て速力亦我に比して如かずと。此推定に依り急速力以て逸走を遂げんとしたり。然れども日本艦隊は已に其三時を以て追及し來りて、射撃を開けり、必竟日本主力



艦隊の航力の遲緩なりしは大巡洋艦數隻の來會せんことを待ちづゝありしものにして、大巡洋艦は已に二時より三時に亘りて、左後方に現出し、遠距離射擊を開始せり、是に於て戰鬪局面は正に酣に、日本艦隊瞬一瞬に益々接近の度を加へ左方より巡洋艦隊、右方より戰鬪艦隊、專ら砲火を旗艦に集中し、旗艦は其諸要部に大口徑砲彈の命中を受け、午後五時ウイツトゲフト提督戰死し、舵器破損して亦其用を爲さゞるに至れり。兩艦隊の先頭は、各幷頭に在り、六千乃至七千米突の距離を保持せり。提督の戰死は、前檣命中彈の爲めに幕僚の半部と共に戰死



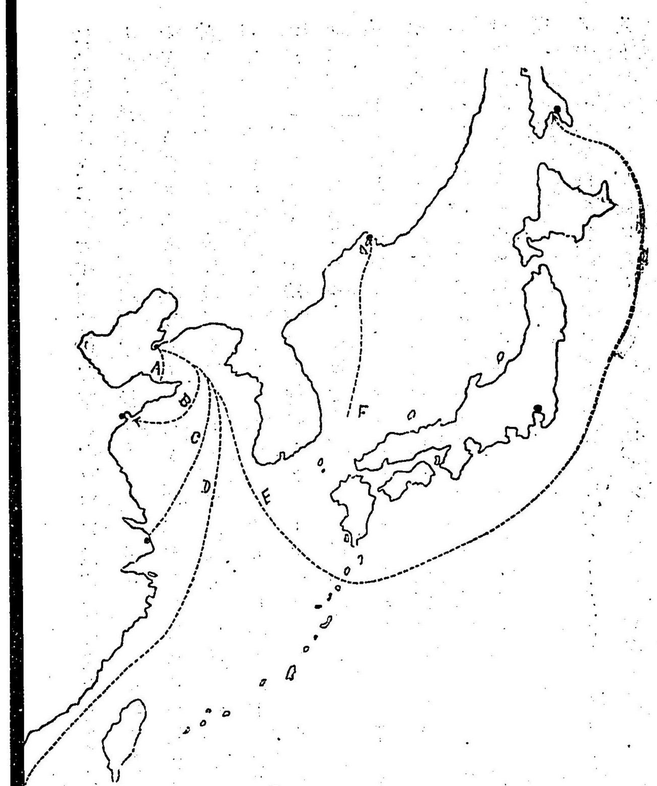
し、他の一半は爲めに斃せり。此時ツエザレウキツチ[a]は、突然左方に旋回し、戰線外に逸走せり。其將に戰線外に脫出せんとするや、ペレスウエートに向ひ、司令權を移すと信號し、同艦之に答へず、時に恰もレトウイザンは續行せずと信號し、左方[c]に旋回し、砲火の集中を冒して、敵主力に向ひ突進し、敵に迫ること千五百米突にして再び右轉し、ツエザレウイツケを一周し、旅順に向ひ航路を取り航走せり、ポピエダ以下三艦皆之に倣へり。同艦隊は左八點の一齊旋回を以て、之が衝角攻擊を避けたり、レトウイザンの此の行動は、陣形を紛亂するの原因となりたり。日本主力艦[b]隊は、少時砲擊を中止し、逃走艦隊に追及せざりしが如し。天正に黃昏、單獨戰場に殘れる、ツエザレウイチは其損傷の度、到底日本艦隊の主力に向ふべくもあらず、且つ其四邊に機會を伺へる水雷艇あるを察し、旅順に向ひ航走するを斷念し、浦鹽に逸走せんとし、決然東の針路に走れり、而かも尙ほ其水雷の危險を避けんには、非常の高速力に依らざるべからず、然れども烟筒の破損に依り、速力の減耗を補ふには、石炭の消費を增大せざるべからず、故に通常は八〇噸なるものも實に四七〇噸を費せり。日本の砲火の威力の爲め、司令塔の羅針盤は粉飛し、海圖は片裂し、爆裂の

震動は、凡てのコンパスを破了し、其用を爲さず、僅に星斗を指針とし、艦隊唯運を天に任せ航進し、翌曉山東岬角を北東に望見するを得たりと、要するに十日の海戰敗因の第一導火となりしものは、レトウイザンの妄動なりとせり。

G 大海戰以後の海面

今や敵艦隊は餘喘を餘すのみ、第一驅逐隊(司令中佐藤本秀四郎)の朝潮艦長少佐松光敬及霞艦長少佐太島正毅は此夜四散せる敵艦隊を搜索のため、巡航中遙に敵の驅逐艦らしきもの一隻西方に急航するを認め、直に之を追擊したるも、夜暗の爲め其踪跡を失せり。尙ほ翌十一日に亘り搜索を續行して、其芝罘に潛入したることを知りたるを以て、附近領海外に漂泊して、其出港を待ちたるも、日沒後に至り、尙ほ出港せず、藤本司令は敵驅逐艦が夜陰に乘じ、出港して我艦隊又は商船に危害を加ふべきを慮り、朝潮及霞を率ゐて芝罘港に入りたるに、敵艦はレシーテリヌイにして、未だ其武裝を解きたるの形跡なきを以て、海軍中尉寺島宇瑳美を遣して、敵艦長に對し、明日未明までに港外に出づるか、又は降伏するかを直接に交渉せり。然るに敵艦長は之に應せず、問答中部下に向ひ機械破壞發砲發火と命令しつゝ、突如として寺島中尉を抱へ、共に海中に投せり、其他の敵兵も同時に我に對して、抗敵行爲を始めたり、此間前部彈藥庫附近に於て火藥爆發し爲めに我派遣員死傷するものあり此に於て我は終に敵艦を捕獲し之を曳歸れり、我死傷者戰死下士一、重傷下士以下四、輕傷朝潮乘組寺島中尉・通譯及下士以下九、此日小平島附近を警戒せる摩耶、赤城の二砲艦は、午前十時頃敵の砲艦ギリヤーク及オトワズヌイの二隻鮮生角附近に出て來りて、我陸軍の占領區を砲擊するを認め、直に進みて龍王塘に至り、之を砲擊せしに、赤城の一彈ギリヤークに命中し、敵は旅順方向に退却せり。此時嶗崖嘴附近の敵よりも頻に我二艦を砲擊せしが一も損傷を受けざりし。又烏海以下の砲艦隊は驅逐隊と共に、同日朝來前日の海戰より敗走せし敵艦の旅順に入るを追蹤し、敵狀偵察を務め、其迅速確實なる報告は、我艦隊の行動に尠からざる利益を與へたり。

八月十日大海戰の後敵艦ツェザレウヰッチ[B]は膠洲灣に入り、アスコリッド[C]は上海に入り、デヤナ[D]は柴棍に走り、いづれも武裝を解き、(驅逐艦も亦遁匿す而れども其注意



すべきものは芝罘に竄入したるレシテリヌイにして彼は芝罘より本國に向ひ重要なる電報を發送したるもの日本海軍かこれを捕獲したるに依り起りたる國際法問題あればなり)ノーウキックは、遠く樺太方面に逃れ、爾餘は皆旅順港内に逃歸したるものなり。我千歳艦は二十日未明、禮文島の北西二十哩に達し、宗谷海峽の中央に進みしも、敵の艦隊見る所なし、八時四分宗谷岬に接近し、位置を確めんとする際禮文島西方六十哩より索敵しつゝ來航せる對馬に會し、千歳は直ちに宗谷岬とシレトコ岬との一線上に進みて監視の任に當り對馬をして十時三十分よりコルサコフ港外に於て敵艦ノーウキックを發見して之を砲擊せしめ、敵は五時四十分、錨地に引返して盛に白煙を揚げ其艦影を掩ふに至れり。此時對馬は、敵彈の爲め石炭庫を擊れ、一時彈着外に出て應急修理に着手せり。千歳は對馬の電信に接し、直ちに戰場に向ひしも、日沒に至りしを以て引返し、同夜對馬をして海峽を監視せしめ、千歳は港外を警戒せり。廿一日未明、千歳はコルサコフ港錨地に進み、ノーウキックの已に市街陸岸に近く淺瀬に乘揚げ乘員の退去しつゝある如きを認め、六時廿五分より、七時十四分まで之を砲擊し、彼の船體は一時全く黑煙に包まれたり。

A 北二一第二時期以後に於ける日本海軍の運動
G 大海戰後の海面

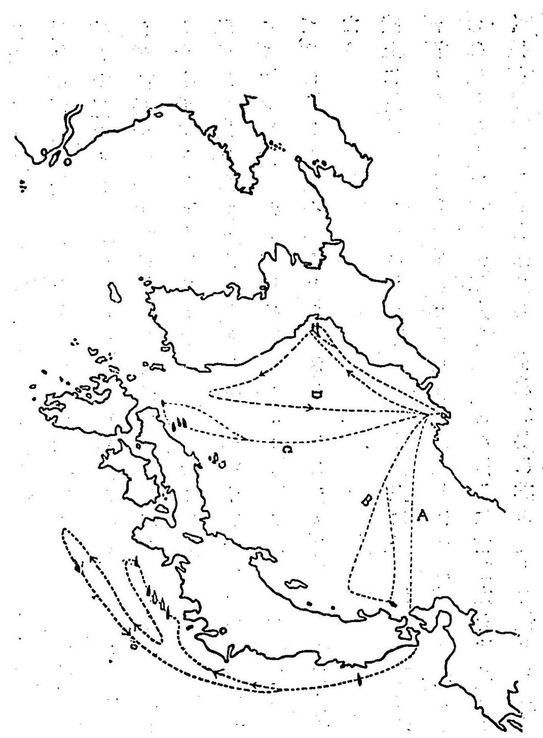
蓋し敵は其乘員の艦を去るに臨み要部を破壞し、右舷に傾斜し、其上部に當れる左舷側に於てすら、最下甲板後部舷窓は水中に沒するに至れり。

H　旅順艦隊の逸脫策應の爲め浦鹽艦隊の出動…蔚山沖海戰

旅順艦隊の逸脫と同時に、浦鹽艦隊は運動を起したり。之を記するの前、其後の敵の行動を記せざるべからず。彼は七月一日、上村艦隊の追擊を避け、其後七月廿日津輕海峽を通過し、南下して東京灣口に來り、商船を拿捕擊沈し、七月卅日津輕海峽を通過して歸港せり、今や十四日天明出雲艦長海軍大佐吉松茂太郎(磐手艦長海軍大佐武宮邦鼎)は韓國蔚山沖に於て索敵行動中、浦鹽艦隊三隻の南航するを發見せり、敵は我艦隊を見るや、北に向ひ遁走せんとするを以て、直に其前路を扼し、午前五時二十三分に至り戰鬪を開始せり、敵の殿艦リューリックは、常に後れ勝ちにて斷へず激烈なる砲火を被むれり。前續二艦は、屢々勇敢に之を掩護し、遠ざかれば轉回して之に近つき、近けば又前進せり、依て我隊は屢々T字形を畫きて、敵に集彈するの利を得たり、其結果敵艦をして、何れも數次大火災を起し、多大の損害を負はしめたり、特にリューリックの如きは、遂に進退の自由を失ひ、砲力も亦全滅に近づき、時々緩漫なる發射を爲すのみにして、其艦尾は著しく沈み、且つ少しく左舷に傾斜するを見たりしが、敵は遂に之を捨てゝ遁走せり、恰も好し、第四戰隊戰場に近つき、浪速(艦長大佐和田賢助)高千穗(艦長海軍大佐毛利一兵衛)のリューリック攻擊に進むを見たるを以て、本隊はロシヤグロンボイを追擊せり、此間激戰約五時間に及び、敵の二艦は全速力を以て遁走せり。午前十時十九分、我艦隊は右舷に回頭しリューリック搜索の爲め南航せるに、リューリックは遂に沈沒せるの報に接するを以て、直に全艦の集合を命じ、其の沈沒位置に至り、浮泳する人員約六百名を救助し得たり。

陸上に於けるミスチエンコ將軍の如く海上に於て浦鹽艦隊は我交通輸送線の右側面を伺ひたり、彼は北海[B]に我商船を擊沈し津輕海峽[A]を通過して我榻前[A]に中立國の船舶を暴し、元山に金州丸[D]を襲ひ、沖島附近に常陸丸[C]を沈め、其南下運動は今や全く敗折せり、其二艦を逸するも彼れ容易に其戰鬪力を恢復すると能はず。其恢復

北二—第二時以後に於ける日本海軍の運動
A 旅順艦隊逸脫策應の爲め浦鹽艦隊の出動—蔚山沖海戰



する能はざるの期間は日本海面稍憂ふべきを減じつゝあり。

I　八月十日十四日の兩海戰を論す

八月十日十四日に於ける、旅順浦鹽兩艦隊の行動は一貫の目的に在りしことは、マリーネ、ルンド、シャウの之を明言せる所なり、今や之を併せて聊か軍事批評家の所論を見ざる可からず。或は曰く

狠山の一たび日本軍の手中に歸するや、其艦隊著しく危險の位置に立てる場合となれり、八月七日より九日に至る日本軍の砲擊は、是れ十日逸出の眞原因を來たしたるものなり、危險は層一層に加はり來り、ウフトムヌキー公の位置は、頗る不安なるに至れり。若し果して、露國皇帝が公に勅命するに、旅順口に歸還する勿らんと を以てしたりとせんか、公は直に其航行に耐えたる全勢力を擧げて、其逸脫を再び せざるべからざるなり。十日海戰に於ける結果に就き考察するに、この艦隊にして戰鬪は耐へざるもの若干變あるに似たり、東郷提督の見て以て敵旗艦なりと爲せる、レトウイザンの砲座は、日本砲彈の集中を受けて破壞し、ポビエタは其二檣を

折りたり、東郷提督は戰艦五隻に甚しき損害を與へたりと爲せり。提督の旗艦は戰況の知るに最も適當なる位置に在りたるものなり、若しウフトムスキー公が、戰ふべき位置にあらざるものとせんか、蓋し三策あり、即ち出てゝ黄金山下に碇泊するに在ると是れ一策なり、此策又一難を伴ふ、何となれば陸上よりの火力には、其安全を保し得べきも、水雷の危險あり。又港内に潜伏するに在ると其二策なり、而れども此策は唯僥倖を希ふに過ぎざるなり。又其兵員砲煩を陸上に移動し、最後の場合には之を爆破するの準備を施し、以て防禦戰を遂行するに在り是其三なり。又曰く、假令其詳報に依らず、單に其概報に依るも、尚ほ其教訓を演繹するを得べきなり、既往半歳間に於ける、海上行動の動力中心及び其之をして然らしめたる戰鬪の性質は、軍艦々種に於て、實際に於ては、戰鬪艦が其戰に參加せざりし場合にも、其指導は常に戰鬪艦に屬せしものなるに拘はらず、戰鬪艦以外に重きを爲さんとするの傾を現はせしも八月十日の一戰は正に戰鬪の其中心力たることを證明したるものなり。艦隊戰の場合に於て、戰鬪艦以外、他種軍艦は、其位置第二流に在らざるべかちず、潰散したる露國巡洋艦の高速力なるものは逃れ、戰線を逃避したる驅逐艦は遂に參加せず、日本裝甲巡洋艦の參加程度の幾何なりしや明確ならず、其二三等巡洋艦は露國巡洋艦の逸走を遮斷すること能はず、其水雷艇隊は、唯一のパルラダを除き、敵の損傷戰艦に危害を加ふること大なる能はざりしが如し。而してパルラダの損傷程度明確なる能はざるなり。是故に艦隊戰の場合には、他艦種の艦隊の位置は、其補助的にあるものにして、主として重きを戰鬪艦の上に置かざるべからず、日本は五隻、露國は六隻にして、日本は裝甲巡洋艦を以て、其不足を補ひたりとせば、其對抗は不權衡なるものにあらず、而かも日本の勝者たるを得たる所以は其原因として其速力、其指揮の、屑一屑有効たるにあるべきは、論ずるを俟たずと雖も、砲撃照準の正確、其猛撃の峻急なるは、正にその至要なるものにして、歸する所は、其訓練の周到精緻なるに在りと謂ふべし。其十二吋砲のツエザレウイッチに命中するもの、數分時を出てずして三回に及び、艦列は亂離し、旗艦は自由を失ひ、司令官は戰死し、損揮亦見るべからざるに至らしめたり。重砲の優絶は、正に其技倆を實證するに堪えたるものなり。八月十四日蔚山沖海戰に於ける、リューリックの如き、亦精妙なる日本艦隊の砲撃に依りて劈破せられ、其僚艦二隻は大損害を受

け數次火を失し、死傷四百四十二名を生ぜり。武器の用ひられたるもの砲彈のみ。上村提督の其最後の打擊をグロンボイ、ロシヤ、に擴及せざりし理由は、未だ明白ならず、ノーウキック已に其終焉を見たるが故に、八月十日に於ける旅順口を出動したる艦隊中バルラダを餘して、他は其結果悉く明白なりと。

又有名なるクラード中佐は得意の皮肉なる批評を試みて曰く八月十日日本艦隊が、我浦鹽巡洋支艦隊に對し、二倍の力を割きたるは、法則に反したるものにして、今後此の如きことあるべきか、予は確かに當否を論ずる能はざるも、八月十日日本艦隊の行動は失錯ありしものと認めんと欲す。此日我艦隊の旅順港を出るや、驅逐隊レシーテリトヌイも亦其中に在り、十一日黎明を以て芝罘に入り艦隊出動の報告を爲せり、此報の浦鹽に達せしは、同日午後六時なり、此報に接したる巡洋支艦隊は、出動準備に十二時間を費し、十二日午前六時、旅順艦隊を迎へんが爲め出港し、十四日拂曉を以て朝鮮海峽に近き、こゝに上村艦隊と衝突したり浦鹽艦隊出動の報の英國に刊報せられたるは、此日の午後刊行の新聞に載錄せられたり、一方には無線電信の自由を有する日本が、常に陸上との交信を勉むる、東郷及上村二將軍は、早

くも此報告に接し居たるなるべし、蓋し我は通信傳達の不便を有し、敵は容易に之を得るの差ある所以にして、今此巡洋支隊の出港は、現に八月十日海戰の終りたる後にして、我艦隊は敗れて港内に退き、戰艦ツエザレウキッチは膠州に奔逃し、巡洋艦アスコリッドは上海港に竄入したる後なり。是等の情報の日本人に知られざるの筈なきなり、リューリックの擊沈せられたる報導の浦鹽に達せしは、其十六日にして、(一昼夜前に在りては、極めて信ずべからざる報道の新聞紙上に掲載せられたれども)八月十日海戰の報告を得たるは、八月十四日以後に在り、(膠州灣より發せられたるマッセーウキチ少將の報告に依り)アスコリッドの運命は、十七日に分明し、艦隊の旅順に敗歸したるの報告は、(ウフトムスキー公報告二十四日に在り、事實此の如くなる以上、日本海軍は浦鹽艦隊出動の報告を得たる後に於て、上村艦隊を派遣すべき十分の時間を有し、又上村艦隊は旅順艦隊に顧慮するの要なく、十分に之に當るを得たりしならん、之に反し、エッセン少將は、何等海戰の消息を耳にせず、其艦隊を率ゐて、上村艦隊と會戰したるものなり。上村艦隊は、東郷艦隊の豫備として、近距離に在りしものならんには、東郷艦隊が若し旅順艦隊の逸出を認めしと

き、之を招致し得べきに、而かも之を割きたるは、失錯なりとすべし、彼は此失錯を再びするとなかるべきなり。と

之を彼れ巡洋艦隊司令長官の報告に徴するに、(一九〇四年八月十九日露國官報一七九號)八月一日(露歷なる八月十四日なり)午前四時三十分、我巡洋艦(ロシヤ、グロムボイ、リューリック)は出動して釜山を距る四十二海里、對馬島北砲臺を距る六十六海里、釜山の平行線に至り、西方に回轉し、少時にして盤手型の裝甲巡洋艦四隻より成れる日本艦隊が、北方約八海里、右方正横の前面に於て、我に平行駛航するを望む、我は敵開海面に出でんと欲し、左に回轉し、北四分の一東の針路を取りたりしも、日本艦隊の速力優捷なるが爲め、直に回轉して我と平行し、終に我をして戰ふの外術なきに至らしめたり。午前五時、戰鬪を開始し、二者相距る六十鏈以上なり、時に浪速型二等巡洋艦一隻、海峽内より駛走し來り、戰鬪に加はらんとするを見る、敵已に我計畫を看破し、我に接近して妨害を試むるを以て、好機を逸せず直に右轉し、北四分の一西の針路を取り、海岸に接して北行せんとす、此計畫は敵の覺知する所とならざるを以て、速力を十七海里に增加したり。時にリューリックは信號して曰く、「能用を爲さず」と、依て司令官は「機關を以て操縦すべし」と信號し、航走を續行せしも、リューリックは隊列を脱したるまゝ答ふる所なし、敵の砲火は正にリューリック、に集中するを見たるを以て、之を掩護し應急修理を爲さしむるの必要を認め、敵の砲火をして轉じて之を我艦に移らしめんとを勉めたり。此時に當り、敵艦の勢力益々加はらんとし、二三等巡洋艦各一隻も亦戰鬪に參加せんとし、リューリック終に「操縦する能はず」と信號したるを以て、其前方に行動し、同艦をして朝鮮海岸に向ひ航走せしむること二海里なるを得せしめ、「浦」盥に行く」と信號したるに對し、同艦は之を了解し、針路を其方向に轉じ、艦首白波を漲らし、逃走を力むるもの、如し、是に於てロシヤ、グロムボイ二艦は航路を北西に取り、敵と相距ること三十二鏈乃至四十二鏈、平行航走し、終始砲火を交換せり。戰鬪實に二時間に亘れり。リューリックの位置は、二艦を距る南西三四海里に在り、ロシヤは烟突を貫傷せられたるもの三、汽力爲に衰へ、汽鑵三個其用を爲さゞるに至れり。九時三十分、リューリックの航力遲緩と爲り、今や艦首を轉じて、敵の二等巡洋艦二隻と砲火を交換しつゝあるを認めたれども、上村中將の本隊は、我と平行を保つが故に、止む得ず、リューリックと自然に隔離し、其艦影を見る能はざるに至

れり。而れども尚ほ其位置に姑く接觸を保ち敵を北方に誘致し、其間リューリックをして、強力ならざる敵に當り、舵機を修理し、單獨に浦鹽に航走せしめんとを計りしも、敵は三十分の後殆ど十時に近き頃に及び、我と相距つる四十二鏈にして、猛烈なる砲火を集注し、正に突進し來るべきものと推測せしに、漸次右に回轉して引揚げたり。戰鬪五時間に亘り激烈を極む爲めにロシヤに於ける損害は、吃水部水線部に破孔十個に及び、グロンボイは六個に達したり。死傷は將校全數の半數以上に達し、下士以下は其全員の二割五分に及べり、精鋭なる敵に對し再びリューリックと隔離したるの場所即ち南方三十海里の水面に反航し、戰鬪を繰回へすと能はざりしなり。天候幸に平穩なるを利し戰鬪を止め、應急修理を施こし、歸航を必要としたり、此敵報の末段には今一歩の窮追を怖れし者の如し、軍事批評家は曰く浦鹽二艦の敗れて逃走するや上村中將は之を追窮し、擊沈するか、又は捕獲して戰鬪の結果を十分ならしむるか二者其一に出でざる可からず、唯リューリック乘員の救助に其力を盡したるは、人道論者の稱揚する所なりと雖も、若し海軍的專門眼を以て論ずる時は、二艦をして逃走せしめたるは戰術上の過失なり。假令浦鹽艦隊は其武力微弱なりと雖も、已に數々其示したる北海、及日本海上に於ける脅威動作に由り、日本の爲めに計るに、之を全滅するは頗る必要なるべきなり若し二艦にして全滅せば、上村艦隊は直に其勢力を東郷提督に致すを得しならん、婦人の仁にあらざる限り、二艦追擊の爲めに、リューリックは顧みるの暇なきを咎めざる可しブルッセル、ヘーグ兩會議に於ける議定の制限に違反せざるのみならず、已に其爲して可なる以上、豈に之を爲して不可なるの理由あらむや。特定の戰鬪の目的を達したる後に於ては、負傷者を救ふべき爲め、戰鬪を休止するとなきにあらず雖も、若し彼のネルソンをして、トラフルガー海戰の正に開かれたる際、佛艦一隻の擊沈を見るや、直ちに砲擊中止の命を傳へたらしめんには、啻に史上に戰勝の光榮を遺す能はざるのみならず、英國史乘は稍異なるものなき能はざるべし。彼れ浦鹽殘艦にして、一たび修繕なるの曉は、如何なる報復に出づべきや、測るべからざるものあり。而れども日本の爲めに慰むべき所のものは、假令日本に野蠻的行爲ありとの誹毀を試むる者あるも、此一舉は正に其の然らざる證明を與えて餘りあることこれのみ。と

双方の戰報を比較するに徑庭なき能はずと雖も、其の就て教訓とすべき點は一致するを見るなり。ウキットゲフト少將の主眼とせし二個の要點あり。其一は封鎖を突破して浦鹽に逸走するに在ること、其二は旅順港内の如く、敵彈雨注の下に在らざる安全なる場所に竄入するに在ることとこれなり。如何に露國公報が虛飾驕慢を事とするも、此二個の主眼を掩ふこと能はざるなり。若し夫れ數字上二者の裝甲艦を比較せば、相匹するものあるを見ん、其匹儔勢力を以て、堂々雌雄を決するを以て、敵海軍の得策とす、少なくとも逸走戰に於て、受くる損害より大なるも、敵に加ふる打擊も亦自ら必然なるべきを以てなり。露海軍の失錯は、啻に其の目的を達せざるに依りたるのみならず、其の根本計畫に於て、已に敗れたるものなり、唯逸走策を取りたる所以は損害の結果、決勝戰を爲す能はざるに依りしものならんか。東郷提督の公報は、簡約旨を得たりと雖も、露司令官レイツェン、スタイン少將の報告は、冗長なるまでにして、事實の證明となるべき價値に乏しきものなり。所謂其報告なるものには、八月十日午前八時三十分、巡洋艦ノーウキックを先導とし、一時間を費して、日本海軍の水雷敷設面を航過せり、其時間を費したる度合は、或は

正當なるべきも、日本海軍の主張する所に依れば水雷を撒設したることなしと云ふ、同じく九時に至り、ウキットゲフト司令長官は信號して曰く、『全艦隊浦鹽に赴くべし』と、隔る一時間にして、日本艦隊出現したるが爲め、スループ型砲艦及水雷艇をして港内に走らしめたり、是れ敵線を突過するは是等の小艦の爲し能はざる所なるに依れるが如し。正午頃露國艦隊の航走速力は、十三節を以てし、戰鬪艦が其の以上の速力を出したるの紀事なき以上、已に數回の戰鬪に於て、其汽罐に損害を受けありしを知るに足れり。遠距離より戰鬪の開始せられたるは、十二時三十分にして、一回の戰鬪と約三時間を隔てたり。第二回の戰鬪に於て、アスコリドの汽罐一個損害を受けたるを記するに過ぎず、第二回の戰鬪は、午後五時四十五分、四海里の距離に開始し、ツェザレウキッチは其針路を轉じ、信號して曰く、『司令長官は指揮權を移す』と。巡洋艦隊の戰線を去りしは、恰も此時に在り、之れが司令官たるレイツェン、スタイン少將の報告は唯これより以下、艦隊の蒙りたる慘狀を示すに過ぎず。敵の猛火の下に在ること二十分間、敵水雷に中りたるパルラダは海中に沈沒せしものゝ如く、大なる損害を受けたれども、他の三艦は遂に逃走の目的を達したり

其二―第二時期以後に於ける日本海軍の運動
I 八月十日十四日兩海戰を論ず

と云ふの外なく。近世に於て著名なる大海戰を報ずるものとして甚だ不備なり其後の戰況は、載せてマツセウキツチ少將の報告に在り、午後五時に至り、日本艦隊射程距離に達したり。戰鬪艦六隻、巡洋艦四隻、水雷艇より成れる露國の艦隊は、之と對戰せしが、旅艦ツエザレウキツチの受けたる損害の非常なりし爲め、約四十分間猛火の下に停止し、司令長官は「旅順に還ることを禁じたまいたる勅令を記憶せよ」と最後の信號を爲し、敵彈に其身を粉碎せられたり。ウフトムスキー公即ち指揮を取りたり、他の五隻の戰艦は、司令長官の信號に關せず、旅順港内に向ひ、ツエザレウキツチは圍を脱して膠州灣に竄入し、遂に武裝を解きたり。而して巡洋艦水雷艇の行動結果に至りては何等の報ずる所なし。之を要するに、此の海戰に於て、一貫せる露軍の作戰は、唯逸走に在りしや明かなり。又蔚山沖の海戰に於て上村中將の報告は、簡單にしてアレキシーフ大將の報告は詳細なり。前者の報告に依れば、浦鹽艦隊は逃走を企てしも、速力劣れるリューリックの爲め、逃走を遂ぐる能はず、他の二艦は、引返すこと數回に及び僚艦の爲め、勇敢なる戰鬪を試み、日本艦隊は、裝甲巡洋艦四隻より成り、兩者砲煩力に於て、格別なる差隔なかりしに係はらず、一意遁走を目的としたり、若しリューリックにして、其自由を失ふことなかりしならば、主として遁走を目的としたるが故に、戰として見るべき戰を見ること能はざりしならん。此時に於て、敵の防護巡洋艦二隻來り會す、是に於て我二隻は、全速力を以て逃遁したり、リューリックの沈沒に當り、日本艦隊は之れが乘員の救護を勉め、大に其博愛仁慈の意圖を表明したり。又後者の報告に依れば戰鬪は六海里の距離を以て開始し、我は快速力十七節を以て、其逸走を企てたり。戰鬪開始より三時間の後即ち午前八時、司令長官は浦鹽への逸奔を命令したり、リューリックは二艦に後るゝこと四海里半に及び、敵の追逼する所となり、到底救護の見込立ざるに至れりと、此リューリック救護の見込立たず之を捨てたるに關しては、力を極めて舞辭曲辨に努めたり。二艦の損害は、六乃至十一彈を水線下に受けたるのみならず、汽罐の損害も亦少なからず、加ふるに、將校全員の五割、兵卒二割五分は、死傷せりと云へり。此の如き場合、戰鬪の終期に於て、退却命令を發するも、其職務上、咎めなきを得べきなり。而れども寧ろ戰鬪の劈頭に直前奮鬪せしならんには、何ぞ單に敗者たるに到らんや。敵の司令長官は、唯何の故に、日本艦隊は追擊せざりしやを

なゝず

疑へり。其の理由は後に至り明白せりと雖も、浦鹽の二艦の逸走は、其速力の優越に歸因したるものなり。是等の海戰に因て、一の爭ふべからざる教訓を享受したり、日露の兩艦隊は、其實盡一回は相匹し、他の二回殆んど其差なかりし程の場合に於ても齊しく日本艦隊の勝利に歸したり、是必竟精神的要素の充溢し、士氣亦盛なると砲射伎倆の卓越なるとに由れり。伎倆訓練の二要素は、砲煩裝甲の物質より、も、重要なることは曾て日本人が、黄海に實驗せし一大教訓なり。海面の狀況右に說く如し、今や轉じて、陸上攻圍の狀況に移らざるべからず。

其三　第二回本線總攻擊戰…A…其豫備戰

こゝに讀者の注意すべき一要件あり、第一回總攻擊は、是れ主として强襲に依りたるものにして、其の迸血天を抉し天爲めに泣き、泥肉地を膠して、地爲めに慘み、最新築城術と、最新武器が、其の攻擊方法に敎戒を示すものたらすんばあらず。日本軍の精銳無比を以てして、尙ほ且つ二砲壘を收めたるのみ、是れ人と人との戰にあらずして、人と築城術との戰ひなり、人と築城術との戰たるのみならずして、人と武器の戰なり、人と壘壁と戰ひ、人と銃眼と戰ひ、肉と砲彈と交換せられたるものなり。今や第二回本線總攻擊に移るの場合に於て、日本軍が、彼れの防禦力が要求する正攻法に移りたるは、實に適當の方法を選みたるものと謂ふべし。攻圍戰の本舞臺は全くこれより開始するものなり、此攻擊方針に依り、九月一日より步工兩兵を以て電光形攻路の開掘に勉めたり。

第一回本線總攻擊以後の敵狀を見るに、八月二十七日午前二時より同四時に亘り、敵兵雷雨に乘じ、各方面共に襲擊を企て、同時に盤に其砲火を我陣地內に集注せり、我兵悉く之を擊退す。二十八日敵兵頻に望臺及其附近高地に防備を爲し、同時に我占領兩砲臺に向ひ、巨砲及野砲を配置す。二十九日以來敵兵我占領兩砲臺に向ひ時々巨砲を以て砲擊す、同夜十一時頃、敵兵百餘名盤龍山西砲臺に向ひ襲擊し來る、我兵近く之を引附け急射す、敵兵多くの死傷者を遺棄して逃走せり、我死傷至て少なし、三十一日各方面共至て靜肅なり、只敵兵望臺及其西北方高地に防禦工事を施しつゝあり。九月二日右翼隊の野砲及海軍砲を以て、旅順市街殊に兵營に向ひ數十發の威嚇砲擊を爲せり。敵も亦前日來と同じく、盤龍山二砲臺に向ひ、砲彈を

送れり。三日敵兵我盤龍山砲臺に向ひ、大小砲彈約二百發を送れり、之がため我工事の大部破壞せらる。四日敵の砲擊前日來に比し甚た少し、六日夜半敵兵約四十、右翼隊の右翼正面に來襲し、我兵之を擊退せり。中央隊方面に在りても、同夜半敵兵約六十、龍眼北方我作業隊に來襲し、我兵之を擊退せしも、是かため工事の進捗全く妨害せられ、又盤龍山二砲臺は此日劇しき砲擊を受け、工事の大部破壞せられたり。八日敵兵我盤龍山二砲臺に向ひ、緩徐なる砲擊を爲せり、又我各方面對壕作業に向ひ、時々重砲火を集中し、或は夜に乘じ、屢々出擊し、之を妨害せんと力むるも、我に著しき損害を受くるとなく、作業を進捗しつゝあり。九日朝以來、敵兵頻に我を砲擊せり、龍眼北方敵壘クロバトキン砲臺に對する我坑道は、既に壘前五十米突に達し、東鷄冠山砲臺及同北砲臺に對するもの約三百乃至四百米突に近接せり。十一日各方面の對壕作業益々進捗し、水師營南方に對するもの、今や敵壘前約七十米突に近接す。敵兵重砲火を以て我作業を妨害すること、前日來と異なることなし。十二日敵兵約三十名、午前十時と午後二時に於て東鷄冠山北砲臺に向ひつゝある、我作業隊に來襲し、大損害を受けて敗走せり。諸砲臺觀測所、及輕氣球隊の報告に依れば、東鷄冠山砲臺の敵兵、我盤龍山東砲臺に向ひ、坑路を掘鑿しつゝあるものゝ如し、十三日午前三時頃、敵兵約七十名、大平溝附近右翼隊の右翼に來襲し、直に擊退せらる。十五日午前三時頃、少數の敵兵水師營南方クロバトキン砲臺及二龍山東南堡壘に對する各攻路の作業隊に來襲す、我兵直ちに之を擊退せり。十六日午前二時三十分頃敵兵約百名龍眼北方の我攻路し向ひ襲擊し來り、十數分間格鬪の後、我兵之を擊退せり。次て五時頃、約四十名の敵兵再び突擊し來りしも、我射擊に遇ふて退却せり。十八日午前三時頃、敵兵二三十、水師營南方我攻路頭に襲來し、二箇の爆藥を投じて去れり。

B 其總攻擊

攻路の開堀漸次進捗し、攻擊準備日を追ふて整頓せしを以て、九月十九日第二回總攻擊に着手せり、右翼團は二〇三高地、海鼠山、及水師營南方堡壘に、中央團は龍眼北方の角面堡に向ひ、左翼團は牽制運動に任す。

是に於て右翼團は、三縱隊と爲り、右縱隊は二〇三高地に、中央縱隊は海鼠山に、左縱

隊は水師營南方堡壘に向ひ攻撃の部署に就き中央縱隊は第一隊を豫備隊とし第三第三兩隊を攻撃隊とし第二隊の一部は開掘攻路より他の一部は塹濠の破隙より二道を取りて突進し第三隊之に次ぎ第二隊の殘部隊は之に次ぐ午後一時頃より攻城砲及海軍砲は其砲火を開始せり。午後五時第二隊は先發し一個小隊より成る二決死隊を編し突撃を斷行せしめたり。而れども海鼠山及椅子山の丘西端に於ける機關砲は密雨の如く塹濠の破隙より進みたる一隊を猛射し殆んど全滅せしめ又攻路より進める一隊も齊しく機關砲の猛射を受けしも進んで丘脚に達し幕進して敵の塹濠に突入し後續隊の大部も亦之に踵ぎて突入し力戰奮鬪す敵遂に支ふる能はず左右に退却せり漸く塹濠の一部を占領す。而れども進んで左方に出れば前隊の轍を踏まざる可からず右方に進めば海鼠山右方高地より掃射を受けざる可からず前面には高地頂に於ける塹濠銃眼よりする猛射を受けざるへからず進む能はず又退く能はず空しく濠中に潜み後續部隊は斜面に伏して機會を待つの外なき苦境に陷り夜を徹す。二十日第二第三兩隊は又各十人より成る決死突撃隊を編し率ゆるに將校一人宛を以てし午後五時三十分我砲火威力の下に突撃せり、各隊之に機を得て意氣衝天の勢を以て驀進し、敵遁易して終に敗退し、海鼠山全く我手に歸す、時に午後六時なり。此戰敵の守備隊長傷き將校二名捕虜と爲れり、我第二隊長代理瀧澤大尉敵濠内に奮鬪して敵彈に斃る。

中央團の一縱隊は、龍眼北方の角面堡クロバトキン堡壘)を攻撃せんとし、其二部隊(小野隊)と工兵隊とは正面に向ひ、他の一部隊(伊藤隊)と工兵隊とは、水師營の東方より敵壘の左側に向ひ、隊長指揮の一隊は、八里庄より敵の右側に向ひ、將に三面より挾撃せんとす。此日午後一時砲兵一部隊(林砲兵隊)は角面堡に向ひ、砲火を開き、猛射五時に至り胸墻掩蓋の大部分を破壞したり。唯咽喉部の掩蔽部地下の彈藥庫、窖室の幾部分を餘すのみ。午後五時五十分本郷隊の一部隊と工兵とは已に突進して、外濠に闖入す、轟然たる音響と共に、側防機關は爆破手の爆藥に破壞せられ、敵の手擲彈、機關砲は、内頂線より其の頭上に轟裂す我兵死傷相踵ぎて退く、其一小部は頑然として濠内に在り、激烈なる投爆戰を爲す、敵、火を地雷に點じ、轟然として爆破す、勇敢なる我工兵は其導火索を搜りて之を切斷し、午後七時十五分更に突撃して肉搏益々急なり、左肩角外濠内機關砲は我兵の投ずる爆藥の劈破する所と爲る。

我兵益々爆薬を投ず、左側に迂回せる一工兵は壘道内の通路を破壊し、土嚢を以て其退路内を塞く、敵は尚ほ喉咽部に在りて頑抗す、我工兵は益々爆薬を投じ、一工兵は更に外濠内に跳入し、胸墻を攀ぢ内濠及掩蔽部に向ひ、爆薬を投じ、終に敵を堡壘外に驅攘せり。又敵壘の東南側に迂回したる一爆破手も、亦爆薬を投じて掩蔽部を破壊し、且つ西側通路とを塞けり。是に於て歩兵の一部は更に突撃を行ひ、堡壘南方遮蔽通路を奪ふ、時に敵の機關砲四門は壘上に現はれたり。

敵壘前の地隙に在りて、機會を伺へる伊藤隊は、工兵をして敵濠に向ひ爆薬を投ぜしめしも、敵の抵抗頑強にして、午前二時に至り我れ更に工兵を第一線に増加し、益々爆薬を投ず、敵は退却して堡壘外南方地隙に踏止まり、更に頑抗す。四時四十分中央團右翼工兵の一部は更に増加したる伊藤隊の工兵と協力し、通路を築造し敵が我が爆薬の驅攘する所と爲り、退却するに乗じ、各隊之を追撃し、終に全くクロバトキン堡壘を占領す、時に午前七時なり。

右翼團の左翼は、水師營南方に於ける、四個の堡壘を奪取せざるべからず、十九日午後六時第一線部隊は、水師營南方の第一壘に突進し、將に敵の散兵濠に達せんとす、

敵機關砲は驟然として雨注し來り、死傷全滅に近し、此日は終に之を奪取するに至らず、翌二十日朝より我砲火は猛然として、敵上に加はり、午前九時四十五分我兵突進して第一壘を拔く、我兵更に蕊擊猛戰激潮の如く、第二壘陷り(十時四十分)第三壘陷り(十一時終に其四壘を拔く(十一時四十五分)是に於て左翼の攻撃目的は遂行せられ、水師營南方の堡壘團は我手に歸せり。

右翼團の右縱隊は、彼の二〇三高地を攻撃せざるべからず、敵は本防禦の連珠形に於て、其生命と爲す所のものなり、何となれば此高地一たび敵手に委せば、旅順港内は守禦の中に集まればなり、されは其防禦力の尋常にあらざること、素より言ふを俟たず。

右翼團右縱隊、第一第三兩隊より派遣せる四個の斥候隊は、二〇三高地脚に達し、鐵條網を切斷せんとし、其一部の目的を達し、午前七時各隊攻撃準備陣地に就き、武藤中尉の指揮せる決死隊は、突撃部隊の先頭たり、午後二時半、我砲火は猛然として地軸に震ひ、敵上に火雨を注ぐも、効果更に見るべきなく、敵更に之に應射せず、午後六時三十分に至り、突撃部隊は工兵と共に蕊進し、左右谷地は已に第一第三隊の進入

する所たり。今や敵は驟然として、其銃砲火を猛射し來る、第一線隊の死傷算なし、加ふるに此時に方りて、海鼠山未だ我手に歸せざりしときなれば、側射を受けて前進する能はず、二十日朝來我砲火威力の下に、突擊又突擊、未だ何等の効果を見る能はずと雖も、決死隊は進んで塹壕を奪ひ第一線部隊は敵壘に突進す、敵の掩蓋中よりする銃火と、前方砲壘の砲火とは猛烈にして、其難戰極に達し、僅かに身を壘下の岩石間に寓くに過ぎず、而かも敵の爆藥は其犧牲を求めて止まず、轟爆又轟爆、伊藤中尉以下空しく肉泥を留む。午後六時四十分、第一線部隊は突進す、午後七時第一隊は西南凸角部を奪取す、敵兩側の掩蓋内より爆藥を投じて、我が壕内の敵を掃擊するを妨ぐ、午前七時過、敵高地稜線後より逆襲し來り、益爆藥を投じて、我突擊隊を阻ぐ、此時左方谷地に在りし第三隊の第一中隊は、來りて突擊部隊を助け、東面に土嚢を積み、又横牆を搆ふ、午後十時選抜突擊隊は奮進し、一小部隊之に跟ぐ、而るに敵右側背より逆襲し來り、爲めに果敢なる突擊効を奏せず、以後突擊に突擊を重ぬるも皆効を奏する能はず。廿一日午前九時、稜線後の敵に向ひ、突擊せる部隊も亦皆其効を收むる能はず。これより敵の逆襲益々頻々と爲り、我死傷算なく、工兵の大部燒れ、苦戰刻を追ふて激甚となれるのみ、時に海鼠山は中央縱隊の手に歸したるを以て、右縱隊の攻擊を援助せん爲め、其秀島部隊をして二〇三高地北端に向ひ攻擊せしも、亦其効を收むること能はず、二十六日敵の兵力益加はり我亦突擊力戰するも、徒に死傷の多大なるの外、些の發展を見る能はざるのみならず、敵は我密集斜面に向ひ、鴨湖嘴西北方高地より砲火を集中し始めたれば、我れは切齒憤扼するも舊位置に退却するの外なく、二十三日午前四時勇敢無比の我軍も、忍んで退却し終れり。而れども總攻擊の結果として、港内の若干部を瞰視するを得るに至れり、我れ已に二〇三高地の攻擊に其効を收めずして退却す、海鼠山方面亦猛烈なる敵の逆襲を見ざるなきを保せず、二十五日山本少將敵狀を偵察しありし際、敵彈に中る、第二回本線總攻擊の終頁は、二〇三高地攻擊の不成効と、多大なる勇將猛卒の血痕を以て結辭となす慘の又慘なるかな。

其四　第三回本線總攻擊戰

A　其豫備戰

九月二十五日午後八時三十分に至り、敵は二龍山東方堡壘に對する、我攻路に向ひ其附近の砲臺より砲火を集中し、尋て敵兵百名は掩護射擊を爲し約三十名は突出し來り、我兵と凡そ三十分間格闘し退却せり。二十七日午前零時三十分、敵は二龍山東北堡壘に對する我攻路に向ひ、俄然猛烈なる砲擊を加へ、午前一時三十分之を中止すると同時に、約二十名の敵兵突出し來り、爆藥を投じて去り、約二十分の後、再び來襲し、一二時間餘戰闘の後退却せり。十月二日午後七時三十分頃より、午前四時頃までの間に於て、敵は東鷄冠山に對する攻路に向ひ、四面より攻擊し來りたり、其零時三十分頃に於て、戰闘最も激烈を極めたりしが、我兵遂に盡く之を擊退せり。其同時約一大隊の敵は、攻圍線の右翼に襲來し、約一時間戰闘の後退却せり。午後九時、我軍の一隊は、鹽廠南方高地に在る敵の四十七密米速射砲を破壞する目的を以て奇襲を行ひ、午前一時三十分全く其目的を達し、速射砲一門機關砲一門を破壞して小孤山脚の前位置に退却せり。蓋し該火砲は我背後の交通路を射擊し、少なからざる危害を與ふるを以てなり。同夜敵は二龍山に對する、我攻路に向ひ、數回襲擊を行へり、七日夜二龍山に於ける、敵の電燈一個を砲擊して破壞せり、午後四時頃、彼我砲戰中海鼠山守備隊は敵兵約二中隊、標高二〇三高地を下り、二龍山方向に運動せんとするを發見し、急射擊を加へたるを以て、前位置に引返せり、又此戰闘敵は椅子山方向より機關砲七門を、二龍山方向に轉移せり。同夜敵は我夜襲を顧慮し大に警戒を加へたるものゝ如く、午後八時頃より、諸方面に於て銃砲を亂射せり。十日午後九時頃より、敵兵約五十名盤龍山東西砲臺に向ひ、爆藥を投じつゝ數回來襲せしも、我兵之を擊退せり、東鷄冠山に向ふ對壕作業にも敵は毎夜數十の爆藥を投擲して妨害を爲しつゝあり。中央隊の右翼に於ては十一日龍眼南方鐵道橋附近に在る敵を狙擊して、十四名を仆し、午後七時、我右翼隊の右翼に於て、歩兵三中隊を以て、龍眼南方鐵道橋附近に在る敵を攻擊し、午前八時卅分大なる損害を被むることなく、之を占領し、爾後其前方二百米突の所に第一陣地を構成せり。左翼方面に於て、同夜敵我攻路に爆藥五十餘を投入せり、損害は寡少なりし。又韮間反射鏡を立てゝ、我働作を探らんとせしも、我之を破壞せり、中央隊に於て、同日敵の發射せるダムダム彈に命中して負傷せし者あり、三日龍眼に於ける敵の、水道の水源を、全く閉塞したる結果、是まで水なき個所に三十珊米突以上の水量を見るに至れり、十四

日、大口徑砲彈十三發、松樹山の砲臺に命中し、其他軍艦堡壘等多少の命中あり、十六日中央隊は午後四時二十五分より、午後五時までの間に於て、巧に砲擊の成果を利用して、鉢卷山(二)龍山の東南方高地の堡壘及二龍山中腹に在る敵の壘壕に突入し、暫時激戰の後全く之を占領せり、敵の損害は詳ならざるも、死骸の我目擊し得るもののみにても一百名を下らず、十七日午前零時三十分頃、敵兵約五十名標高三〇三高地の南方より、該高地に對する我攻路に來襲し、爆藥を投じ、且つ劇烈なる小銃戰を交へたる後、退却せり。是と同時に鉢卷山及二龍山方面にも、兵力未詳なる敵の逆襲ありしも、我兵盡く之を擊退せり。午前十時と十二時との間に、標高二〇三高地に對する我攻路に、二回敵の寡少なる部隊の來襲ありしも又之を擊退せり。又鉢卷山にも、四五十名の敵兵數回來襲せしも盡く之を擊退せり。同高地の咽喉部には、尚ほ敵兵ありて、工事を施しつゝあり。二十三日松樹山附近を往復する敵を狙擊して、九人を仆せり、二龍山附近の敵は、此頃木砲を製して爆藥を發射し、我作業を妨害す、東鷄冠山北砲臺に向ふ攻路は、約五十米突の距離に近接しあるを以て、敵の妨害甚しく、我作業の進捗意の如くならず。廿四日中央隊の二龍山に向ひたる攻路は、敵壘約二百米突に近接しありて敵の妨害を受くること甚しきも、其作業は能く進捗しつゝあり、此頃敵は東鷄冠山北砲臺より坑道作業を爲しつゝあるものゝ如く、同夜九時頃、我坑道に向ひ、爆發を行へり、然れども我に一の損傷なし。

B　大口徑砲及海軍砲の砲擊

第二回本線總攻擊の結果、港內若干部分は瞰視するを得るに至りたるを以て、敵の船艦及市街の要部に、我巨彈を送るべき場合と爲れり。軍の大口徑砲及黑井海軍中佐の海軍砲隊は、正に其威力を發揮せんとす。九月廿八日午前十時より午後五時まで、我海軍砲を以て敵艦を砲擊せしに、ペレスウイット、ポベーダに各五六發、命中せり、セバストポリーは前夜東港に錨地を換へたるが如し。十月二日我大口徑砲及海軍砲の射擊は、其結果頗る良好にして、午後二時三十分頃、一發確に敵の旗艦ペレスウイットの砲塔の左舷に命中し、其他數發の命中彈あり。四日大口徑砲及海軍砲を以て敵艦を砲擊し、ポルタワ、ポベーダ、ペレスウイット等に數發命中せり。五日大口徑砲を以てする軍艦射擊は、一發ポルタワに命中し、又海軍砲の射擊は、老虎

尾半島に在る大築造物に命中して火災を起し、三棟延燒せり。六日大口徑砲の射擊はポルタワ、レトウイザンに各々二發命中せり、又一發は老虎半島に在る倉庫に命中し、火災を起せり、一日より七日に亘る大口徑砲を以てする軍艦射擊に於て、少なくもポベータに一、レトウイザンに四、ペレスウイットに五發命中し、此外尚ほ海軍砲も前記諸艦に命中せしを以て、ポルタワ、ペレスウイット、レトウイザンの三艦は、最早運動力を有せざるに至りたるものゝ如く、ポルタワよりは、六日朝レトウイザンよりは七日朝、五六艘の支那船にて、水兵の上陸するを見、又ポルタワは此日正午頃曳かして東港に入るを見たり、其他の諸艦も多く東港に移れり。十一日午後三十分頃敵の驅逐艦九隻二回鹽廠附近の海面に來り、我驅逐艦及陸上砲臺と射擊を交へて港内に退却せり。蓋我陸上の配備を視察せんとするものならん。十二日大口徑砲を以てする軍艦射擊は、命中彈九發ありて、一發は其一艦に、十四分の間火災を起せり、十三日我大口徑砲彈三發、ペレスウイットに命中し、内一發は約十三分間火災を起せり、同艦は最早戰鬪力を失ひたるならん。廿二日夜より廿三日に亘り、大口徑砲を以て敵の軍艦及機器局に向ひ射擊せり。廿四日我砲擊の結果午後二時より旅順市街に火災起り、五時鎭火せり。廿五日午後二時、我海軍砲は白玉山右方に在りし、二本煙筒三本檣にて、千餘噸の汽船一隻を射擊して之れを擊沈せり。

C 其總攻擊

豫備戰經過に明なるが如く、攻路作業は進捗し、大口徑砲海軍の威力は發現し、今は總攻擊の時機に達せり。十月二十六月午前八時三十分より、大口徑砲、攻城砲、及海軍砲を以て、重に松樹山砲臺、二龍山砲臺、東鷄冠山砲臺、及同北砲臺に向ひ砲擊し、二百五十發の命中彈あり。海軍砲も亦松樹山砲臺及二龍山砲臺に多數の命中彈を送れり。而して二龍山砲臺は、胸墻上に破孔を生じ、且つ掩蔽部の若干を破壞し、松樹山砲臺は咽喉部の掩蓋二箇所を破壞し、且つ十五珊米砲一門を轉覆し、他に一門に大なる損害を與へ、又東鷄冠山北砲臺に於ては、火砲一門を破壞せり。午後二時より、他の攻城火砲を以て、松樹山砲臺及二龍山砲臺の各前面斜堤に在る、步兵散兵壕及鉢卷山南部の散兵壕を砲擊して、多大の損害を與へ、午後五時を期し、右翼隊の

一部は松樹山の塹壕に向ひ、中央隊の一部は、二龍山及鉢卷山南部の塹壕に向ひ、突擊運動を始め、共に大なる損害を被むるとなくして、之を占領せり、然るに敵は此の塹壕を占領せらるゝと同時に、其附近砲臺は勿論、西太陽溝、西方高地、及饅頭山黃金山、白玉山、嶗嶺嘴の諸砲臺よりも、我突擊方面に砲火を集注したりしかば、我砲擊と相和して砲彈破裂の狀況は、一時頗る壯觀を極めたり。然れども敵彈は、有効と認ひべきもの甚だ少く、且つ敵は二龍山砲臺の斜堤に於て、大地雷を爆發せしが、我兵は一名も之に罹りたるものあらざりし。同夜敵の修理作業を妨害する爲め、攻城砲及海軍砲を以て、二龍山、東鷄冠山、同砲臺及松樹山に向ひ射擊を行ひ、尙軍艦及機器局を砲擊せり、又松樹山、及二龍山の敵は、銃砲火の援助を以て、夜間前後數回襲擊し來りしも、孰れも之を擊退せり。

我は益々巨砲の火力を振へり、十月廿七日、大口徑砲の砲擊を續行し、海軍砲は松樹山、椅子山、案子山、白玉山、二龍山造船所、及敵艦を射擊せり。射擊効力の特に記すべきものは、東鷄冠山砲臺に於て、砲車一を破壞し、二龍山砲臺の北正面東端より、中央に至る間の步兵踏梁を破壞し、掩蓋を飛散し、一個の輕砲を毀損し、東正面の砲一門を破壞したるが如し。又同砲臺の東南隅角に數發命中し、掩蓋を破壞し、其附近に在りし機關砲二門を飛散せしめたり。松樹山砲臺に於ては、凸角部の砲一門を傾斜せしめ、翼面中央部に在る、十二珊米突加農砲を毀損し、又掩蔽部及掩蓋を破壞せり。同夜東鷄冠山北砲臺に對する我作業隊、凸角部外岸窩窖の一部を破壞せり、敵は砲擊、殊に夜間爆藥及出擊等有ゆる手段を以て、我作業を妨害し、同時に我砲擊の爲め生じたる堡壘破壞部の修築に努めたり。十月二十八日、大口徑及其他の攻城砲を以て砲擊を續行せり、其結果は良好にして大口徑攻城砲の命中彈、合計二百八十五、其他案子山、椅子山、標高二〇三高地の砲壘、白銀山、及白玉山等に各若干の命中彈あり。海軍砲は主として西太陽溝、椅子山、案子山、東港內の軍艦及旅順の西市街を射擊せり。射擊効力の特に記すべき者は、二龍山(敵は前日破壞せられたる步兵踏梁の一部に土袋を並列せり)は、步兵踏梁、砲壘內の構築物を破壞し、咽喉部に少からざる損害を與ふ東鷄冠山北砲臺は、裝藥庫爆發し、東鷄冠山砲臺は、咽喉部西側の、野砲一門を飛散し、松樹山は掩蓋を有する十二珊米加農一門、及咽喉部の砲一門に命中す。椅子山は、十二珊米加農一砲車を轉覆し、一砲車を甚しく傾斜せしめ、二百

三高地堡壘は、掩蓋二個所、鐵條網及散兵壕の若干部を破壞せり。西太陽溝北砲臺にも、備砲其他構築物に少なからざる損害を與へたるが如し。旅順舊市街には、火災を起せり。又第二回の火災は黄金山西北麓の製造所にして、延燒三時間に及べり、夜間も例に依り、旅順港内機器局を砲擊し、又我對壕作業の援助射擊を爲せり、十月二十九月は、各砲の發射彈數を增加して、砲擊を續行せり。砲擊の成果は、益々良好にして、大口徑火砲の命中彈三百五十に達し、其他嶗嵂嘴高砲臺、椅子山、白銀山、各中間砲臺等に少なからざる損害を與へたり、海軍砲は、西太陽溝、椅子山、案子山、毅前軍左營、白玉山、松樹山を射擊し、西大陽溝の火藥庫を爆發せしめ。又西港内南側に繫留せる掃海艇五隻を砲擊し、其三隻に大損害を與へ、内二隻に火災を起さしめたり、他の攻城諸砲は、午後一時半より支那圍壁、及堡壘間隔の砲臺、散兵壕を砲擊せり。

a　左翼兵團戰鬪

我已に日に刻に坑道を開掘しつゝあり、彼も亦攻路を開掘す、十月二十七日、東鷄冠山北砲臺に對する攻路に方り、一の地中戰は演ぜられたり。午後零時三十分、左翼團右方坑道頭に、一小孔を生じ、約一時間半を經過したる頃、俄然として地殼は爆破し、我作業工兵は、肉泥粉飛し、又は重輕傷を負へり、敵の此爆破を行ひたるに由り、我は外岸のペトンより成るを發見し、午後九時これが爆破を試み、僅かに龜裂を生じたるを以て、更に其龜裂點に爆發を行ひ、其生じたる破孔に由り、側防穹窖あるを知り、更に破孔を爆破し、翌二十八日午前四時四十分、終に右側防穹窖を占領す。進んて全部の破壞を決行せんとするも、敵の區畫防禦堅固にして、終に其目的を達する能はず。

左翼團中央縱隊の新山隊は、其一部を以て瘤山攻擊に向ひ、三十日黎明より其位置に就き、我砲火力の發現し來るを待ち、午後一時其撰拔步工兵をして、蟇進して鐵條網を破壞せしめ、突擊隊の先頭は躍前して散兵壕内の敵を擊攘し、進んて堡壘頂に闖入す、猛烈なる敵の銃砲火は、支那圍壁及砲臺より雨注し來る、我之に屈せず後續部隊も奮進し終に瘤山頂を占領す。少數の敵は西方斜面に在りて頑抗するも將に逆襲せんとする後方溪谷間の敵も、我猛烈なる火力に擊退せられたれども、比隣砲臺の瞰射益急に、我死傷續出し、秒を追ふて多大と爲れるが故に其危急は實に一

瞬時を爭ふの狀況に在り。工兵の作業も、敵砲火、爆藥の妨害する所となりしも、翌三十一日には、漸く陣地として占領を確實にするを得たり。

又東鷄冠山砲臺に突擊するの任務を有する志岐部隊は、見玉部隊の野瀨工兵部隊と共に、三十日午前六時より、漸次其位置に就き、砲火威力の發現を待てり。午後一時二隊に分れたる突擊部隊は、一は第九陣地より、他は第十陣地より、各撰拔歩工兵を先頭とし、第九陣地よりする高木隊は、突進して直に敵の散兵壕に突進し、僅かに十五分時にして砲臺を占領せり。然るに東鷄冠山東南砲臺に於ける、敵は砲火を猛注し、但見る進むものは、一歩ならざるに斃れ、將校相續て殪る。勇敢なる工兵は砲臺の巨砲、機關砲、異樣の砲門を破壞せしと雖も、事已に後れたり、砲臺は一旦占領せしも、占領したる勇兵は、唯其屍を血河に漂はせるあるのみ。第十陣地よりせる、見玉隊も亦躍進し、見玉少佐自ら散兵壕の中央に向ふ、先頭部隊は益奮前せり、見玉少佐の散兵壕に達するとき、前方に於ける先頭部隊は殆んど敵彈に斃れ盡したり。更に壕中より後續して奮前せんと試みたるも、進むもの皆一歩にして斃れざるなし、死屍已に壕内に塡充す、此の狀報に接せる新山隊長は、更に增援隊を加へ、突擊を

强行せんとせしも、其効なきを見て、其前進を中止したり。砲臺前に於ける、我兵は已に殆んど全滅し、殘存兵の上には、敵の爆藥其投下を止めず、新山隊痛恨を呑んで退却し、見玉隊は敵の逆襲より脫して、僅かに十名の殘兵を將て攻路頭に退けり。

此日の攻擊は各面同時に開始せられたり、東鷄冠山砲臺に向ても、午前六時より、之が準備に着手し勇敢なる歩工兵は、側防窖窖の右室を占領し、綿火藥を以て、銃眼壁を爆破し左室よりする敵火の壕底を掃射するを防がん爲め、敵火雨注の下横墻を外壕中に構へ、敵亦之を破壞せんとし、其接戰激鬪慘烈を極む、壕中の鐵條網及其電纜は、已に通路を害せざるまでに截却せられたり。午後一時、我掩護砲火は、天に震ひ地を動かし、四十七人より成れる突擊隊は、硝烟濛々の中に躍入し、外壕内に驀進せり。我兵は已に携帶梯に縋りて胸牆に攀ぢ、躍然として牆頂に在り、銃火、爆彈、投石、潑々囂々、勇敢なる第一突擊隊は全滅し、第二之に踵ぎて壕底に斃れ、第三突擊隊は銃火の爲めに、寸進すること能はず、此夜更に他方面より力を合し、突擊せんとして、東鷄冠山方面の敵狀變更せし爲め、之を中止す。

十月三十一日、午後三時三十分、我砲火は全力を北砲臺に集注し、爆破隊は二回外岸

斜面に大爆破を行ひ、勇敢なる兒玉、小川の二軍曹は、決死の部下と共に、右翼に突入し、之を占領したり。四時三十分、突擊隊は時機已に熟せり爲し、攻城砲の掩護を待たず、其先頭は已に內岸を攀登し、傾斜面に達す。敵の爆彈急下進むもの皆傷く、後續隊は望臺及日砲臺より縱射を受け、敵の火力は到底我れの前進を許さず、工兵開路作業に依るの外亦策なきに至れり。然れども芳賀少尉をして、迂回路を取り、敵壘咽喉部に向ひ、最も大膽なる偵察を遂行せしめしも昏々として暗く其何の狀たるを伺ふ能はず、唯敵將に會し之と格闘して之を殺し其身も亦傷て歸れり。

北砲臺と東鷄冠山砲臺との中間に一堡壘あり、所謂Q砲臺これなり、盧部隊は、之に向ひ二十六日より三日間、夜暗を利用して、其撰拔破壞隊は鐵條網を破壞せり、依て三十日拂曉、突擊準備を爲し、砲火威力の發現を待てり。午後零時三十分我砲火其猛烈の極に達し、敵壘寂として更に之に應ぜず、敵兵は掩蓋下に我砲火を避けつゝあるものならんか、彼已に應射せず、突擊隊は前進して今や工兵小隊と共に凸角部に奮進し、他の一隊は、凸角部左方に突進したり。先頭已に壘上に達す、時に北砲臺の敵は、其機關砲を猛注し、縱射の爲めに我兵の損害續生す、工兵は爆藥を投じて、敵砲及掩蔽部を破壞し壘上今は奮鬪格戰の最中に在り、敵兵漸次增し來り、惡戰其極に達し、北砲臺の機關砲火は益々我れを困しめ、戰況彌險惡に陷り、突擊中止の止むを得ざるに至れり。

b 右翼兵團戰鬪

一方右翼團方面を見るに、松樹山砲臺前面斜堤塹壕は、已に我軍の占領する所となり、二十七日午前一時二十分、敵の步兵百五十名猛然として逆襲し來り、我第一線の左右面は頗る苦戰に陷り、敵の擲つ爆彈に、加ふるに砲火は猛雨の如く注き來り、損害續出危險言ふ可らず、而かも終に之を擊退したり。然れども二十九日午前五時十五分、我第五步兵陣地に猛襲し來り、主として其左翼を力攻す、兵力又三百に可なり、右翼には僅かに五十に過ぎず。左翼の敵頑强にして、其優勢を恃み、且つ我攻路頭に據りて頑抗す、我第四步兵陣地より一部隊砲二門を以て、之に赴援せしも、敵は益爆彈を投じ比隣砲臺よりする砲火は、猛烈にして、加ふるに右翼の敗退兵、再び逆進し來り、尙續々松樹山の西南隅より兵力の加はり來るあり、我死隅頗る多く、終に

全滅に瀕し、敵は自ら之を占領するに至れり。我之を奪回せざるべからず、二十九日午後零時五十分、我砲兵部隊の一隊は、水師營南方O堡壘より松樹山後の敵散兵壕に向ひ、砲火を送り、他の一部は松樹溝を砲撃す、將に午後一時四十分を以て、突撃部隊は、左右兩攻路より猛進せんとす。中村將軍、伊豆參謀皆第一線に在りて戰況を看る、時は來れり、迫撃砲は響けり、我歩兵は急努一射の勢を以て、敵陣地に突進す、松樹山は勿論、比隣砲臺より、砲火は猛注し來れり、奮躍せる我兵之を意とせず、激鬪猛戰、赤手和搏ち劍尖電を飛ばす、敵終に支ふる能はず、主力は松樹山方向に、一部は松樹山西方に潰走せり。我死傷算なし、敵の屍體亦百を以て數ふるに至れり。

c　中央兵團戰鬪

又中央團方面を見るに、敵は我が占領せる前面斜堤に、猛烈なる逆襲を試みて成らず、我は敵の埋沒したる地雷電纜を發掘して、之を切斷し、攻路作業は漸次進んで外壕に接近す、而れども重疊せる岩石は其作業を阻み、加ふるに比隣砲臺の瞰射を受け、前面胸墻より敵歩兵の銃火爆彈、其頭上に注がれつゝあるも、之に屆せず、漸く外壕に達するを得たり。敵の外壕は、其幅員深度共に大にして、側防穹窖二重を備ふ、勇敢なる我兵は夜暗之を測知し、二十九日其穹源を破壞せり、然れども敵の抵抗力を減ずるに至らず。三十日梯子に依り、外壕より胸牆に闖入せんとして果さず、是亦側防穹窖全部の破壞を爲すにあらざれば、其目的を達する能はざるを見たり。而れども左縱隊は、一戸少將指揮の下に、P砲臺(盤龍山舊砲臺と東鷄冠山北砲臺と)の中間に在り此盤龍山舊砲臺は我軍已に之を占領し、北鷄冠山北砲臺は、當時攻撃作業中なり)は勇敢なる工兵は、敵前に二重の鐵條網を爆破し、突撃隊は猛進し、敵の砲火爆彈を冒して、終に之を占領するを得たれども、唯此砲臺は、東鷄冠山北砲臺、H砲臺、及支那圍壁より射標となりて、瞰射を受くるのみならず、此射撃に對し遮蔽すべきものなし、されば之を占領すれども、其兵は敵前に裸暴するに齊しきが故に、之に要する防禦設備を急がざれば、我損害實に測る可らざるものあり。一方之が設備を急ぐと同時に、將に東南方高地に達せんとす、時に午後六時十分、敵は猛然として逆襲し來り、其背後より掩護砲火の猛注し來るあり、敵は爆彈を亂投し我損害算なし、加ふるに爆藥亦已に盡き、其苦戰極點に達したり、豫備隊の增援は、之を撃退す

るを得たり。午後九時敵逆襲し來り、之を却くること二回敵更に大逆襲を猛行し來り、逆擊突戰、P砲臺は終に敵の奪回する所となれり、P砲臺敵に奪回せらるゝの報、一戸少將に達するや、少將決然馳せて第一線に至り、自ら戰を督す、我將士奮躍して、更に之を奪回せり、全軍其勇を稱す、包圍軍司令官、特に其勇武を激賞す、一戸砲臺の名千秋史上に朽ちず。

此の如くにして、乍ち砲壘を奪回せり、意氣將に天を衝き、更に松樹山砲臺を奪取せんとす、三十日午後、歩兵部隊は砲火猛注の下に攻進し、爆破班は攻路頭より奮進して、外壕外岸に達し、爆彈を投じ、作業班は土嚢を以て奮前す、敵の火力猛烈を極め、比隣砲臺及び支那圍壁より砲火の注ぎ來ること雨の如し、我兵之に屈せず、紛々土嚢を壕中に投ず、突擊隊の一部、已に突進して外岸項に達したるも壕深くして目的を達する能はず、我砲火の掩護も、支那圍壁に對する我機關砲も、此攻擊前進に資する能はず、我損害秒を追ふて加ふるのみ、午後七時外岸を破壞せんとすれども、其堅牢到底容易に其目的を達する能はざるを以て架橋班の携帶橋も敵の砲火に阻きられ內岸に達するに及ばずして墜落す、唯攻路の延長と散兵壕の構築とを努むるあるのみ。翌三十一日午前五時二十分約五十名の敵兵は右翼に、二十名は左翼に逆襲し來りしも突擊隊は悉く之を擊退せり、今や我は外岸側防の阻止する所となれり、之を破壞せざる限り、力攻力戰は、其甲斐なきなり。之に對し其工事を進め、姑く切齒して、其時機を待たざる可からず。

之を要するに、第三回本線總攻擊は、其右翼團は松樹山攻路頭の逆襲を擊退し、第五歩兵陣地を奪回し、直に松樹山砲臺を攻擊せしも、突擊未だ其功を收むるに至らず、中央團は二龍山外岸防側穹窖を破壞せんとして、僅に其穹窖を破壞したるまでにて未だ其目的を達するに至らず、P砲臺は一戸少將部隊、一たび之を占領し、敵に奪回せられ、少將奮然更に咄嗟再び之を占領するを得たり。左翼團は、東鷄山北砲臺一部の破壞を爲し得たるも、未だ其目的を達するに至らず、唯中央縱隊は瘤山を占領したり、東鷄冠山砲臺は、一旦之を占領したるも、其將士全滅し、名ありて實を失ふ、北砲臺の攻擊は勇敢なる工兵の穹窖破壞の壯擧ありしも、突擊部隊は終に其目的を達する能はず、Q砲臺又其流血泥肉を餘すのみ、勇敢無比なる我各隊の殊死奮戰も未だ其効を收むるに至らず、當時各隊の將士、敵壘を望み憤扼禁ずる能はざりし

もの想ふべきなり。

其五　第四回本線總攻撃

A　總攻撃前の砲撃

第三回總攻撃は其猛攻力戦未だ其効果を收むるに至らずと雖も、爾後日として我が巨砲の火力は、彼れの頭上に震はざるはなく、十月三十一日港内及造船所に、我大口徑砲及海軍砲の猛弾は注下し、其數發は砲艦ギリャークに命中し、汽船二隻は撃沈せられ、埠頭附近に大火災を起せり、十一月一日、西港内の汽船を撃沈し、三日正午より東港内造船所を猛射せる、我海軍砲の威力は、零時十五分東港附近に火災を起さしめ、延燒午後四時に及び、又大口徑砲は望臺西方約二百米突に於ける、丑砲臺に損害を與へ、東鷄冠山砲臺咽喉部の野砲に命中し、之を毀損せり。十九日午後海軍砲を以て機器局附近を猛撃し、火藥庫を爆發せしめ、二十二日午後零時三十分我砲火の爲め機器局附近に大火災を起し延燒午後九時三十分に至るも尚ほ止まず、翌二十三日午前二時に至れり。

B　其總攻撃

今や松樹山以東の諸砲臺に對する、攻城作業漸次完成したるを以て、攻撃を開始すべき時機に達せり。十一月二十五日、我攻城砲野砲は其火力を猛注し、二十六日午後零時速射砲、迫撃砲之に加はり、壘上正に我砲火の集注する所たり。硝煙濛々、全線を蔽ふ、濃烟の下、疾風の如く突撃部隊は砦前す、敵の抵抗は頑強なり、其防禦は嚴整なり、突撃三回終に其目的を達せず、空しく多大の犧牲を壘前に供するのみ、左翼團新山隊は、一旦東鷄冠山中腹に於ける敵壕を奪取せしも、敵の逆襲に遇ふて、千秋の痛恨を呑むの外なく、奮然として猛進せる、中村少將の率ゆる一隊は、有名なる選抜決死隊にして、旅順市街に突入を目的とし、猛雨の如き敵火を意とせず、先づ松樹山補備砲臺を奪取せんとし、其一部は進んで敵壕を奪ひしも、敵火猛烈にして、終に又退却す。此夜十一時、支那圍壁に突進したる、野溝隊は其横牆を奪ひたるまゝ前進する能はず、右翼團は二十七日午後一時より、彼の有名なる二〇三高地の攻撃を開始し、予奪交錯、其奮戰力闘得て名狀すべからず、從て其損害多大なり、是に於て新

鋭兵團と、中央兵團の一部とは、之に加はれり、十一月三十日拂曉より砲撃を開始し、午後四時に至るまでに行はれたる猛攻力戰は、未だ全く功を奏せざりしに、午後五時、高地西南部は、我突撃隊の手に歸し、頂點以下三十米突に肉薄し、午後七時、増援隊と共に、頂點に向ひ突入して遂に之を占領す。其東北部に向ひたる部隊も、亦尋て突撃を敢行し、午後八時、高地全部終に我有に歸す。是に於て局面の大勢附近砲臺の運命、已に定まれり、今其左翼團の戰況より之を見ん。

a　左翼團戰鬪

十一月二十六日午前八時頃より、我重砲及野砲の猛射は、敵の壘上に震へり、午後零時、歩兵の銃火驟雨の如き所、忽ち見る轟然たる爆聲起ると同時に、渦烟天に漲れり、是れ胸牆爆破の爲め、裝置藥の爆裂したるなり。(而れども此爆破は奏功十分ならず、突撃隊は、爆烟の下に突進するなり、前田隊の突撃隊は、工兵隊と共に、奮前して支那圍壁に沿り、山中隊の突撃隊は、東鷄冠山北砲臺に向ひ、胸牆頂に達し、いづれも慘烈なる爆藥戰を行ひ、其一部は砲臺内に突入したり。又他の一部は、左方咽喉部に突前したり、而れども其先進中隊は、敵砲の爲め苦戰其極に達し、又Q砲臺に向ひたる一部は、今や敵と爆藥彈を交換しつゝあり、又新山隊の一部は、山腹の敵壕に至り、是亦爆藥戰鬪中に在り、此時我砲火は益猛烈にして敵の壘上壕上、所として其火力の及ばざるところなく、壘砲の一部も其破壞する所となれり。午後一時三十分、前田隊の一部は、已に舊圍壁に達し、突撃部隊は逐次潮の如く、闖入奮前の地歩を占めんとす、敵は其火力を盡して之を防ぎ、突撃隊は暫らく壁下に停止するの止むを得ざるに至れり、又Q砲臺への突撃は、胸牆に達し得たるも、是亦其先頭は全滅せんとするの狀況に在り。又北砲臺胸牆上に達し奮鬪しつゝある突撃部隊は、漸次其損害を増加しつゝあり、(午後一時四十分土屋中將は其指揮點に於て敵彈に傷けり)午後一時五十分、更に突撃隊を増加し、北砲臺の突撃を強行し、又東鷄冠山の突撃部隊は、中腹散兵壕を奪取するを得たるも、其頃は已に其兵の大部は死傷し、殘兵寡少、更に發展の餘地を有せず、午後三時、青木大佐北砲臺に向ひ、軍旗を提げ奮前し、終に胸牆を占領したり。而れども敵の爆藥は、我を損する秒に加ふ、午後四時過敵は猛然として東鷄冠山中腹に逆襲し來り、我終に退却す。此時に方り、一戸砲臺よりして

東鷄冠山北砲臺咽喉部及Q砲臺背面を砲擊し、爲めに敵兵約五十の退却するを見る、而れども各面の苦戰は持續して午後十時に至り、益々其損害を加ふるのみ、二十七日午前二時、青木部隊は北砲臺に向ひ、最後の突擊準備の爲め、胸牆工事を急ぎつゝあり。又前田隊は、一戸砲臺左方面より舊圍廓に突進せしも、敵の側射の爲め空しく損害を受くるのみにて、其目的を達する能はず。拂曉我重砲は、北砲臺に向ひ、其猛火を注ぎたるも、胸牆は終に之を放棄するの止むを得ざるに至れり。左翼團各方面皆不利の狀況に在り、二〇三高地の奪取を待たざれば、戰局の發展又見る能はざる場合となれり。

b 中央團戰鬪

轉じて中央團の戰況を見ざるべからず、中央團左縱隊、先づ支那舊圍廓を奪取し、尋て砲臺を占領せんとす、分ちて二隊となり、十一月二十六日午前十一時を以て、豫定の陣地に就き、午後一時我砲火の威力の發現を待ち、西舊砲臺に於ける我守備隊の掩護射擊を得て、野溝隊の一部の第一線隊は、左右より猛然として、圍廓凸出部交叉點の東西に向ひ突進す、而れども敵の抵抗頑强にして、其銃砲火は我を掃射し、僅かに其凸出部を占領したるのみ、增加するもの相尋て死傷し、其損害頗る多大にして、寸步も突進の餘地なきに至れり。又其凸出角に向ひたる佐藤隊の第一突擊隊も、亦敵の猛射に會し、僅かに圍廓內に突入したるもの、皆擧げて壯烈なる最後を遂ぐるに終れり。第二突擊隊は、其鎌田隊長傷き、終に其目的を達すること能はず、第二突擊隊も、亦同一の運命に陷り、終に皆共に効を收むること能はず、現狀維持の外なきに至れり。

午後六時十五分、中央團長は左縱隊に命ずるに、特別豫備隊將さに旅順に突入せんとするを以て、左縱隊も亦突擊を行ふべきを命じたり、依て野溝隊は、其一部を以て、凸出部の橫牆に突擊せしめ、堤隊の一部を以て、圍廓に肉薄し、殆んど全滅の慘況を現出せり。更に新鋭の奥田隊を加へ、更に突擊を强行せんとす、野溝隊の一部は、猛進突前し、多大の損害を受け、殘兵を以て突出部の橫牆を支持す。新來奥田隊は、未だ地形に通ぜざるが爲め、縱隊副官之が嚮導と爲り前進す、此夜月明我行動を照すの不利あるも、亦新來隊の爲め便なきにあらず、鐵條網破壞隊は先進し部隊之に續

進し、敵前五十米突に達し、已に圍廓と相接す、時に敵の地雷爆發し、加ふるに敵火猛注一瞬時にして、我死傷二百七十を出すに至れり、佐藤隊の第一線は、今や正に突擊を開始せんとす、時に團長の命あり突擊を中止せり。

c　決死獨立隊の突擊

有名なる中村少將の率ゆる決死隊は、右翼中央、左翼兵團及び總豫備隊より、二個隊を撰拔して、成るものにして、全隊皆十字の白襷を爲し、其胸底決する所の計畫は、旅順街道より進み、松樹山補備砲臺を奪取し、圍壁に達し、尚ほ白玉山砲臺に突擊せんとす。此の壯烈なる決死隊は、十一月二十六日未明、グロバトキン堡壘北方に集合す、攻圍軍司令官其行を壯とし、之に臨みて曰く、『陸には敵軍の大增加あり、海には波羅的艦隊の來航遠きにあらざらんとして、國家の安危殆んど我攻圍軍の成否に依りて分れんとす、是時に當り、此獨立隊突擊の壯擧を斷行す、予は死地に臨まんとする此隊に對する屬望の實に切實なるものあるを信ず、諸氏が一死以て、君國に酬ゆべきは、正に今日に在り、希くば努力せよ』と。決死隊は已に行進を始めたり、大久保中佐其一部を率ゐ、先頭は已に松樹山方面の地隊に達し、午後八時三十分、補備砲臺に突擊す、大久保中佐は、已に先づ敵彈に傷きたるも屈せず、奮進して午後九時、砲臺下に達す、我頭上には松樹山砲臺より猛火を浴び、加ふるに敵散兵壕前二十米突に達するや、地雷の爆發二回に及ぶ、而れども決死の將士、更に意とせず、進んで壘下に涉る、爆藥紛々、砲火嚢々、側面よりは銃火後方よりは火彈、我が死傷轉瞬に加はるも、投藥、擲石、奮鬪力戰を繼續す、中央隊及左翼隊の撰拔隊も、奮前力鬪するも、亦猶前隊の如く、苦戰中に立てり。總豫備隊の撰拔隊が北側を迂回して、突進せる頃は、已に中村少將以下將士敵火に死傷し、爆烟天を抹して天爲めに暗く、迸血泉を噴て、地爲めに漂はんとす。爛肢紛々、肉泥渾々、鬼神且奔れる白襷隊の壯擧も、其効を收むるに至らず、二十七日午前一時、退て松樹山東麓鐵橋附近に至り、殘兵散じて原隊に復歸す、千秋史上、血痕長へに陸離たるものあるを覺ゆ。

d　中央團右縱隊の二龍山砲臺突擊

右縱隊は將に二十六日午後一時を以て、二龍山砲臺盤龍山新砲臺を占領し、二龍山

南方一千米突の高地を奪取せんとす、此日午前十時三十分より彼我砲火は山岳を震撼し、午後一時、我左右突擊部隊は、前壕雨破塊部より本廓は向ひ突擊し、後續部隊之に踵く、而れども敵の砲火は峻烈にして、我は唯空しく其多大なる犧牲を供ふるのみ。午後三時三十分、豫備隊より累次增援せしも、悉く奏功を見ず、服部中佐奮然起て猛進し、午後四時、原田少佐も之に加はり、突擊又突擊、猛烈を極めしも、將校の大部は死傷し、中佐以下五名を餘し、原田隊は一中隊一特務曹長を餘すのみ、胸牆外斜面に據れる一中尉は能く敵の投爆に方り、服部中佐更に短兵突進、終に重傷を負ふて斃る、午後七時、福谷中佐殘兵を以て突擊したるも、苦戰益加はり、二十七日午前四時に至り、將校全部死傷し、殘兵退却の止むを得ざるに至れり。右方突擊隊は、午後一時、其一部隊を以て、砲臺內に突入し、縱橫力戰せしも、皆悉く死傷す。胸牆に殘れる決死の兵は、皆悉く墻上の肉泥と化し去れり、別働隊たる服部隊の一部は、廿六日午後一時、舊國廓に向ひ、突擊したるも、咽喉部に現はれたる敵は頑强にして、我の損傷算なし、累次の突擊も、皆効なく、廿七日午前三時三十分、殘兵僅かに退却す、又福谷隊の一部は、二龍山右翼國廓に突進せしも、頑强なる敵の抵抗の爲め其功を奏せず。

E　二〇三高地攻擊……其奪取

已に數々記したるが如く、旅順の運命は全く此高地の奪奪に係れり、累次試みられたる猛攻强襲も、未だ其功を收むる能はず、今や軍司令官の意圖に基き、最後の攻擊を開始せんとす。

二十七日我砲火の全力は、二〇三高地上に震へり、午後に亘りて砲聲殷々、硝烟濃々、將に六時を期して、勇猛果敢なる最後の攻擊は、高地より赤坂山頂に加へられんとす。赤坂山は、高地と海鼠山との間に在り、高地と相待て優强なる防禦力を構成す、右翼友安部隊の香月隊は、西南面より、吉田隊は西面よりし、中央馬場部隊の一部は、西北面より、別に一個大隊を以て、赤坂山を攻擊す、香月隊の一部たる第一大隊は攻路の西南よりし、其一部たる第二大隊は、中央よりし、又其一部たる第三大隊は、西北よりし午後七時二十分、突進の機熟せるを待ち、突擊を開始す。敵の火力猛烈にして、我死傷算なし、太陽溝、鴨湖嘴、老鐵山より、猛然たる砲火は、雨注し來り、高地西南突角に於ける我兵は、其火中に斃られ、生還する者僅かに十人を數ふるに過ぎず、殘

兵の一部は夜を徹し烈風に乘じ、敵の掩蓋に放火せり、第二回の突擊は、九時三十分に起れり、然れども殆んど同一の運命に陷り、吉田隊も亦多大の損害を受くるの外、結果見るべきなく。馬場部隊寺田隊の一部は、吉田隊に連繫して二〇三高地に向ひ、他の一部は、赤坂山に向ひ、二十七日午後六時を以て突進す、其先頭は已に鐵條網に達し、之を切斷することを得しも、敵は赤坂山より之を瞰射し、我損害多大にして前進する能はず、午後十時更に突進せしも、突擊隊長戰死し唯其位置を固守するのみ。赤坂山に向へる寺田隊の一部は、赤坂山の地脚に在り、他の一部は北地脚に在り、時に我砲火は主として、二〇三高地に傾注しつゝありしが故に、其威力を赤坂山に及ぼす能はず、而れども午後六時他の突擊に相應じ、決死の一隊は、奮前して第一二散兵壕を奪ひ、隊長富澤少佐傷き、更に奮前して、第三散兵壕を奪ひたるも、敵は近距離に踏み止まりて、最も頑强なる抵抗を持續し、午後十時增援隊として山下に到りしも、敵の銃砲火猛烈にして前進する能はず、敵は益東北方鞍部より機關砲を猛射し、加ふるに猛烈なる逆襲を以てす、我れ終に一旦奪取したる散兵壕を棄て、第一散兵壕に退却したり。是に於て中間鞍部に向ひ、他の一部隊を以て突擊せしも、其目的を達する能はず、是に於てか、更に友安部隊より三個中隊を、馬場隊も亦其豫備隊を傾け、總豫備隊より一大隊を增加し、突擊又突擊激戰終夜、終に又目的を達する能はず、二十八日新鋭兵團長主として攻擊を督し、其一個大隊を增加し、午前八時十八分香月隊は、再び突擊を開始し、奮前して第一掩蓋を奪ひ、終に其頂巔に達す、敵は諸砲臺より猛火を注ぎ、但見る我勇敢なる攀登部隊は、空しく敵火の香餌となり、餘すは僅かに四五名のみ、友安少將叱咤奮揮し、更に其奪取を命ず、我兵遲疑せず更に奮前し、諸兵之に踵ぐ、鞍部に向へる友安部隊の一部は、激鬪慘烈を極め、終に頂點の一壘を奪取したり。又馬場部隊の寺田隊は、此日午前八時突擊を開始し、同九時三十分敵火猛烈、我兵逡巡す、寺田中佐奮然叱咤し、大刀を揮ひ、土嚢上に屹立し、指揮最も力む、敵彈乍ち中佐を斃す、十時三十分に、又午後三時三十分に、又四時三十分に、又午後五時に、累次の突擊皆功を奏せず、午後八時最後の突擊は敢行せられたり。終に能く頂點に達せしも、敵の猛烈なる逆襲は、終に又頂點を奪回せられ、我將校以下大半は死傷す、我は僅に中腹散兵壕を支持す。之を要するに連日に亘れる猛烈果敢なる突擊の功果は、高地西南の一局我手中に在るの外、赤坂山北斜面を支持する

あるのみ。

二十九日各隊は其位置を支持し、唯猛烈なる砲火を敵上に加へ、三十日更に攻撃を開始せり、新に増援し來りたる村上隊は、西北攻路より突進す、而れども敵の赤坂山よりする瞰射の爲め、多大の損害を生じ、前進するを得ず、又西南角に於ける香月隊は、一方村上隊の突撃と協力して、奮進せんとせしも、村上隊の狀況斯の如くなるを以て、奮前の機會を得ざるのみならず、敵は正に其火力を頭上に集め、進むもの必ず斃るゝの狀況に在り、友安少將乃木少尉に命を喞め、村上隊をして突撃を敢行せしむ、此時少尉敵彈に斃る。村上隊個匂前進し、損害多大なり、其能く僅かに歩兵陣地に達し得たるものは突撃奮前中鐵條網前に大半は死傷し、村上大佐殘兵を率ゐて奮前終に頂點に達す。又機會を伺へる香月隊は猛然として突撃を開始し、今や奮闘力戰其極に達し、友安少將其僅かに剩せる豫備二個中隊を指揮して第二線地に進み、香月隊を督し益突撃を敢行す、午前十時を以て、二〇三高地の大部我有に歸せり。而れとも敵も亦之を奪回せざるべからず、十二月一日午前一時半、敵兵約六百猛然として逆襲し來れり、こゝに再び無比の力戰は開かれたり、友安少將其二個中隊を

以て突撃せんとす、恰も齊藤少將一個大隊を率ゐて來り會す、是に於て友安隊の一部を山頂に增加し、齊藤部隊より一方香月隊に二個中隊を、他方村上隊に二個中隊を增加す、而れとも村上隊の苦戰は其極に達し、東北頂點再び敵の奪回する所となれり。香月隊は僅かに其位地を固守す。

逝宵に亘れる夜戰は、實に有史以來慘烈の最大なるものなり、攻防兩兵が殆んど人間以上の猛攻力防を極めたる、其片影は滿地死傷を以て掩はれ、一望山なく、唯勇者の骸軀の横るあるのみ、是に於て、彼我の軍使相會し一部の休戰を約し、死傷の收容を行へり。今や最後の爭奪は行はれんとす、右翼團は主として赤坂山、寺見溝三里橋を攻撃し、新鋭兵團は主として二〇三高地を攻撃す、西南方よりは齊藤部隊、東北方よりは吉田部隊十二月五日を以て一撃二〇三高地の占領を全ふせんとす、其意氣想ふべし、齊藤部隊は猛然として突進せり、激戰齊藤部隊に讓らず、終に東北角を占領し、頑强吉田部隊は午後六時より猛進し、激戰健闘、終に西南角の全部を占領す。なる敵軍終に敗退す。海鼠山に於ける我野砲は、之を側射し、敵を斃すこと無數、斜面爲めに敵屍を以て掩はれ、高地已に全く我有に歸す、工兵直に作業を行ひ我砲火

は附近諸砲臺を猛射し、赤坂山、寺兒溝、三里橋方面は我敵射區域に在るのみならず、其背後は全く我制壓を受くるが故に敵は早くも六日より退却を始め、左翼團之を追擊して、多大の損害を與へ悉く之を占領す、二百三高地占領と同時に港内敵射の爲め、觀測所は已に設けられたり、旅順の運命は已に此時を以て決す、爾靈山又鐵血山の名、千秋戰史の上に魏し。

其六、旅順要塞の開城及第一太平洋艦隊の全滅

A　港内及敵艦射擊

二〇三高地已に我有に歸す、其觀測は自在なり、敵艦は點々指說すべく、之を射擊するは猶ほ浮鷗を獵るに齊しきの觀あり、之を大本營着電に徵せんか、十二月三日海軍砲を以て敵艦を射擊し、ポベータに六發レトウキザンの如きものに八發、其他の軍艦に十六發の命中彈あるを認めたり、五日も亦ポベータに七發、ポルタワに十一發、レトウキザンに十一發の命中彈を觀測し、午後三時過、我一彈白玉山の南方火藥庫に命中し、大爆烟を揚げ、尋て火災起り二時間に及ぶ、重砲の射擊はペレスウキットに二發命中し、ポルタワの如き一艦大爆烟を揚ること一時間に及びたり。十二月六日重砲は午前十時四十五分敵艦射擊を開始し、正午までに、レトウキザンに四發ペレスウエットに一發命中す、數日來續行せし敵艦射擊に因り、ポルタワは右に傾き、上甲板まで浸入し、レトウキザンは艦體左に傾き、バーヤンは坐礁したるが如し。又海軍砲隊指揮官の報告は明に其結果を證す、曰く『本日二百三高地に到り、港内を觀測すポルタワは沈沒して海底に膠着しつゝあり、又レトウキザンは著しく左舷に傾きつゝあり、右二艦は到底戰鬪航海に耐へざるものと確認す、右は今朝發見したる所にして昨日の砲擊の結果なりと信ず、本月二日以來、水師營附近の高地にて觀測を爲しつゝ引續き毎日白玉山南側に碇泊しつゝある敵艦を砲擊しつゝあり、同所よりはポベータ、レトウキザン、バルラダは檣若しくは煙筒の上端を見るのみなれとも、命中彈を觀測することを得、其他は確に命中の爆烟を認め得るも、山陰に隱れて、敵艦の何れなりや、彈着點明ならず、本日までの合計命中彈、ポベータ(?)三十四發、レトウキザン又はバルラダ三十二發、ポルタワ十一發、其他命中爆煙を認めたるもの五十發なり。昨日はポベータに七發レトウキザン又はバルラダに十

一發ポルタワに十一發命中したる外、午後三時半頃、白玉山の南側にて命中彈の爲め、大なる爆聲を起せり、火藥庫の爆發なりやと思はる、昨日の砲擊にて意外の好果ありしこと分明し士氣大に振ふ』と

十二月七日、大口徑を以て行ひたる敵艦射擊は、其成果良好にして、バルラダ、ペレスウエート及びポベーダに各多數の有効命中彈を見たり之がため、ペレスウエートは午後三時火災を起し、ポベーダは右舷に傾斜するに至れり。午後二百三高地より、觀測する所に依れば、ポルタワは昨日の如く沈沒して海底に膠着しあり、レトウキザンは其儘沈降海底に膠着しあるものゝ如く、海水ステルンウォークの邊に達せり、又此日の砲擊に依り、ポベーダは大損害を受け、著しく右舷に傾き其赤き艦腹を西方に現しつゝあるを現認せり、其の翌八日にはペレスウエートは中央の煙突著しく破壞して、艏の方低くステルンオークまて沈沒し、ポルタワは上甲板線まて沈沒、レトウキザンは右舷に傾き、殆んど上甲板まて沈み、ポベーダは亦殆んど上甲板まて沈沒し、バルラダはレトウキザンとアムール(水雷敷設艦)の間に在りて艦首少しく見ゆるも損害の程度明了ならず、バヤーンは前甲板に火災を起しつゝあり、セバストポリは東港内大起重機の傍に横着しあるものゝ如く、檣頭僅に見ゆるのみ、其艦體は全く山陰に隱れて見えず、此日は主として、陸海軍砲を以て、バルラダ、バヤーン及びセバストポリを砲擊しつゝあり、其結果として、海軍參謀の報告に依れば、『午後零時三十分、ペレスウエートの沈沒は確實と認む、同艦は今や殆どポルタワと同一の狀態に陷れり、又バルラダは少しく左舷に傾き始め、我軍は之に向ひて尙盛に砲擊しつゝあり、八日バルラダに命中せし彈數は、八發にして、同艦は之がため火災を起すと同時に、左舷に傾き、今は艦尾稍々沈みしを以て、既に戰鬪航海の力を失ひたるものと認む、又ペレスウエートの北方陸岸に近く、ギリヤーク(砲艦)あるを發見し、之を砲擊せしが、十一發の命中彈あり、是れ亦廢艦に歸したるものと認む、本日バヤーンに命中せし彈數二十二發にして、同艦は爲めに午前十一時三十分頃より、大火災を起し、午後四時十五分に至るも鎭滅せず、因て是亦大損害を受けたるものと認む、其後セバストポリ、アムール及び運送船に向ひ砲擊したるも其結果詳ならず』又曰く『昨日海軍砲を以て敵艦隊砲擊の成蹟は、バヤーシに命中六發アムールには十四發に及び、アムールは其艦尾稍々沈下せり、其他白玉山東南麓、並に機

器局附近の倉庫建築物等に命中せるもの三十六發にして、多大の損害を與へたり』と、九日に於ける敵艦隊砲撃は、ポペーダに命中五發、バヤーンに七發にして、バヤーンに火災を起し、且つ左舷に傾くこと約二十五度にして、將に轉覆せんとするの狀態に在り、レトウヰザン、ポルタワは滿潮の時は、海水上甲板砲塔の下部に達せんとすバルラダは左舷に、ポペーダは右舷に著しく傾きて、水線下部を露出し滿潮の時には、上甲板の一部分は海水に浸さるゝを見る、ペレスウエートは滿潮の際には、後部はステルンオーク、前部は艦首發射管の邊まで沈めり。又ギリヤーク、は白玉山の南麓に接し、極めて陸岸に近く約二十度?傾斜しあり、破壞して海底に膠着しあるものゝ如し、セバストポリは黎明港口外に出て碇泊せり、我彈着を避くる爲めならん。

十一日には大口徑砲を以て旅順内部を砲撃し、ポルタワ、アムール並に黄金山下の無線電信所に大なる損害を與へ、且つ武庫を射撃し、之をして火災を起さしめたり。數日來續行せし敵艦射撃の結果は、海軍參謀の言に依れは、其戰鬪艦四、巡洋艦二、砲艦一、水雷母艦一合計八隻は其最後を示し、又之に對し射撃するの必要なきに至れり。

十三日海軍砲は主として老虎尾機器局、魚雷營及び其附近に繫留しある船艇を砲撃したるに、魚雷營は火災を起し、約一時間燃燒し、船艇にも六發命中せり、又雜役船三隻を破壞し、他の一隻は火災を起して沈沒し、建築物に對する砲撃も、亦多大の損害を與へたり。又セバストポリに向ひても、間接射撃を行ひしが天候不良にして觀測十分ならざるを以て之を中止せり。此の如く我砲火の威力は間斷なく敵の頭上に震へり、敵は一部の休戰を求め、且つ私信の發送を請ふ我れ之を檢したる後之を許し、且つ一部の休戰を約す、守備軍司令官ステッセル將軍は、病院の保護を求め赤十字旗砲撃問題に付き、交渉する所あり、我は斷々乎として、公明なる主張を貫行したり。(附錄第十五號)

B 旅順封鎖最後の時期に於ける海軍の行動

二〇三高地より觀測し、敵射正確の巨彈は、日に敵艦の運命を奪ひ、今は已に全滅せ

んとし、獨り戰艦セバストポリは、其彈着を避けて港外に出づ、勇敢なる我水雷艇は直に之を襲擊せり。即ち十二日午前零時三十分、海軍中佐笠間直の指揮せる一水雷艇隊は旅順港外に避泊せる、セバストポリを襲擊したるも、其効果確實ならず、之に次ぎ海軍少佐正戸爲太郎の指揮せる、他の水雷艇二隻(?)も猛烈なる敵の防禦砲火を冒して、適良の距離に迫り、數回の發射を遂げ、其爆發震動を感ぜしも翌朝敵艦は依然其位置に在り、我艇隊には一の損害なし、十三日午前二時三十分、海軍少佐荒川仲吾の指揮せる他の一水雷艇隊も、敵を襲擊し、敵砲火の下に、數回の發射を試みたるも、其効果確實ならず。此襲擊に於て一艇は煙突に一彈を蒙り、他の一艇は機關室に一彈を受け、進退の自由を失ひ、僚艇に曳かれて歸着せり。但し各艇共死傷なし、又午前六時、海軍少佐關重孝の指揮せる、他の一水雷艇隊も襲擊を試みしが、探照砲火の爲め、敵影を發見する能はずして、遂に目的を達せず、同時又海軍大尉足立六藏の指揮せる、他の二隻の水雷艇は敵艦に近づき、水雷發射を遂げ、爆發水烟の揚るを認めたれども、効果未だ明瞭ならず、此際二隻共猛烈なる敵の砲火を蒙り、各々一彈を受け、一隻には下士卒三名の負傷を出せり。

又十四日夜、我水雷艇隊は大舉して頗る勇壯なる敵艦襲擊を決行せり、各艇隊は正子前後旅順口外に達し、先頭艇隊(司令少佐内田良隆)及特種水雷艇(艇長海軍少尉横尾敬義)は先づ偵察の目的を兼ね、深く敵の泊地に侵入し、午前一時敵艦及要塞の探照砲火の下に襲擊を果たせり、此時一艇(艇長大尉三田村鹹造)は一彈他の一艇(艇長大尉中牟田武正)は四彈を被り、後者の下士卒三名負傷せり、是れより各艇隊攻擊の目標を定め先頭の甲艇隊(司令中佐笠間直)は、敵防禦の破壞及敵探照燈火の牽制を目的とし、第一に進擊し、乙艇隊(司令少佐神宮司純清)丙艇隊(司令少佐大瀧道助)丁艇隊(司令少佐關重孝)及戊艇隊(司令少佐河瀬早治)之に次ぎ、敵に接近して午前二時より、同四時に至るまで、各々勇敢なる水雷攻擊を續行せり。就中攻擊動作の猛烈なりしは、丙艇隊にして敵艦に肉薄して發射を遂げ、順次退却中、一艇は瞬時に敵の數彈を受けて、艇長大尉中堀彦吉外下士卒五名戰死し一名負傷し艇も亦自由を失ひたるを以て後續艇(艇長大尉中原彌平)は敵彈雨飛の下に百方其救助に努め、辛ふじて曳行中、曳索敵彈に切斷せられ、曳艇も一彈を受け、卒一名戰死し、被曳艇も更に數彈を被りて沈沒に垂れんとしたるを以て、已むを得ず生存者を收容して、艇體を遺

棄せり。別に同艇隊中の他の一艇(艇長大尉庄野義雄)も一彈を受け、下士卒一名戰死五名負傷して艇も亦一時運轉の自由を失ひしが、僚艇二隻(艇長大尉渡邊眞吾)(同森鎭藏)に護衛せられて歸航せり。其他各艇隊も皆敵の砲火を冒して勇敢なる襲擊を果したるも、幸にして各艇損傷なし、攻擊の効果は未だ明ならざるも命中爆發を確認し得たる、發射水雷の數少なからず。翌朝望樓の觀測する所に依れば、セバストポリは前日よりも更に其艦首を沈め、南々東に向き風潮に依りても方位を變ぜざるに至れりと云ふ。

十五日夜も我水雷艇隊は、又た城頭山下に殘存せる敵艦セバストポリ、オトワズヌイ及び驅逐艦數隻を襲擊せり、此時甲艇隊(司令少佐關重孝)は續紛たる降雪を冒して、午前四時三十分頃敵の泊地に達し、セバストポリと驅逐艦との間に突入し、各艇セバストポリ及びオトワズヌイに向ひ近距離より發射を遂げ、毎回爆發を確認し、更に敵の驅逐艦と百米突以内に砲戰して、之に多少の損害を與へ、又一艇(艇長少佐關重孝)より發せる水雷は、敵の一驅逐艦に命中せるが如し此大膽なる襲擊中、敵の防禦砲火は固より猛烈なりしも、距離餘りに近かりし故に意外にも、各艇一の損傷なし。乙艇隊(司令少佐神宮司純清)之に續きて進擊し、敵艦に對する數回の發射中、少くも二回の爆發を認め、尙ほ敵驅逐艦と砲火を交へつゝ洋心に出てたり。此襲擊中、一艇(艇長神宮司純清)の中機關士渡邊竹三郎は敵彈の爲め輕傷を受け、他の一艇(艇長大尉玉岡吉郎)の下士卒二名戰死卒一名輕傷す、又た他の一艇(艇長大尉横地綻二)は其節修理中に在りしが襲擊命令を受け、俄かに工事を急ぎ、司令たる少佐江副武靖も之に乘じ、僚艇に後れて出發せしが、遂に他艦に合同すること能はず、單獨セバストポリに肉薄して、勇敢なる襲擊を試み、江副少佐は敵彈に戰死し、卒一名負傷し艇は無事集合地に歸來せり。此の如く我水雷艇隊は連夜果敢なる攻擊を續行し、命中爆發を確認し得たる水雷多きに拘はらず、敵損害の程度を確認する能はざるは遺憾なりし、又此日望樓よりの視察報告に依れば、帆檣の折れたる敵の驅逐艦一隻海岸に擱座し、干潮に際し其艦腹及び推進器の水上に出づるを認むと云ふ。敵艦最後の狀態に付き、東郷長官は報告して曰く『本職は親しく旅順港外を視察せしに、遂に我水雷艇隊の攻擊を受けたる敵艦セバストポリは、城頭山下の海岸より約四百米突淺水の處に碇繫し、頻りに損傷部より浸水を排出するに努めあるも、今

や艦の傾斜少なくも十度に及び、艦首少しく沈下し、旅順口現今の狀態の下に到底復舊し得るの見込なく、殆ど全く其戰鬪航海力を有せざるものと確認せり。又驅逐艦一隻も確に我水雷攻擊のために破壞され居るを認む、我艦隊にて捕へし信ずべき捕虜の言に依れば、十三日以來の襲擊に於て我水雷八箇セバストポリの防禦網に命中し、又其艦體には、水雷一個命中せること確實にして、後者は十五日夜に蒙りたるものゝ如く、十六日早朝艦員混雜を爲し、陸上よりホーサー(大綱)を導くを見たり、其水雷は左舷後部に命中し、外鈑繼目のリベット(綻釘)しある部分は、凡そ八呎破損し、目下艦首を港外に向け、艦尾は海底に坐し、中甲板の砲口水面に接せん許り、右舷に傾き、下甲板の窓は艇より三番目まで水中に沈めり、右舷艦尾に水雷艇一、左舷艦尾に喞筒船一、及水雷敷設船の如きもの繫留し、喞筒を用ひて極力排水を努めつゝあるも、容易に航海に堪ゆ可き程度まで回復し難かるべし、驅逐艦一隻も同夜艦首に水雷を受け、目下陸岸に擱坐し居れり、セバストポリ自身は、防禦網を張り居らず、艦首にローアヤード(大檣桁)を横に浮べ、之に防禦網を張り又其先頭三十乃至四十呎の所に三呎內外の角材を綱索にて繫ぎたるものなるを山形に浮べ、防禦網を釣るせり、又防材の兩端には標杆の如きものを立てありと云ふ。と已にして、セバストポリは其運命を港外の波底に委ね、威容堂々、極東を壓し、我を壓迫せんとしたる露國大艦隊は、其微弱なる小艦を餘して、こゝに全滅し了れり。

損失戰艦

戰艦　初瀨、八島、
巡洋艦　高砂、吉野、浪速、宮古、
北他の軍艦　平遠、愛宕、大島、海門、
驅逐艦　曉、逐鳥、

翻て第二時期以後に於ける日本海軍が其封鎖監視に力めつゝありたる時期を見るに我艦艇の不幸に會せしもの少なからず、と雖も當さに來るべき大海戰に對し、我海軍の信じ、且つ期する所の大なる、又自ら見るべきものあり。今や敵の浮動力僅少なる殘艦を餘して、主要艦全滅す。封鎖の一部は、自ら解除せらるべき場合となれり。十二月二十二日東鄕提督の之が宣言に曰く、

武勇絕倫なる攻圍軍の猛烈不撓の攻擊に因り、旅順口の死命を制すべき、二百三高地が我軍の有に歸せしより、港內敵艦隊に對し、攻城重砲の擲射、益々其威力を逞ふし、ポルタワ、レトウヰザンは忽ち沈沒し、ポベーダペレスウエート、パルラダ、バヤーン相次て擊沈せられ、獨りセバストポリのみ去る九日朝背面よりの砲火

を遁れて港外城頭山下に逸し、碇泊せしも、是亦我水雷艇隊の連續果敢なる襲撃に傷づき、今や全く戰鬪航海力を失ふに至れり。旅順敵艦隊の主力は、事實上茲に全く滅亡に歸し、只殘存せるもの無勢力なる砲艦オトワズヌイ及驅逐艦數隻に過ぎず是に於て聯合艦隊は、去る五月一日以來强行したる封鎖配置中、不必要なる一部を撤すると同時に、益々旅順港口及港外よりの破封鎖船の監視を密にし且殘存の敵艦隊に對する警戒を嚴にせんとす。

此長日月の封鎖戰中、敵の敗設及浮流水雷の危害、風濤濃霧の險難等、常に絶へず、前に宮古、吉野、初瀬及海門の災厄あり、後に平遠、濟遠の遭難起り、忠死の將卒亦少なきにあらずと雖も、幸にして終始封鎖を維持することを得、時に敵の脱出すること有りしも、每々其企圖を破り、終に攻圍軍の至大なる協力に因り、茲に殆んど當方面敵艦隊全滅の成果を見るに及び、又浦鹽方面の敵艦隊も先きに我第二艦隊の爲めに、大打擊を受けて爾後再び出動するの氣勢なきに至り、只々益々大元帥陛下御威德の及ぶ所の洪大なるに感激するの外なきなり、而して此間又麾下各部隊が各、其能力に應じて、終始能く其任務を遂行し得たるのみならず、死を決して敵港を閉塞したる閉塞船隊、連續倦まずして機械水雷を沈置したる艦艇危險を冒して敵海の掃除に從事したる特別掃海隊、並に敵彈に曝露して敵艦を監視したる前進望樓員等の特別勤務が當方面の封鎖戰に至大の効力ありしことを具報するは本職の上下に對する職責と信ずる所なり。

C 最後の時期に於ける陸上砲臺の攻擊占領

a 東鷄冠山北砲臺の占領

第四回本線總攻擊に於て、猛烈果敢なる我攻擊も、未だ奏功する能はざりし、敵の最堅壘たる東鷄冠山砲臺に對し、攻擊準備其後日を逐ふて整ひ來り、十二月十七日夜を以て、胸墻爆破の裝置を施し、十八日將に其活動を開始せんとす、十八日午後一時五十分、敵の爆藥は我が電纜を斷ちたるに依り、直に之を繕ひ、午後二時十分、轟然地殼を劈破せる、大音響は天柱を震憾せり。砲門掩蓋は勿論、土石の飜飛、爆烟の渦騰

するもの、其悽壯比すべきものなし。第一突擊隊は、乍ち驀進せり諸隊之に踵ぐ、敵は大破孔前に抵抗し、退いて第二胸墻に據り、其機關砲火を猛注す、最後の突擊隊は更に奮進せり、望臺、Q砲臺、東鷄冠山の敵火は激烈なるのみならず、前面の火力更に峻急なり、苦戦午後四時に至る、時に迫擊砲は、第二胸墻を砲擊し、作業班は更に攻擊の準備を急造しつゝあり、右翼團長自ら穹窖内に在りて戰を督し、形勢の危險を見、憤然其豫備隊を增加せしめ、更に猛烈なる突擊を行ひしも、終に其の目的を達するに至らず、然れども今や陣地は整備し來れり、是に於て更に火力を以て相對す、敵稍動く、我兵爆藥を投じて、第二胸墻に於ける敵火を爆滅したり。敵終に少數の兵を殘して退却す、我兵突擊又突擊、第二胸墻を奪ひ、敗兵を追ふて第三胸墻を奪ひ、兵舍内に突入して、終に北砲臺の全部を占領す。工兵を以て直に其工事を施せり、敵は地下交通路を爆破し、外壕架橋を破壞して退却せり、我攻擊を開始するに當り、爆破したる土砂間に埋沒せられたるもの僅かに脫するを得たり、退却兵は、今や砲臺との通路散兵壕に據れり、十九日夜一突擊隊は、一賊突入して直に之を占領す。

b　右翼團の戰鬪……敵陣地占領

右翼部隊は十二月二十二日午前五時敵兵動搖の機に乘じ、後三羊頭村北方高地の敵を襲擊して之を占領し、次て、同七時、同村西方半島高地の敵を擊攘して、又之を占領し、同半島占領後敵は逆襲し來りしも直に之に擊退したり、我が重砲は後楊樹溝、東方高地の防禦工事、松樹山二龍山及H砲臺等を砲擊し、少なからざる損害を與へ、其結果を利用し、二十三日拂曉右翼部隊は、後楊樹溝東方高地の敵を攻擊し、午前七時四十分、同高地の頂界線を攻略せり。敵は太陽溝及鴨湖嘴諸砲臺より我占領せし陣地に向ひ、砲火を集中し、次て八時二十分烈しき逆襲を企て來りて、爆藥を投ずるに至りしも、我兵遂に之を擊退したり。爾後敵の砲擊稍々衰へたる以て、我は若干の工事を施設し、其高地の占領殆ど確實と爲れり。我攻擊の前後に於ける、重砲射擊に因り、西太陽溝北砲臺には、大火災を起し、H砲臺の十五珊知砲一門を破壞し、掩蓋にも多大の損害を與へたり、二十四日夜十二時頃三羊頭村及小房村の敵を奇襲して同村を占領し、逐次敵を擊攘して、午前二時十五分には大劉家屯の全部を占

領せり、數日來屢次擧行したる、我攻擊は每に其功を奏し、我右翼方面一帶に於ける敵の前進陣地は今や全く我占領に歸し了れり。

c　二龍山砲臺及松樹山砲臺の占領

今や急轉直下の勢となれり。爆破工事は完成せり、十二月二十八日午前十時五分、二龍山胸墻の全部は、我一點火と共に、天地を震撼せる大轟破の下に破壞せり。爆破口より突進せる山田隊は左及中央より、福永隊は右方より、敵の猛火を浴びて奮進し、已に其輕砲線を占領す、更に重砲線占領の準備を爲し、午後六時三十分、より攻擊を開始し、福永隊は松樹山、椅子山、案子山等より砲火を猛注せられ、苦戰に陷りたるも、山田隊の攻擊進捗し、奮前突進、午後四時二十七分、終に重砲線を占領す。更に咽喉部に向ひ、午後六時二十五分、山田隊は左方より、午後七時三十分福永隊は右方より、突入して、終に咽喉部を占領す、地下穹窖に殘兵ありて、尙ほ抵抗せしも、之を驅攘して、全部我有に歸す。

十二月三十一日、午前十時豫定の如く、松樹山砲臺の胸墻に大爆破を行ひ、馬場隊及渡邊隊の突擊隊は、相踵て突擊し、午前十一時頃、全部を確實に占領せり。敵は我行ひたる胸墻爆破に續きて、砲臺內部に布設したる地雷を爆破し、其一部は該砲臺の南方高地に退却せしが、一部は咽喉部に在る掩蔽部內に於て、爆破の爲めに墜落したる土砂により塡塞せられたり。此の掩蔽部に塡塞せられたる敵兵は、其後入口を掘開し、逐次之を引出し、悉く之を捕虜とせり。其數將校二下士以下百六十餘名なり。又該捕虜の言に依れば、我爆破の爲めに埋沒せられたる敵の死者は約百五十名なり。

d　諸砲臺の占領

中央隊の一部は、敵を驅逐し、明治三十八年一月一日午前七時、丑砲臺を占領し、次て盤龍山新砲臺を奪取せり。此に於て二龍山より盤龍山砲臺を經て、丑砲臺に亘る線は確實に我有に歸せり。又右翼隊の一部は。午前八時頃より、砲擊を開始し、午後二時に至り、頑强なる敵の抵抗を排除し、後三羊頭村南方高地を確實に占領せり、中央隊及左翼隊は午前九時頃より望臺に向ひ、攻擊を實施し、巧に我砲火を利用し

其六―旅順要塞の開城及第一太平洋艦隊の全滅
A―戰後の時期に於ける陸上砲臺の攻擊占領

て突進し、午後三時三十五分、全く望臺を占領せり。

D　旅順口要塞の開城

據るに險要無比の地形を以てし、守るに精鋭無比の軍隊を以てし、備ふるに最新武器を以てし、之を最新築城術を極めたる壘上に配置し、頑強なる抵抗を持續すると、爰に半歳、救援軍は漸次北方に敗却し、波羅的艦隊は尚ほ航途に在り、頽勢に立ち、重圍に在りて日に孤城を守る、敵帥の心事亦想ふべきなり。日本軍の精悍無比なる氣魄と其攻擊力は、彼の防禦力を凌駕し一壘又一壘、遂に二〇三高地を奪ひ、本圍廓を奪ひ、旅順已に要塞たるの性質を失ひ、武器を沈ひたる赤手となれり。今や一蹴して市街に闖入せんとす、日は是れ明治三十八年一月一日、我が祝砲は天に震ひ、地を撼せり、ステッセル將軍は諸將を會して、最後の會議を開き、悲痛憤扼、一座愴として又凄たり、烱たる諸將の碧眼毘たる其鬚髯緊握せる其双拳、如何ともすべからざるものは、最後の已に迫れる一事なり、開城は終に決せられぬ。

此日午後五時露軍の軍使水師營南方第一線に來り、書を致して曰く、

旅順口一九〇四年十二月

第二五四五號

貴下交戰地域全般の形勢を考察するに今後に於ける旅順口の抵抗は不要なり依て無益に人命を損ぜざるの爲め予は開城に付き談判せんことを望む若し閣下之に同意せらるゝに於ては開城の條件順序を討議する爲め委員を指命し並に予が委員が該委員と會合すべき所を選定せられんことを願ふ

予は此機會を利用して予の敬意を表す

ステッセル將軍

旅順口攻圍軍司令官男爵乃木閣下

と乃木司令官之を閲し直に一方は大本營他方は滿洲軍司令官に電報し二日の拂曉山岡軍參謀をして回答書を敵帥に齎らさしむ其書に曰く、

一九〇五年一月二日旅順口攻圍軍司令部に於て

貴下予は茲に開城の條件及順序に付談判せんとする閣下の提議に同意するの光榮を有す之が爲め予は旅順口攻圍軍參謀長少將伊地知幸介を委員に指

名じ尚之に若干名の參謀及文官を隨行せしむ即ち一九〇五年一月二日の正午に水師營に於て貴軍委員に會合すべし双方の委員は調印の後批準を待たずして直に効力を生ずる開城規約に署名するの全權を有すべく其全權委任狀は双方の最上指揮官の署名したるのみにして互に交換すべし

予は此機會を利用して敬意を呈す

旅順口攻圍軍司令官男爵乃木將軍

關東要塞司令官ステッセル將軍閣下

二日午後一時水師營衞生宿舍を會場とし、開城に關する談判は開始せられたり、我よりは伊地知參謀長津野田參謀、有賀法學博士、其他數名、露軍よりは參謀長レース大佐以下八名之に列す、午後九時四十五分を以て議を終り各調印を了す、其降伏條件に曰く、

第一條　旅順要塞及該港に在る露軍の陸海軍々人及義勇兵並官吏は總べて之を捕虜とす

第二條　旅順口に於ける全堡壘砲臺艦艇船兵器彈藥馬匹其他一切の軍用諸材官舍官有諸物件は現狀の儘之を日本に引渡すものとす

第三條　前二個條を承諾するに於ては其擔保として來一月三日正午迄に椅子山小案子山大案子山及其東南一帶の高地上にある堡壘砲臺の守備を撤し日本軍に交附すべし

第四條　露國陸海軍に於て本規約調印の當時に現存せる第二條の諸件を破壞し又は其他の方法に於て現狀を變更すと認むるときは談判を廢止し日本軍は自由の行動を取るべし

第五條　在旅順口露國陸海軍官憲は旅順要塞配備圖地雷水雷其他危險物の布設圖及在旅順口陸海軍編成表陸海軍將校官職等級氏名簿文官々職氏名簿軍隊艦船艇名簿及び其乘組員人名簿普通人民の男女人種職業員數表を調製し日本軍に交附すへし

第六條　兵器(各人の携帶兵器を含む)彈藥軍用諸材料官金官舍官有諸物件馬匹、艦船艇及其內部の諸物件(私有物を除く)は悉く之を現在の位置に整置すへし其受授の方法は日露兩軍の委員に於て議定するものとす

第七條　露軍の勇敢なる防禦を名譽とするにより露國陸海軍の將校及官吏は帶劍及直接生活に必要なる私有品の携帶を許さるへく將校義勇兵及官吏にして本戰役の終局に至るまて武器を執らす如何なる方法に於ても日本國の利益に反對する行爲をなさゝる事を筆記宣誓する者は本國に歸還することを承諾す

將校には各人に一名宛の從卒を隨行せしむることを許す此從卒は特に宣誓解放をなす

又其開城規約附錄に曰く

第一條　本規約を實行する爲め日露兩軍に於て指定すへき委員左の如し

一　本規約第六條に關する委員
　（堡壘砲臺及陸上にある兵器彈藥等に關する委員
　委員
　艦船艇に關する委員
　給養諸物件に關する委員
　危險物除去に關する委員）

二　本規約第八條に關する委員

三　本規約第九條に關する委員

四　本規約第十條に關する委員

第二條　前條の諸委員は一月三日正午白玉山の北麓旅順街道上市街の入口に集合し其擔任事項の遂行に著手するものとす

第三條　旅順口要塞內に在る陸海軍々人は其編制表受領の上日本軍の指定する順序に依り集團して退去し一月五日午前正九時其最先頭を以て鴨湖嘴東端に到著し本規約第八條に關する委員の指示を受くへし將校及官吏は帶劍を許さるへく下士以下は一切の武器を携帶すへからす

但し將校以下一日分の糧食を携帶するを要す

第四條　陸海軍に屬せさる露國官吏は各職分毎に一團となり前條に示せる諸隊に續行すへし

但し該官吏中義勇兵に加はりたることなき者は宣誓を用ひすして解放す

第五條　各堡壘砲臺諸建築物諸倉庫其他の諸物件の引渡を執行する爲め其所在地に將校下士卒若くは其他の適當なる人員若干を殘置すへし該人員には

日本軍より交附したる徽章を佩用せしむ

第六條　露國陸海軍軍人義勇兵及官吏にして一月五日午前九時以後に於て尚ほ兵器を携帶し又は指示せられたる集合場に到ることを肯せざる者は日本軍に於て適宜處分すへし

但し病者傷者は此限にあらず

第七條　本規約第七條に示す陸海軍將校及官吏の携行する私有必要品は必要と認むる場合に於て之を檢査すへく其量目は概ね日本軍將校及所屬官吏の爲めに規定せられたる行李の數量に準するものとす

但し事情に依り相當の斟酌を爲す

第八條　旅順口に在る陸海軍用病院及病院船は日本軍の委員に於て臨檢すへく同委員の定むる所の取扱法に從ふへし

第九條　普通人民は各々其堵に安すへし其旅順口を退去せんと欲する者は總ての私有財産を携行するを得陸海軍將校及官吏の家族にして退去せんと欲する者は日本軍に於て爲し得る限り便宜を與ふへし

第十條　旅順口要塞内の在住者にして日本軍に於て其退去を必要と認めたるものは同軍の指定する時期及通路に由り退去せしむ

第十一條　本規約第十條に示す露國委員は行政並に會計に關する既往及現在の狀況を日本委員に告知し且之に關する一切の圖書及公金を同委員に引渡すへし

第十二條　旅順口に在る日本軍の俘虜は一月三日午後三時に於て本規約第九條に示す日本軍委員に引渡すへし

正本二通を作り各全權に於て署名す

千九百五年一月二日水師營に於て

攻圍軍參謀長陸軍少將　伊地知幸介

海軍中佐　岩村團次郎

レイス

關東州要塞地區參謀長陸軍大佐

開城規約調印終了と同時に、彼我戰鬪は全く休止せり、此間彼は其艦船を自爆し、驅逐艦は膠州灣に遁走する等の、ことありしも、一の小波瀾たるに過ぎず、ステッセル

聖彼得堡に於て

露國皇帝陛下宛　　ステッセル將軍

二日午後九時周家屯軍用通信所發

本日微臣は旅順降服に關し開城規約に署名するの已むを得ざるに至れり將校文官は佩劍を許され現在の戰爭に與からざるの義務を負ひ露國に歸國することを許さる然らされは捕虜として在留せさるを得す微臣は皇帝陛下に此要請せられたる義務に對する御裁可を仰く

旅順周家屯にて

侍從武官將官ステッセル宛

千九百五年一月三日午後五時三十分

南露ミチヤノウイチ發

四日午前十時周家屯通通信所著

朕は各將校に保留せる特權を利用し現在の戰役に參與せさる義務を負ひ露國に歸來するか若くは兵卒と運命を共にせんことを許可す卿及勇敢なる守兵に光輝ある防戰を感謝す

ニコラス

將軍は露帝に宣聖勅裁を請ひ、露帝其防戰の名譽と功勞を謝して、之を許可せり。是より先き、我が天皇は聖旨を山縣參謀總長に下し、ステッセル將軍の苦節を嘉尚し、特に武士たるの名譽を保有せしめらる乃木軍司令官之をステッセル將軍に傳ふ、將軍聖恩に感激し且つ乃木軍司令官に會見を求む、乃木將軍即諾、一月五日水師營側なる宿舍に會す、世界無比の攻圍軍司令官と、世界無比の防禦軍司令官と、名將互ひに手を握り、一見奪識の如く、對話二鐘に亘る、ス將軍、大に我軍の勇武を稱し、乃木將軍の二子を失ふを悼み、日本武士道の精華に感じ、嗟賞措かず、又其愛馬を贈らんことを請ふ、二將の胸臆感懷何んぞ盡きんや。（附錄第十七號）

此くて開城實施手續に依り、城塞兵器一切我委員の手に歸したり、（附錄第十六號）彼の脱出驅逐艦は膠州灣に入りて武裝を解除し、他の艦艇は皆悉く旅順口内に最後の運命を共にす、是に於て此方面に於ける海軍作戰は一段落を爲し、東郷司令長官は封鎖區域の變更を宣言せり。

一月十三日我軍は振旅して旅順入城式を擧ぐ、史家說けとも盡きざるは夫れ包圍軍の功蹟か、其世界を震撼し、威名の顯揚せるもの幾何ぞ、獨乙皇帝の最高勳章を贈りて、其功勳を稱する、決して偶然にあらざるなり。

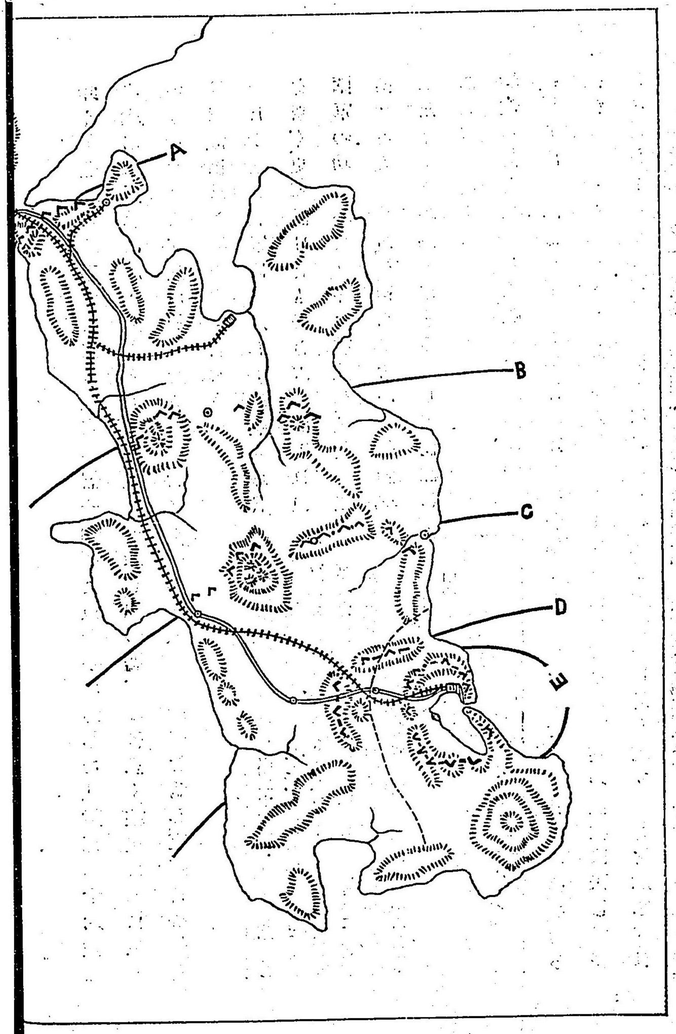
難攻不落と稱せし旅順要塞は此の如くにして已に陷落し、第一太平洋艦隊は此の如くにして殄滅せり。日本の拂ひたる犧牲亦頗る多大なりしと雖も、之れより生ずる結果を見れば其の犧牲は決して多きに過きさるものなり。何となれば此れ戰爭第二の目的を達すへきを意味すれ

本官は帝國政府の命を受け明治三十七年五月二十六日宣言したる遼東半島封鎖區域を變更し明治三十八年一月一日より清國盛京省遼東半島南口角より樓頭に至る一直線以西の沿岸を帝國軍隊の充分なる兵力を以て封鎖し之を維持すること竝に封鎖を破らんとする一切の船舶に對し國際法及帝國と他の中立諸國との條約に於て許容せられたる一切の强制手段を用ふへきことを茲に宣言す

明治三十八年一月一日

帝國軍艦三笠に於て

聯合艦隊司令長官　東郷平八郎



はなり。封鎖艦隊は當さに來るへき敵の大艦隊に當るを得ると同時に、陸上には要塞前面に在りし大部隊は轉して北向し、敵の主力擊破に加はり得へきを以てなり。啻に多大の犧牲は其効果に照し多大にあらざりしのみならず、偉大なる我功なりとは、是れ我同盟國の識者は勿論、歐洲大陸の齊しく稱道せる偉績の反響なり。日本の連續せる强襲と、其堅忍とは露國の抗戰、ステッセルの堅忍と相待て、史上に異彩を放つものなり。ノウオウレミャは、其紙上に苦言して曰く露國は恰も電雷に擊たれたるの感あり、此避くべからざる打擊は過日來豫期せられたる所なりと雖も、露國人にして苦悶を感ぜざるものあらざるべし、然れども要塞の陷落に拘はらず、露國の榮譽及び露軍の名聲は之が爲めに影響を受くるものにあらず、と云ふも要するに露國に與へたる感動の異常なるは勿論なり。旅順の陷落より生する戰局上の結果は當さに次に來るへき一大偉績を孕みつゝあり。(圖は包圍戰かA・B・C・D・Eの線を爲せるを示す他圖共に紀事參照を要す)

第九章　前編の結論

予輩は旅順陷落を以て、こゝに一線を劃し、日露戰役の一半を敘說し了れり。此一線は戰略上自ら一線を劃するものなることは、總論に於て、已に反覆したる所にして陸面に於ては、旅順要塞下に吸引せられつゝありし一大部隊は、今や北面行動を取り得るに至り、海面に於ては封鎖監視の爲めに少なからざる損害を拂ひしも、太平洋艦隊の全滅を以て、其海軍全力は南面して來航艦隊を扼するに足り、浦鹽殘艦隊ありと雖も今は意とするに足るものなし、こゝに戰局分岐し、陸上にも海上にも大開展して、更に陸海兩面に大決戰を見るべき科程に上りたるものなり。

顧みて第一線中に於ける勝敗の迹に就き、其戒むべきものを求め、又戰例として示したるものを擧げ、以て結論と爲さざるべからず、予輩の先づ第一に戒心せざるべからざる所のものは、政略と戰略との交叉時期、其宜しきを得るに在り。日本が果して適當の時機に於て、其劍を握りしやは、予輩の論ずべき所にあらず、劍を握らしめたる露國は、果して適當なる時機に到達したりしものなりや否やを知らんと欲するものなり。露國は二年前より、其勢力を極東に張り、日本をして其事を構ふるに堪ゆ可からざらしめんことを計りしは、アレキシーフ提督が、エコード、バリの通信員に明言せし如くなりしも、實際に於て、戰爭の準備の整ひ居らざりし一面は、茲にクラード中佐の所論を援引するに如かず、曰く『現に平和の抉裂は、其目前に逼り來りたるにも拘らず、戰爭の準備が準ひ居らざりしとは、吾人之を知悉せざりし所なるのみならず、亦之を知悉せんと欲せし所にあらざりしなり。今となりては明白なる事實となりて、何人も之を知ると雖も、若し人ありて當時戰爭は目前に在り、然とも吾人の準備は、未だ整はざるなりと公言せんか、是必らず秘密の暴露者として、嚴重なる所罰を受くるならん。假令此暴露者を罰したればとて、敵たる日本が、已に業に露國の缺ぐる所を知悉し、其好良なる開戰の機會を認め、開戰せしめたる日本人を如何ともする能はざるにあらずや、故に予輩は我露國の缺點を速かに國民に告知せざりしを遺憾とするものにして、若し之を知悉せしめは努めて戰爭を避け、日本人をして其計策を齟齬するを得せしめしならん』と、然れとも、予輩は此クラード中佐を信して露國が軍備に準備する所足らざりしものありとの一事を以て、

不運の原子と爲すを得ざるものなり。

一、九〇四年の一年は、露軍が敗戰の歷史たると同時に、日本勝利の歷史なり。而れとも露國政府機關紙は、戰爭は尙ほ序幕なり、而かも日本は豫備兵力を極盡せんとす、我れに於て、危險如何に少なくとも、クロパトキン將軍の動かざるは、其最後の勝利を制せんが爲めなりと云ひ、露國の上下、此種の牒報に迷殺せられたり。事實は正に之に反せり、露國たるもの、當に大に三省せざるべからず、露國の敵とすべきは所謂極盡せらるべき豫備兵にあらずして、全日本の壯丁之なり、其一例を見よ、義勇兵の就役出願の件數已に七十萬に上れりと、日本は堅く其兵制を守り、斷として義勇志願を採用せず、而れとも若し之を以て戰ふとせしか僅かに義勇兵を以てするも、尙ほ且つ之を爲し得べし、日本の資源已に盡きたりとするが如きは、謬斷も甚しきものなり。

之を露國に問へ、露國果して義勇兵役を出願する者、七十萬の多きを有せるやを、戰時に本國に傳へられたる報道は、如何に盈負眼よりするも、其不成効たるや明かなり、獨乙のケドケ大佐は、露軍の陣營より、戰士戰爭に臨めるの情を報す、モスコーに於ける一般の論趣は、此戰爭の不合理なるを說き、露軍の利益に伴はざるを言ひ、雲涯萬里、一の地角を得んが爲めに起りたるのみと唱へ、其商業社會は戰爭は其己れ等を破滅せしむるものなるを云ひ、其當に來るべき困難恐慌に就き、戰慄せり。

露國が開悟し來る狀況は、尙ほ一の見るべきあり、クロパトキン將軍の陣營に於ける、一切の通信員、及露本國に於ける評論家は、極力其虛妄的慰安の辭を將て、其民心を瞞弄しありしが、一たび遼陽に敗れてより、其自覺の心眼は、敵日本の軍事的能力の上に開注せらるゝに至れり。一例を擧ぐれば、遼陽戰前に於ける日本軍の損害は、十萬に上り、(黑木軍は二萬八千人、野津軍は一萬六千人、奧軍は三萬九千人、尙ほ其他推測に依る諸損害を合算したるものなり)旅順口の損害は、全軍屢壓滅せられたりと信じつゝありしが、焉んぞ圖らん、日本軍は遼陽に三十萬の兵員を集中し得たりと、彼ノーウエードモスチの九月五日の紙上に、明言したる所は、必竟是れ淸國人の訛傳謬說より生じたる誤算なりと、その怪しむに足らざるとを自認したるものなり。又九日ルス紙上に云へるあり、露軍の敗れたるは、敵軍兵力及能力を輕侮したるに依り、日本の勝戰は、單に其數量に依るにあらずして、其訓練精到に出るもの

なり、尚ほ其數量は此れ以上に增大するとなしとは斷言すべからずと、又彼の極力虛構の所報、評論、辯難を傳ふるに於て、全露國無比のノウオウレミヤさへも、其國民が、愚弄せられたるを認め、露國が被むりたる不幸の原因は、全く官僚政治に發するものとし、之を救ふの途、唯一つの自由の發達あるのみと云ふに至れり。

露軍の將士豈に勇武にあらずとせんや、其勇は寧ろ過ぎたるものあり、其堅忍は殆んど無感覺に近きまでに頑强なり、唯其勇に比して智に乏しきを如何せん。試に無形の精神界を兵力考算の資量に加へ、之を以て戰爭の經過を批判するに、予輩は其勝利は、自ら日本に歸しつゝあるとを見る、六ヶ月間に亘り、繰返へされたる戰鬪中、日本の勝利あるのみにして、露軍は一回だも勝利を得る能はず、其軍に於ける單位にして敗戰の經驗、多きは數回、少なきも一回を有せざるはなく、唯僅かに遼陽戰の當時に於て、新たに到着したる第五西比利軍團、及第十七軍團の第三師團とを除き他は皆敗績の歷史を有し、甚しきは、其砲門を失ひたる者なり。凡そ歐洲强國の陸軍兵にして、堅忍不折の軍隊は、露兵を推さざるべからず、故に敗戰の爲めに、其士氣を挫折するとなかるべしと雖も、連敗半歲幾十回に及びたる結果は、略ぼ推定に

難からざるなり。然れとも歐洲が亞細亞に超越するものなりとの觀念は、深く其腦底に侵染し容易に此觀念に變化を生ずるとなきが故に、敗戰半歲に亘るも、尚ほ且つ其超越を信ぜる思想は拔くべからず、此思想は關する所輕からざるものにして、予輩の考算すべき要題たり、此狀況實狀に就ては、一切の通信員未だ之れが通信を爲せるを見ず、唯彼れや勇氣は寧ろ勇に過ぐるの位地に在るも、智慮あるものにあらざるなり。智慮に乏しきも、其勇此の如き露軍の敗戰の因、又は後來尚ほ國として戰場に立たんとするも、深く其要素を探盡し、以て自ら戒めざるべからざるを見たり。換言すれば、他に大損害を受くるものあるときは、顧みて自己も亦同一の運命に遭會せざるの途を講ずるを要す、敗戰の原因を講成せる諸要素が、果して拔く可からざる主因を凝成したるものなるや、即ち戰略上の原則、戰術上の應用、氣格、指揮、戰鬪材料の缺點、又は背反より結合せる原因に依りて、然るものなりや、之を講究して、以て自家も亦戰略戰術武器の上に加はるべき、敗衂の原因を構成せざるとを勉めざるべからず、勿論此の如きの斷定は、尚ほ細かに之れが講究細覈を下すの時期として、尚ほ早かるべきも、假令完全なる細評材料たる詳報を手にせざるも明

確に一條の論斷を下すべき條理を發見すべきなり、露軍何の故に敗れたるやの原因は果して軍人士氣の缺陷に歸すべきや、予輩は明かに其然らざりしことを斷言するを得べし、何となれば露軍は、古來變化せざる狀態に在る者なればなり。予輩は之を露軍の上に不變の狀態を見ると同時に、他方に於けるノウオスチの所謂日本軍の鬼神的威力を其攻擊態度の上に見、從て本問題の焦點は露軍の敗因を搜るに存せずして、日本の攻擊威力を見るに在り。予輩の手に歸したる正確なる材料は、一として現代に於ける攻擊戰鬪に比類なき日本人上下の顯表したる性格が、一、九〇四年に標示せられたるを證明せざるはなし、人口を有する一億三千萬に上れる大陸軍國に對し、戰鬪六閲月に亘り、海上は勿論陸上に於ても、一敗をも受けざるのみならず、歩は一歩より、其敏速暢達を證し、小島國民の負かに露大陸民に超越することを現はし、茲に大決戰の大成果を收むるに至りたるは、日本國民の期待したる所なるべく、千歳不磨の武名を史表の一欄に止め四鄰に響ける其反應は、正に極東全民に普及すべきなり。歐洲識者をして若其長所を把持して、日本將士に踵かしめんか彼等は其爭ふからざる讃歎を愼むと能はざるべし、其精緻獨人果して之に駕じ得るや、其猛峻佛人果して之に凌き得るや、其强韌英人果して之に儔し得べきや、其堅忍米人果して之に匹し得べきや、此の如き强敵と接觸したる露軍が其自已の勇猛あるも、敵の勇猛を示す位置に立ちたるは、不運なりと謂ふべし。予輩をして切言直語せしむれば、露軍は精良ならざるにあらずと雖も、其精良は以て日本と爭鋒の價ある迄に精良ならず、勢ひ已に擊破せられたるものと謂ふべきなり。所謂彼れの精良の要素たる祖國を愛恃するの心、勇猛の氣宇、不變不移の觀念も、一の至大要件たる智慮を加ふる能はざるが故に、近世的戰爭に於て、其所謂精良は何の爲す所なく、露軍の缺點は即ち此に在り、蓋し其之を缺く所以、頗る明白なるを知るべし、露國軍の有する本來の目的として、其明確なる基礎は、彼れの教會と同く、元首權力の護持、及び擴大とに存しつゝ、以て今に至りたる者なるが故に、智慮あるは反て、障害を生じ、寧ろ此の單一の目的の爲めには、これなきを便利と爲すのみならず、必要なき者なればなり。自ら其智慮を以て分別するが如きは、專制國元首の用を爲さざる者なり。元首の掌中に武器を收め、專ら之れを其目的に驅用するに存し、其之を用ゆるの所なきときは、束ねて孕指の裏に葬られつゝある他方には、國民が擧て

迷信の穿裏に墮在しつゝあり、故に戰爭起るに及び、其必須要件たる觀念、才能、智力、を缺きたり。此缺陷は即ち過去數世紀に亘り、縱に繫縛せられたるに依る者にして苟も之を除去せんには、其經來りたる時日を再廢するにあらざる限り、此缺陷を補成すること能はざるべし、彼の虐殺を行へる時間に於ける野蠻性質を表はしたるときの外、唯其冷靜にして本來の面目を有する時を見よ、單一なる迷信の深き體力强大たる稚兒たるのみ。好個の男兒、亦世にあることなかるべきも、必竟は稚兒たるを如何せん、此稚兒をして智慧ある大人たらしめんと欲せば、之に要する好教官なかるべからず。深智練達の將校をして之を優良に進步せしめざるべからず、而かも露軍此一隊の好教官を缺けるを如何せん、勿論多數の武官中深智明良の士なきにあらずと雖も、是等少數の酵素を以て、全量を酵熟せしむるに足らざるなり。是を以て、是等の兵を驅りて之を硝烟彈雨の中に馳驅せしむ、其平原たると、山地たるとを問はず、陣地の如何に拘はらず、日本兵は容易に彼等を擊攘し、露軍の將軍は常に據るに堅壘を以てせざる限り逃退し、其兵亦據るに塹濠、掩蓋、躲牆を以てせざる限り、又遮蔽物をして射界に在らしめず、教示するに射程の方向を以てせざる限りは、逃退の外其用を爲さざるなり。彼等の强大なるは、其堅壘に據るの時に在り、凡そ世に築壘なるものは、之に據るものをして、必敗の地位に立たしむるものなり、戰鬪は本來主動的ならざるべからず、主動の目的として、塹濠、躲牆は反て有害たるものなり、之に賴るものにして、一たび之を失ふときは、喪心狼狽するの外なきに至るべし、彼ドラゴミロフ將軍の意圖より成れる、現行戰鬪勤務令は、各條を通じて、冗文に過ぎ迄に、攻勢を主張し、反覆せられたり。其之を露京に發布せらるゝや、陸相たりしクロパトキン將軍の、之を認めたりしは勿論にして、今之を實用するに方り、其結果は反對の現象を生じ、其是を驅て塹濠の內に伏在せしめ、敵の攻勢を取るに任せたる者なり。智慮經驗に富める將軍と雖も、齊しく露國臣民として人間なり、勤皇忠忱の人間として、何事をも其命を奉ずるに躊躇せざるものなり、又沈鬱なる其天稟は戰爭に於て未だ全く成功せざるものにして、或は成功する能はざるものなるが如し、唯將軍は部下の尊敬を受け、世界の酌情を享收すべきものにして、若し彼の欲するがまゝに、戰はしめば、彼の勤務令の訓示する所に從ひ、行動の見るべきありしならん。されども彼の部下の智慮を缺き、將軍が其戰鬪訓言を實行せんとせ

ば、之を山地に用ゆべからずして、平野に於てせざるべからざるとを發見したるの一事を顧みざるべからず、是れ單に將軍に限らず、他の將軍も同一の發見を爲さゞるべからず。是れ明白なる結果なれども、其原因は深く根蔕を有し、其存在は隱微の裏なるが故に之を改善せんと、一日の業にあらず。其首尾齊しく改善を要するもの、露國の臣民と之れが治具たる制度より、過ぎたるはなし、然らざれば其臣民の進歩に對し教育者も施すの途なかるべし。

排六閱月に亘れる戰鬪に於て、露軍の蒙りたる敗戰の不幸を、他の一面より見れば、獨逸の助言を採りたるに依れりと爲すべし。伯林の思想界に於ける論議にして、爲めにする所あるものを採用するは、其自家を虛くし、專ら耳を他に托したるものにして、同時に自家の本領を喪失す、自家の本領を喪失すると同時に、其計畫は常に支吾す、露人は何が故に、獨逸人が有するよりも更に精密なる極東觀を以て、其作戰計畫の基礎とし、其自家の精神と論趣を探るを主とし、外獨逸の助言を排斥せざりしや、若し之を排斥することを勉めしならば、其結果今日の如き不幸を見ざりしならん、試に開戰當時に於ける獨逸新聞を覆閲して、其觀測の如何に虛鬪疎謬なりしかを一考せよ、何人と雖も、獨人が故意か、又は政略かの二途の中に於て立案せられたるものなることを識別し得べし、而かるに露國は此疎鬪なる觀察を基礎とし、誠實なる英國新聞の所報警告を無視排斥し、自ら固く其謬策を執持せり。戰ひ一たび破るゝや、伯林に於ける最高軍事家は、滿洲に於ける兵力を計上して之を公表したりと雖も、予輩は當時軍事通信の觀測は、其當を得ざることを辯難せり、蓋し其觀測に從へば、六閱月の後なる日に於ては、少なくとも四十萬の兵力は、クロパトキン將軍の手中にあらざるべからず、初回の敗戰に際し、此獨逸軍事指導家の觀測を基礎とし、たる計畫にして、此失敗を見るは了解すべからざる所なりとて、露國新聞紙は疑訝に堪へざるが如くなりし、是れ實に可憐なる疑問なりと謂ふべく、机上の空論たるに過ぎざる評論家が、其實戰に經驗なき口に依りて縱横に論議せられたる者を基礎とせる危險を了知せざりしなり。露國は其聲名の上に刀痕を印じ、其原因たる獨逸軍事家の助言は如何なる治療法を以て、此瘢痕を治せんとするか、彼等は日本必ず敗るべし、大山大將必ず破らるべしと、殆ど天啓的に豫言し、其豫言は正反對の結果を示し、彼等は如何にして此不確定なる豫言を償はんとするや、彼の獨逸政府

の意圖と同一主意を有するナチョナルジアオヴガは云へり、此強大なる帝國が、小島帝國の爲めに破了せらるべきにあらず、來年度に於ける大軍の集中は、自ら戰爭の面目を異にすべしと云ひ、尙ほ其行進方面を、クロパトキン將軍に明示して、曰く浦鹽方面より韓半島に進軍すべしと。勿論此部面の行進は無人境の通過に異ならざるべきも、殆んど道路なく給養の途なく、且つや其目標として對すべき敵兵なき地點に向て行進攻擊を加へんとするものなり。此不信實なる誘導より來れる戰略を以て露軍を韓半島に進ましむるは當さに其軍隊をして、釜山の岸頭より、海中に投死せしむる者なり。而して、レンネンカムプ將軍の參謀部に在りたる露國エレッコ大尉は親しく、韓國東北部の狀況に經驗あり、其ソーウヲ、ウレミヤ紙上に寄せたる論文明に其經驗の如何なるものなるかを實證せり、此方面に進軍するは、猶無意味の旅行に齊しきのみ、海は其一方側面に在り、進めば兩側面となるのみならず、日本軍の後方に存するあり、これ實に危險にして、且つ不誠實なる勸誘にあらずや。加之二月開戰の初頭、彼等の忌憚なく言明する處を見るに、彼獨逸識者の胸底に不安なりとし二方面よりする戰略を移動するを得たりと爲すに一致す、猶ほ英

佛確執の關係及支吾は、極めて些細の點に存在し、兩者をして相讓るあらしめば、融和結合すべきは必然なるを洞知し、此事實に通曉したるは、彼れナチョナル、ツアイツングに過ぎたるはなし、佛國にして歐洲の中原に其捷利を必ずへき戰爭を行はんとせば、海上の自由を得ざるべからず、之を得ずして其有利の位地に立ち得べからざればなり、其之を得んとせば勢ひ英國と結ばざるべからず、佛英協定の成立は、即ち佛國が此海上の自由を享受する最大有利なるものにして、其軍事上の利便たる勿論なり、彼帝國軍隊が、大敗のとき普に對し、能く長期の角逐を爲し得たるもの、必竟當時海上を制し得たるが爲めなりしと、何人も之を知らざるはなかるべく、殊に彼が、戰後調査の結果として、其書類の上に立證せられたるものなり。加ふるに、伊太利と英國と親善なるあり、彼れの所謂國防上、其動員計畫に於て、其二十萬は海岸防禦の爲めに要せられたるも、今は之を他に轉用すべく、殖民地に於ける十萬の已に用ゆべきあり。アルプスに於ける、其精鋭廿五萬、已に之を其國境に固定するの必要なきなり、之に由て之を觀れば、佛國は其政策宜しきを得て、何れの地點に於ても其擇むに任せ、五十萬の兵力を自在に運用すべき地位に立ち得たるものにし

て、十年以來佛國の軍事上の利益は、之より大なるはなかるべし、已に然るが故に、極東に於ける露國の計畫は、獨逸參謀本部の祝杯を擧ぐるに値へする者にして、露國は其あらゆる精神體力を極東に傾け、以て其聲名を毀損し、其資力を減耗し、其結果は獨逸をして、再び覇權把握の利益を得せしむるに至るべければなり。故に獨逸は表面中立を宣言し、之に依りて爲し得る限り、許し得る限り、巧みに彼を助け、其計畫を煽蕩し、其海軍をして屑片に化せしむるに至らば、自ら其海軍の雄を稱するに至るべきなり。獨逸は其首都より、海外の評論機關を左右し、抂けて英國の所論を非理とし、以て露國民の感情を不快の淵に投ぜんと勉め、謂へらく、此戰爭に依りて、露國の斃屍たらんとするは、英國の期待する所なりと、恰も英國人が、露國人に怨恨を抱き敵意を挾める者なるかの如く、世をして誤らしむること少なしとせず。焉んぞ圖らん、露國の軍事的勢力を失墜するは、英國の利益にあらずして、一強國の失墜は、他の覇權を伺ふの利益に歸し、延て其平衡を失し、其結果は之に向て、敵對せざるを得ざるを以てなり。要するに、獨逸の軍事的誘惑は、露軍をして、迷はしめ、支吾せしめ、延ひて不利の因子となれり。フォン、ブアイル伯は、ローカル、アンツアイゲ

ルに公言して曰く、日本軍は必ず遼陽に敗るべしと、予輩は之を聞くと同時に、此豫斷に於ては深く疑ふるに足らざるを告白せり、反對の結果を見たる伯は知らず如何なる辯解を有するや、伯の此豫斷を下せる所以は、極めて單簡なり。クロパトキン將軍は以爲らく、リネウキッチ將軍必ず來援すべしと、然るに將軍の來り合せざる爲め、クロパトキン將軍は敗れたりとせんか、エチ、アウスエルスタッドの失も之れを以て辯明すべきや、元來リネウキッチの司令權は、沿海州に在り、太平洋に於ける據守點として其の責任を負へる浦鹽の外、其守備地點少ならず、是等は皆其區域交通路等權限區畫を嚴定せられあるか故に、自ら別個のものたり。彼は其手中に、東部西比利亞第八師團、要塞兵哥索の若干、及其位置明ならざる、西比利聯隊の少部、オレンブルクコサック師團等を有するに過ぎず。彼れの據守せる地點に對し、日本軍其攻擊を欲せば、即ち攻擊し得べきものにして、今此地點を空虛にし數百哩を馳せんとするは、御風の術を以するも尚ほ且つ容易ならず、之に對し遼陽戰敗原因の一切を課せんとするは、誰れか其誣罔なるを解せざらんや。彼れ獨逸軍人が、エクレール記者に公言して、世の日本軍を見る、重きに過ぎたりと言ひしも、遼陽戰敗

に於て、如何なる言を以て之を辯せんとするや。之に依り彼等の得たる經驗は、其參謀總本部に有利なる實驗を附與したる者なり、尚彼等の中に於て、最も事實に接近せりと稱せらるゝケドケ大佐の如きすら、觀測一も適中せるとなく、軍事上の豫言として、一も價値なしと雖も、唯彼か其文辭の巧緻なる、露國檢閲官をして、知らず識らず、其嚴密なる瞳子を通じて、流露を許可せしむるの一事は、推尚するの價値なきにあらず、例へば、彼の大嶺回復の報告の如きこれなり、彼は此報告を發せる眞目的は、反て他面の意味を有するものたり。彼れはクロパトキン將軍が、四十個大隊の大部隊を以て大石橋より行進し、猛烈なる攻襲を以て大嶺を奪回せりと報告し其報告に對し世人は、之に割引を加ふべきを知り、而して其眞目的たる、クロパトキン將軍及其大部隊の所在を知らしめ、其大石橋に位置せるを示すに在りしなり。露軍の陣地は其初め偵察に依れる、高價に反し、占頭の後ちに低落すと云ふが如き、冷嘲を加へ、而かも露國檢閲官の理解すべらざる反面的報告を試みたるものなり。要するに露國參謀本部が不幸にも、重きを獨逸の所說に置き、其作戰に充用したる過誤は、其結果の未だ顯現せざるの前に於て、餘蘊なく英米人に依りて評論せられ

り。此の評論は、露國に對する最良の警告にして、其位置の回復、損害の輕減は此警告を採用するの度に依て顯現せらるべきものたりしなり。遼陽戰に就ても、其豫備兵をして强敵に對せしむるの不可なる所以を詳論したるも、露軍は民兵分子より來れる第五軍團のオルロッフ兵團を使用し、其潰敗するに至るまて其過謬たりを自覺する能はざりしなり、此兵團の潰敗を責むるは、當を得たるものにあらず、責むべきものは、之を用ゐたるものゝ罪なり。更に切言すれば、軍の中樞行動の罪なり。遼陽南方正面に加へらるべき攻擊に關し、予輩は已に之を豫言し、事實亦之を立證して圭たず、尚ほ露軍後方に於ける行動を論じ、日本軍の軍事的能力の程度を論じ、露國が有する最親友國と雖も、之に加ふべからざる戒告を與へたり。此露國に與へたる戒告の爲めに、日本の利益を害せざりし一方に、露國は其國民をして、是等の事實の眞相を告知する事を欲せず束ねて之を穽火に投ぜんとし、一切是等の記事を、タイムス紙上より抹削したるや明なり。亦露國人の能力に缺陷あるは、單に軍事上に止まらざるや明なり、此上予輩が露國に加ふべき警告は唯一層の凶運を其頭上戴かんと欲せざる限り、再び獨逸の誘惑に陷らざるに在りとするに在り。

此の如くにして陸は滿洲に敗れ、海は旅順に敗し、太平洋艦隊全滅せり、此災禍の因て來る所を戒むると同時に、其垂るゝ所の教訓は蓋し少なからざるなり。（タイムス批評の要旨を概括す）

已に此の如くにして露國太平洋艦隊は殄滅せり、此の殄滅の最後に予輩に重要なる兵學上の教訓を示すものなり。日本の之を獲んとして拂ひたる損害の大なるものあるも、之を獲たる成功は、陸海共働々作の證明を予輩に附與したるものなり。開戰の當時、極東總督は公言して云へり、防禦命令は要塞に下らんとす、露國の重鎮として近くべからざるものなりと、總督の獨り此言を爲すのみならず、實は是れ露國全般の信仰なり。巨億の費は積んで堅塞を現出し、艦隊は安全に之に寄泊し得べく、到底敵の接近すべからざるものと信せり。而れとも已に人間之を製りて、人間之を破壞し能はざるの理あらんや、史上未だ堅塞の近くべからざるものあるを聞かず、旅順口の固持を以て露國の利益とするは、謬見たるべきとは、予輩已に論じたる所なり。元來戰略上の原則は、不變性のものなりと雖も、之れが應用術は變化性のものなるが故に、戰爭進行中に於ても常に變化しつゝあるものなり。其之を立證すべき事實あるも、尚ほ且つ之を認むる能はざるものはあらざるべし、予輩は勉めて其變化を認むるに後れざらんを要し、尚も其變化の善なるものを認めたる場合之を採用するの敏達なる、決して人後に落つべからず。旅順口包圍の前後に於ける予輩の所見は明に事實の之を立證するを見たり。當初日本第一軍の兵力は、土地の狀況其強大を許さず、加ふるに殆んど數旬の間、孤立暴露の狀態に在りしが故に、若しクロパトキン將軍にして之を逆擊せんと欲せば、其時機の充分なるものありしなり、而るに日本軍は漸次其歩を進めて遼陽に其大軍を集中し、終に露軍を擊攘したるは、其附與したる時間ありたればなり。之に反して、クロパトキン將軍は、一方は旅順に於て、大兵の手を束ね、他方は浦塩に於て、其精兵の足を耕し、爲めに進攻の敵を逆擊せんには、其力足らざるの勢を生じたり。海を越へて大軍を進るは容易の業にあらず、其大難事たる所以は、其集中輸送共に、全般の要具設備を齊整ならしむるに在りて、凡そ軍事上の難事之に加ふるものなきが故なり。之に反し、防禦軍の有する利便は、敵の兵力未だ其集中を遂げざるに先だち、自己が有する大部を擧げて、之を掃蕩するを得べき位置に在るが故なり。徒らに旅順口に其手

を束ねたる是等の貔貅を將て、之を鴨綠江の前面に放ち、其他散在せる野戰軍を經めて、第一軍を驅攘せんが、其結果や日本の全計畫を破壞せしや未だ測るべからず。而るにクロパトキン將軍は、漫然其兵力を散布し、之を集中するを勉めず、浦鹽に於けるリネウキッチ將軍、旅順に於けるステッセル將軍は、其部下各三万と共に、强敵を待ち、野戰軍の爲めには局外者たるの外なかりしは何ぞや。是等二要塞は果して本攻擊線に當りたるものなるや、日本軍の主たる目標は野戰軍に在り、攻圍の爲めに要せらるゝ注意の度如何は、要塞の有する問題たり。而れとも已に聯絡なき孤立に陷りたる以上、唯野戰の大捷を見ざる限り、其運命は拯ふべからず。而も野戰軍も亦、包圍内に於ける兵力減耗の故を以て勝利に遠ざかりたり。尙ほ旅順要塞は其艦隊を保護すること能はず、其虛榮を充たす能はず、始めより旅順口は、之を拋棄するを以て、其當に受くべき禍害を、比較的少量なるを得べかりしなり。雷に其艦隊を保護すると能はざりしのみならず、之をして亡滅せしめたる者なり。彼の巍然として土に雲を摩し、下に海を壓する黃金山砲臺は、艦隊の依賴心を增大し、而かも其拖護の下に敵の水雷を受けたり。外交關係の斷絶を知りながら、敵襲に備ふる所なく、之を受くること二回にして、尙ほ且つ旅順口の磁力は艦隊を吸收し終に其亡滅を見るに至らしめたり。バゼーヌ、メッツに於ける以外に斯の如く明白なるものはこれあらざるなり。元來艦隊の目的とすべきは、出て、敵艦隊を擊破するに在り、露國艦隊の勢力を以てして、其目的を遂行せざりしものは、能はざるにあらざりしものなり。語を換ふれは、足らざるものは其力にあらずして、其意思なり、加ふるに要塞拖護の磁力は、其依賴心を吸收し、意思は益薄弱となり、薄弱なる意思は指揮の不決斷を生じ、不決斷の指揮は此の最後を生じたるものなり。此大艦隊は敵に何等の損害を與ふることなくして滅亡したり。此最後を馴致せざるべき方法唯一ありしのみ、即ち旅順を放棄し、其三万の精銳を野戰軍に合し、艦隊は出航して敵艦隊に損害を與へ、バルチック艦隊の爲めに、通路の障害を減却し得たりしならん。由て以て、或は最後の勝利を期し得られざるにもあらざりしなり。三月頃に於ける、露國海軍の方針は、其戰略家の精神に異狀あものなりとの評を下し、クロンスタッド、ウエスニックの記事に於ても、其艦隊の受動的行動を以て、至切至要なりとせるは、必竟河川時代の習套なりと云ひ、即ち其の論據の誤認は明かに實に

於て破了せられたり。要塞如何に堅固なるも、其要塞たる以上に、一の利益を與ふるものにあらず、其有する所の手段と、目的とは、自ら異らざるべからず、露國の戰略家は、唯其要塞の前面に、其守備兵に倍蓰するの敵兵力を牽引し、一方野戰軍の成功に必要なる時日を附與すべしと想定したるは、見るべきの理由なきにあらずと雖も、包圍已に成りたる以上、敵日本軍は一方野戰に於て、必要の場合に、其攻圍軍の一部を其用途に轉するも、自在なるべきか故に、此の時間問題の論據は、頗る薄弱にして、到底失敗を免かるべからざるものなりと謂はざるべからず、海上よりする、日本の輸送交通は、露國が鐵軌に依れるよりも、優越にして、一たび機先を制したる後、常に先制に立つを得べく、其軍資を耗盡し、兵丁を空乏したる後にあらざれは、露國は其優勢を現すると能はずと、是れマハン大佐の四月頃に於ける所論なり。要するに、此間の問題は、露國戰略家の所信として頗る危險なるものなり。而れとも、日本軍の爲めに論ぜざるべからざる所のものなきにあらず、包圍軍にして若しも遼陽戰に加はらんか、其勝利は更に偉大なるべしとは理由を有せる斷案ならざるにあらずと雖も、其偉大ならざりしは他の理由に依れり、即ち露軍輸送力の增加の不明

なりしと、正面に於ける損害、右翼に於ける缺損等に依りて、セダンを再現せざりしみ、且つや、一方に於ける要塞の攻擊に於て、千八百九十四年の戰例を踏襲するは不可なり、其驍勇は無比なりと雖も、予輩は之を以て統帥が用ゆべき戰術の模範なりとする能はず、宜しく重さを砲火の威力に措かざるべからざるなり。此種の警戒は、日本の重視する所とならず、巨砲の增加は極めて時日を後れ、專ら歩兵の勇敢に賴りて、其堅城を突破せんと試みられたり、是鬼神にあらざる以上、遂ぐべからざる所なり、此等の錯誤よりも、更に甚しき露軍戰略の根本的謬斷は差引きて尙ほ餘りある愚策に立ちたり、所謂旅順の救援是れなり。此計畫は露軍野戰部隊を失ふて、と、數萬の大數に上らしめ、以て日本軍が旅順の强襲に失ひたる所を償ひ、尙ほ多大の餘りあるべく、而も露軍の計畫は一切失敗に歸し、其全艦隊も終に、其の殄破する所となりたり。攻圍進行中に在て、其陸上に於ける兵力より、之を論すれは、一方に於ける、集中其度を加ふる毎に要塞の畫度は減却しつゝありたり。假令防守を全うするも、降伏するも、要は其價値は漸次其の度を失ひたるの結果として重要ならず試みに族順口を把持するとが、果して如何なる利益を露軍に與へたりと爲すか

其與へたる所は不利益なるのみ、是れ實にレヂー、スミッスの南阿に於ける英軍に對せしものみならんや。其爲すへからざるとを爲さんとし、戰略家の精神は錯亂し、徒らに自ら好んで其損害を招致したり。鴨綠江に於ける日本軍を擊破する能はざりし以來、露軍の取るべき方法唯一ありしのみ、內地に退却して其力を蓄へ、逆擊の機に達するに在りたり。然るに、露軍は唯一に旅順を救援せんとして、多大の損害を生じ、蛾の燈火に於けるか如く、派遣隊は皆其火中に陷りたるの外なし。假令ステッセル將軍其部下皆能く、勇敢誠忠なるに依り、幾分が償ひ得べしとするも、要するに一、九〇四年に於ける戰役は、露軍戰略原則の反則を以て成せる犯罪の歷史たり。戰略戰術上必然の證提を爲さゞる限り、其徒らに兵力を分散せしめたる愚策は、到底之を辯解するの途あるとなし。要塞の門戶には須らくダンテの地獄門題を特書せしむるを要す。

今夫れ太平洋艦隊の全滅を其全隊の上より見るも、亦之を個々艦隊、艦種武器の上よりするも、其示す所は、實に重大なるものなり。予輩は少しく其教訓に就て觀察する所なかるべからず、第一は戰艦効力に於ける諸種の疑問の統一を見たるとは是れなり。開戰後二ヶ月の時期に於て、戰艦の能力の未だ著しく發展せざりしに當りては、戰艦の効力に就て、論議する者少なからず、デーリー、グラフキックは其紙上に論じて曰く、日露海戰に於て、日本の戰艦未だ其直接的効力の著しきものあるを見ず、海戰の舞臺は殆んど水雷艇及敷設水雷に依りて、獨占せられつゝあるの觀あり、然れとも、若し日本にして、强大なる戰鬪艦隊の後方に存在するにあらずんば、焉んぞ最終の勝利を必すべけんや。波羅的艦隊極東に航進せば何を以て之に應ぜんとするか、一八九五年四月發刊北米評論紙上に掲載せられたる有名なる、コロム中將の論文が主として魚形水雷の海戰に於ける効用を論述したる論旨には、戰鬪艦は恃むべからざることを說けりと雖も、若し中將をして、日露交戰に就て、研究する所あらしめたる後に於て、論文を草せしめたらんには、必ずや其旨趣を異にせざるべからざるべし。此論文の始めて發表せられ、予輩の之を覆誦したる當時に於ては、我海軍の爲めに憂慮措く能はざらしめたり。我海軍は恰も戰艦七隻の建造中に屬せり、此時に方りて、第一流の海軍戰術家の唇頭より全盛は已に衰耗の前提なり、戰鬪艦は今や已に其季期に在りと聞き、又一八九七年海陸軍報告に於て、中將

が軍艦建造費上、戰艦の一隻は、驅逐艦二十五隻に方り、二十五隻の驅逐艦を以てせば、一隻の戰艦當さに粉破せらるべしと說き頻りに戰艦建造の不利を唱ふるを聞き憂へざらんと欲して得ざりしものなり。中將が其建造費の上より比較論を立てんとしたるは、已に其根本義に於て誤れり。何となれば、第一に於て軍艦費なるものは、其基礎を建造費に取り、之に年々價格減却の割合乘組員及需用品の經費及之が維持費を合算したる年均額に據るにあらずんば、比較の確實を得べからざればなり。又驅逐艦二十五隻を建造するには、戰艦一隻の建造費を以て爲し得べしと雖も、之をして悉く就役せしむること能はざればなり。又二十五隻を以て戰時就役艦幾隻を保持し得べきやの斷定は、實際上の斷定に由らずんば下し能はざる所なれとも、多くも十二隻に出でざればなり。故に戰艦一隻は驅逐艦二十五隻に敵する能はざる者なりとの中將の論定は、有力なる能はざるなり。又中將は、驅逐艦が其破壞力を逞ふする行動も、多くは戰闘艦の掩護に依ることの多きを說かざるが爲め、エッチ、ジエー、メー少將は說を爲して曰く驅逐艦は或場合に於て戰艦を助くることを得、戰艦は多くの場合に於て驅逐艦を助くることを得と、中將は曰く、敵の戰艦と出會を目的とせざる場合に於て、戰艦をして出動せしむるの必要果して何れに在りやと、請ふ之を日露戰爭に徵せよ、正に其明快直截なる答解を其實際に認むることを得ん。見る可し、巡洋艦水雷艇等の移動性根據地として日本戰闘艦は出動し、露國戰闘艦は此戰艦を恐れて遠く出つる能はず、即ち其遠く出てざりしは、戰闘艦を恐れたるものにして、水雷艇を恐れたるにあらざるなり。之に反し若し露國の水雷艇は、露國の戰闘艦が日本戰闘艦と同じく、洋上に移動性根據地と爲る能はざるより、單に旅順を根據地とせざるを得ざるが故に、戰闘艦の掩護を有せざるを以て、其唯一の掩護は夜暗なり、其機會を捕捉する日本水雷艇の如くなる能はざるは自然なりと云ふべし。若し其位置を顚倒し、露國艦隊をして、日本艦隊に比し、優勢なる戰闘艦を有せしめば、海權爭奪の爲め出動せざるの理あらんや。若し假令、驅逐艦に於て優勢ならしむるするも、之を戰闘艦の場合と同一に利用するを得べけんや、活動せる艦隊に缺くべからざるものは、即ち戰闘艦なること明白なりと謂ふべし。マカロフ提督は、波羅的より來援すべき戰艦八隻新艦五隻舊艦三隻が極東洋上に其勝利を把持せん爲めに來り戰ふ前に、勉めて日本の戰闘艦隊

の勞力を減殺せんことを欲したるに徴するも、亦戰艦を以て海軍力の中樞と爲すべき〻明なりとす。裝甲巡洋艦亦有力ならざるにあらずと雖も、戰艦の耳目と爲るを以て其任務どし同種の軍艦と戰ふか、又は劣勢なる戰艦として用ふるに過ぎず。何となれば其砲煩防護共に劣弱にして、戰鬪艦と相鬪ひ、其勝を制することは難きものなれはなり。又警眼なる米國のエヴアン少將は曰く、世上戰艦の効力に關し、種々の所説を弄するものありと雖も、是れ取るに足らざる愚論なり、之に答ふるには多くの語を要せず、予は是等の論者に反問して云はん若し旅順口外に日本戰鬪艦隊在らざるときは、露國艦隊は果して長く港内に蟄龍を學ふべきや、何者か海上に其効力を戰艦と爭ふものあらんや、唯今後日本が、海上の主人公たるとを疑はずと雖も、旅順艦隊の世評の如く多大の損傷を受けたるものとは信ぜざるなりと道破せり。海上を壓するものは、其艦隊の主腦として、強大なる戰艦を有せざるべからざるは明なり。

巡洋艦に關しては英國フリートマントル海軍大將は、書を倫敦デーリー、クロニクルに寄せ、露國海軍が巡洋艦の運用を知らず、猶ほ米西戰爭に於ける、西班牙海軍と同一轍たることを痛論したる要旨に依れば、『予は世上艦隊として巡洋艦隊が、獨立行動を爲すべからざるとを言ふも英國海軍が其演習に於て、之を反證せしや否やを知らざるに關せず、予は此の論定の謬見たることを信ずるものなり。何となれば、當時西班牙の有する數隻の巡洋艦は、快速力を有し、艦隊として之を運用せしと雖とも、終に米國戰鬪艦隊の爲めに威壓せられ、サンチャゴに其最後を見ざるべからざるに至れり。若し西班牙にして、其巡洋艦をして、個々に其能力を發揮し、運送船を碍礙せんか、其損害決して尠少にあらざりしなり』と。提督の所見は、啻に所戰鬪艦の爲めに偵察の任務に服せざるとき、は巡洋艦は當さに獨立して行動すべしとするにあり。一八一二年乃至一八一四年英米戰爭の際に於ける、巡洋艦及私艦の効に徴すれば、自ら明なり、露國巡洋艦にして、獨立行動を取りて、商業破壞を事とせんか、日本が其航通を停止するまでの効果を見ざるも、其障害たるを得たりしや勿論なりとす。

驅逐艦用法としての戰訓としては、デーリー、テレグラフ紙上に、C B 氏、の所論に曰く、日本海軍が其秀拔なる技能殊に旅順口攻擊に付て、戰訓として世に亟るゝ所少

なからずと雖も予輩は其驅逐艦の用法に於ける戰訓に付き、十分なる注意を下さゞるべからず予輩は常に驅逐艦に對する四個の必要條件を記せり。數々其炭庫を補充せざるべからざると其一なり、乘員は之を毎に交替せしめざるべからざると其二なり、母艦を附して其淡水食料を給せざるべからず其三なり、壺間は可及丈他の艦船をして之を曳かしめ、以て將校を休發せしめざるべからず、其四なり。而かるに、一たび我驅逐艦が三千五百五十海里の航海(ポートサイドより古倫母に至る)に於て、尚ほ剩炭若干を有せしに徴し、又僅かに兩三日を經て、再び航進を強行せるを知るに及び、予輩の曾て驅逐艦に見る所の過小なりしを發見せり。今や日本海軍の予輩に教示する所は、一層驅逐艦の効用を以て依賴すべき性質のものなりしを示すに在り。若し夫れ、地中海に於ける敵國の水雷艇配置港の一を封鎖するに當り、八隻より成れる驅逐艦隊を要するものとし、尚之に其豫備隊を要すとせんには、四十八隻を要せざるべからず、驅逐艦の効力、其多數を要する此の如くならざれば、水雷艇配置の港灣を封鎖すると能はざるまでに効力薄弱なるものなるべきや、予輩の知らんと欲する所は、即ち少なくとも、其眞價を知るに在るなり。言ふまでもなく、海上を制し其主管權を自家に收め、其勝敗の決定を與ふるものは戰鬪艦なり、此最終問題に對しては、巡洋艦及驅逐艦は必竟之が補助たるに外ならず、英國海軍に於て、此戰鬪艦に對するよりも、其補助艦に對する經費の莫大なることは何ぞや、若し、ボロヂノ級の五隻を加へ、十二隻の戰鬪艦を旅順に有せしめば、何ぞ蟄龍の愚を學び、空しく驅逐艦の香餌たらんや、戰爭前年來、東郷提督は其所信を部下に注入し、艦隊を精練しありたるに反し、マカロフ提督は空しく、机上の訓練たるに終り、何等の奏功を見ざりしなり。是れ實に驅逐艦の用法宜しきを得んと欲せば、東郷提督が其蘊蓄を部下に發ひ、以て其奏功を全ふしたるに學ばざるべからざるなりと云ひ、又アーミー、エンド、ネビー、ジャーナル紙上、米國水雷驅逐艦の効力と、旅順水雷攻擊との戰術的關係の論旨に曰く、米國海軍第一驅逐艦隊は、西印度サンジュアンを發し、二千八百海里を航續したる間、一回の停止するとなく、カナリー島に到着し、其狀態毫も修繕の必要なく、諸艇は航進中、最も安全に其母艦より採炭を行ひたりとの報告、チャンドラー司令官より、海軍省へ達したり。此の報告に依りて、水雷艇の効力の正確なるを立證したりし際、恰も日本艦隊旅順を襲擊し、其數艦を傷

けたるの報を得爲めに大に水雷艇論者の增加を來たしたり。チーラー海軍々務局長其專門的見解を人に語て云ふ、予は未だ旅順攻擊の詳報に接せずと雖も、此報告にして差誤なからしめんか、予盟が水雷艇を贊用する過大にあらざるを證するものと謂ふべし、日本の驅逐艦は夜暗を利用し、比較的危險少なき場合を撰み敵艦に近き、水雷を發射したるものなるべし。蓋し水雷發射距離は千五百米突より之を爲し得べきのみならず、探照燈に發見せらるゝことなく、四百米突に接近するを得るものなり、故に日本の成功に鑑み、我亞細亞海軍區に驅逐艦を派遣すべき理由は、之に由て明白なるものとなれりと、主張せり。又水雷砲、裝甲、其他に關する戰訓としては、ゼネベール、エンド、ミリタリー、レコードの所論に曰く、開戰の初頭、日本水雷艇が露國艦隊の不備に乘じ夜襲を行ふや、當時の軍事評論家は、筆を揃へて、水雷艇は終に戰艦に死刑の宣告を與へたりと唱へたるに關せず、後に至り、其加へられたる損傷の程度が、其唱へたる宣告の如き効力を有せざること明白となり、戰鬪艦の運命も亦斯くまで脆弱ならざることを知りたり。戰艦死刑の唱道は英國より、佛國に多く行はれたるが故に、若し此の宣告にして現實ならんには、佛國海軍の

得意想ふべきなり。然れとも、水雷艇の効用に就き、戰訓として學ばざるべからざるものあり、日露海戰に於ては、水雷艇の効驗は著しきものなりと謂ふを得べし、唯其水雷艇の能力として、行ひたる所多しと雖も、其行ふべしとして行はれざりし所少なからず。爲めに魚形水雷の効用に重きを置かざる論者は、其効用の程度の過小なるに失胆せんとしたるものあるべし。何んとなれば、一般世上、水雷にして、一たび軍艦に觸れば、必ず轟沈し得るものと信じつゝある場合に當り、旅順艦隊の諸艦は、水雷の訪問を受けざるものなく、而かも轟沈せられたるもの少なければなり。是れ反面より戰艦の効用、防禦力の至大なるを立證するものにして、「コッバアーダム」二重底、及防水區畫等は、艦底防禦の絶對的なる能はざるは勿論なれとも、其防禦程度の有力なるは明白なり。此防禦力を破壞する魚形水雷は、其裝塡爆藥の量、通常二百听なりと雖も、此量を以てしては、曾て水雷論者が期待するが如き、良果を收むる能はざるを以て、一方に於て、强力なる沈置水雷、又は浮泛水雷の如く、爆藥量を增加せんとすべし。二十四吋保式水雷は、日本海軍の試驗の結果、艦內使用に對しては、重量過大に過ぎたりと斷定せられたるが如し、水雷の形體を加大せざれば裝

藥を增量する能はず、其距離速力の大ならんを要求する場合に方り形量を增大すべからざるのみならず、其現形の內部を融通して、裝藥を增量せんとするは、爲し能はざる所なり。水雷論者の期待する所に滿たざりし結果は、啻にこゝに止まらず、日露海戰に就て、多數水雷の犧牲となりしものを繹ぬれば、皆是れ錨地に碇泊せる不移動性にして、行動しつゝある軍艦、即ち移動せる標的に對しては、其効果を求むること、或る特有の場合を除き、殆んど皆無なるが如き觀あり。不移動體を攻擊するの効果は、已に久しく論定を經たる所にして、唯彼のジャイロスコープを備ふる新式水雷が、如何なる効力を、移動せる標的に對し、顯現すべきやの問題のみを餘せるに在り、而かも其直接効果は、何等見る所なかりしが如し。蓋し其間接の効果は、水雷論者の眼底に映到しあらざるべからず。本海戰に於ては、艦隊戰鬪を見ざると多くそのこれある場合には、戰鬪は極めて遠距離を以て行はれ、距離の遠大なる丈けに、砲射の伎倆の優秀なるものに、其利益を附與せられたり。故に砲火の爲めに露國艦隊の被りたる損害の大なるに反し、砲術精到なる日本艦隊は其損傷頗る輕微にして、曾て行はれたる日本政府の特許に依り、新聞通信員の觀戰航海に於て、日本艦隊の主戰艦隊が、其戰鬪力に關すべき損傷は、一も之を見ることなきの一事に徵して明かなり。此の如き遠距離の戰鬪の行はれたりし原因を索求すれば、其半ばは魚形水雷の間接的効果なりと謂はざるべからず。勿論露國艦隊に比し、日本艦隊の速力優越し、砲手の射擊伎倆も亦優越し、加ふるに其司令官は、他日の用途に對し、極めて其軍艦を愛護せしは、其原因の一半を占むるに相違なきなり。自己の欲するが如くに、其距離を撰定せんと欲せば、速力の優越を把持せざるべからず、遠距離戰の利益を占斷せんと欲せば、砲射の精熟を要せざるべからず、又軍艦を持重せば漫りに接近戰を爲すべからず。軍艦愛護は、日本司令官の最も重きを爲せる所なるべし、何となれば、其手中の艦隊は、日本の有する全力なるが故に、之を補充するの途なく、開戰初頭の場合に於て、已に勢力殆んど相匹敵するものを敵とし、第二の場合に於て、露の本國より東航せる艦隊と戰ふか、又は兩艦隊合同する場合を生じたるとき之と會戰せんとせば、之に對する覺悟を有せざるべからざると當然なり。艦體持重の原因に於て、即ち遠距離を撰定するの眞因は、主として魚形水雷の間接効果なりと斷言せざるへからず。今又研究を炮煩勢力の上に轉ぜんに、日本

艦隊の遠距離戰を撰みたる所以に就き、世上或は之を六吋砲の用ふべからざるに依るものなりとの斷定をなすものなきにあらずと雖とも、是れ事情に通ぜざるの謬見なり。今戰鬪諸報告に就き、激戰時間に於ける兩者の距離を見るに、其最大距離は八千米突、最小距離は五千米突なり。前者は少しく大に失するの嫌あり、何となれば、十二吋砲の八千米突に於けると、六吋砲の五千米突とに於ける齊しく其の最大射程なればなり。要するに五千米突、已に水雷効程の外にあり、尙其以上の距離を撰みたりとせば、若し其砲手の精練を利用し、主砲のみを以て戰ひ勉めて其艦體の損傷を愛護したるに在り。元來遠距離戰は接戰に比し、其時間と彈藥とを要すること多からざるべからず、而かも之を撰みし所以のものは、此の事情ありしが爲めなり。此事情あるを知らずして、直に其原因を六吋砲の無用に歸せんとするか如きは謬斷も亦甚しと謂ふ可し。加之、此常に遠距離を撰定せる日本海軍が六吋砲を無用視せざるを見よ、今や建造中なる鹿島香取二艦の如き、其副砲としては全部六吋砲を採用したるにあらずや。魚形水雷の効程外に於ける場合と雖も、自ら其遠近に差隔なき能はず、其近きものは、之に接戰の利益たる六吋砲の威力を用ゆべきなり、此種の戰鬪を見ざるの故を以て、將來を斷言するは妄も亦甚しと謂ふべし。次に撞頭に就ては、今回の海戰に應用せられたる機會なかりしが如し、故に其効力如何を斷言するの材料を得ずと雖も、又今後の戰鬪にして、常に此の如くならんには、其用法全く廢滅に歸するの觀ありと雖ども、之を彼の魚形水雷に比すれば、致命的損傷を與ふべき程度に於ては正に有望なるものなり。元來艦體の致命的打擊は、魚形水雷及撞頭に在りしも、水雷其の危險なる性質を失ふたるにあらずと雖も、一擊致命の損傷を與ふる能はざりしとを證明したりと雖も、一度撞頭の衝破する所とならば、事是に決す可きを以てなり。唯現在の撞頭を以て期待せるが如き効果を收め得べきや否やは、未了の問題なりと雖も、今尙ほ致命的價直を有する者たり。又裝甲防禦に就ては、其効果十分なりしを微知するに堪へたり。彈丸流礮を傷けたるも、其損傷は輕微にして、汽機は之を傷けざるなり、人員の損傷も防護の効果を顯現せり、ロシヤ、グロムボイの如き、防禦完全ならざるものに於て、尙ほ其然りしを見るなり。榴彈防禦の點に於て陰砲甲壁の効果は砲煩威力を防禦すべき長城と爲すべからずと雖も、又最新式艦の中央砲臺に如かざるは勿論なりと

雖も、而かも豫期に合格したりしを見るべし。累々たる死屍を戴ける甲板は、是れ陰砲甲壁なき部分なり、是れ實に有力なる實證を防禦擴張論者に與ふるものにあらずとせんや。又兩艦の司令塔に就ては、二三の型式ありて、何れも理想に適合したりとすべからず。殊に奇なるは、グロムボイ司令塔にして、其箔頭は宛も榴彈炸發の具と爲りたるの觀あり。又烟突は諸艦皆損害を受くること大に、之を膠州竄入の戰艦に徵するに、殆んど損傷を以て掩はれたるが如し。元來烟筒の必要は、其の機關力を發揮せんとするにあるものなるが故に、其損傷は即ち其速力の損害を意味するものなり。今之を我最新艦に徵するに、烟筒の數多く、其筒身最大なるのみならず、四基烟筒を有する艦體の外に、バッ、又はクォーターに於て、幅六十呎、壓四十呎の標的を敵に示し、彈丸の艦體に中らざる場合も、之に中りて炸裂すべし。後來之を減縮せざるべからざるが如し。又探海照燈を制するが爲め、マキシム砲を使用するの方法、陸海兩面に於て實行せられざりしが如し。予輩の見る所に依れば、之を用ふべきの機會少なからざりしが如し、旅順口に於ては、日本軍の之が爲めに苦しめられたる幾何ぞ。若し之に對し、マキシム砲を使用せば、假令之に命中

破壞すると能はざりしにせよ、探照燈員が機砲の射擊を受けつゝあるを知らば、之を把使し居ると能はず、一時其効力を失はしむべきを以てなり。例せば米西海戰に於て米艦より西艦の六吋砲に對し、此砲を使用し、砲員をして之が爲め其射擊に就役すること能はざらしめたり。近來獨乙は尙ほ之に防楯を加へんとす。之を使用せざりしは、遺憾なりと謂ふべし。唯茲に注意すべき一要項は、魚形水雷の缺點、裝藥の改良これなり。之に關しエンヂニヤリング記者は曰く、日露海戰に於て、主位の戰訓にあらずと雖も、第二位のものとして、其最も著しきものは、保式魚形水雷の偉大なる効力と同時に亦其大なる缺點を有することゝ爲す、其効果を奏したる點より言へば、魚形水雷は常に其決勝の要因となりたることは爭ふべからざる事實なり、即はち夜暗一回の襲擊を以て、海上權を握り、其結果は旅順の陷落及滿州の戰局に對し、其及ぼしたる効果は偉大なりと謂はざるべからず、然かれとも他の一方に於ては、幾回試みたる水雷攻擊中、其最後に於ける戰艦セバストポリに向ひ發射したる水雷は、其効果甚だ乏しく、恐るべき其爆破力は、抗拒す可からずとの斷言は、下すべからざるに至れり、水雷が敵の防禦網に繫りて、爆發せざるもの少なか

らず其原因は何れに在りや、恐くは其頭部裝置の不完全に歸すべきなり。之を以て、日本海軍が有せる優越なる知能を批評すべからずと云ひ、尙ほ其原因を二個の理由に歸したり、其一は裝藥塡充法、其二は裝藥を爆發せしむべき裝置の不完全之れなり。若し夫れ、十八吋水雷の裝藥をして、完全ならしめ、全く其効力を奏するを得せしめば、如何なる堅艦も之を爆破すべく、又假令爆破せざるまでも、其戰鬪力を奪ふに足るべきや勿論なり。其有効距離を增加せんとする議論は、パンブシャテレグラフ記者の筆に上れり、曰く、驅逐艦及水雷艇は、其魚形水雷を用ひたる効果は、稍期待する所に近かりしも、今回の艦隊戰鬪ジャイロスコープ付魚形水雷の有効發射距離に二倍したる場合に於て、行はれたるが故に、之を使用せざりしが如く、假令使用したりしとするも、其効果は之を聞くことなし。故に洋中の戰鬪に於て、之をして不用に屬しめざらんとせば、其有効射距離を增加せしめざるべからず。と以上の戰訓に付き、更に茲に讀者と共に、注目せざるべからざるものは、海軍大家ブリッヂ大將の戰評の一節是れなり。

ブリッヂ大將は日露海戰に批評を下して曰く、(千九百五年海軍年鑑に於ける英國洋艦隊司令官ブリッヂ大將稿、千九百四年の日露海戰と題せる記事の結末に於て大將の下せる批評にして時事新報紀事に據る)『極東に於ける千九百四年の海軍作戰は未だ其完全なる報告に接せずと雖も、興味ある或種の考察を暗示する者と云ふ可く、恐らくは或種の結果を示す者なり。日本は單に數字上より云ふ時は、斯の如き大事業を爲すに十分なりと云ふ可からざる海軍力を以て、戰爭を開始せり。蓋し極東に於ける露國艦隊は、露國海軍の一分遣隊に過ぎず、隨て直に增援を受くべきは、素より豫期せられし所なり。日本海軍は之に比し、大に優勢なりと云ふべからず、然れども日本人は戰爭に先だち、凡そ戰爭を行はんとする國民の爲すべき凡てを爲せり、彼等は細心以て各種の事情を考察せり、敵の不用意を見て自ら首肯せり、本國艦隊の來援に先だち、自國附近に於て敵を擊破するの時あるべきを自信せり、是れ一種のリスク(危險)を冒したるものなり。是れ劣勢なる艦隊が、優勢なる敵の一部分に對して、全力を集中する時に當り、正に冒すべきリスクなりしなり。セントヴイセント、トラファルガー、亦正しく斯の如し。蓋し右の兩海戰に際してのヽ臆測は、戰鬪に參加せざりし敵の艦隊交戰中の艦隊の壞滅に先だち、來援すること

となかるべく、又來援すること能はざるべしと云ふにありしが結果は、果じて之れを裏書したり、戰爭に於ける無謀の大膽は、罪惡にあらざるまでも撲愚なり。遠慮の大膽は、絕好の軍事的品質なり。千九百四年の作戰計畫に於て日本が吾人に幾多の見本を與へたるは、實に此の深謀遠慮の大膽にあり』と云ひ、魚形水雷の無能を論じては曰く、『今回の戰爭に於て、最も顯著なる一事は魚形水雷の効力の微々たる事是れなるべし。露國水雷艇は、其數少なからざりしも、未だ一發の魚形水雷を發射したるものなし、二月八日夜露艦に對し、水雷襲擊の加へられたる、其當時の境遇は、又再び容易に有り得可からざる境遇なり、是れ既に前に述べたる所なり。然れども其襲擊の結果は、失望すべきものなりし、尤も夫の驅逐艦リフテナント、ブルコフが、日本の魚形水雷の爲め沈沒に瀕したるは事實なり。然れども是れ幾度か試みられたる水雷襲擊中に在りて、首尾好く効を奏したる唯一の例にして、加ふるに魚形水雷の爲めに沈沒したる彼れブルコフたるや、襤褸たる一小艦たりしことを記憶せざるべからず、又セバストポリの例は、一定の地點に碇泊したる損傷軍艦と雖も、之を破壞するには幾度の水雷襲擊の必要なるかを示す者なり。吾人は魚形水雷を以て、不用にして海軍武器中より全然之を放逐すべしと結論するものにあらず、只魚形水雷が局限的効力を有する武器にして、稀に見る特種の場合に於てのみ、信賴すべき者なりと云ふのみ、魚形水雷を基礎として、戰術、作戰計畫若しくは軍艦の計數を作るが如きは、砲兵の佩劍を基礎として砲兵戰術を作ると同樣ならん。今回の海戰の經驗は、射程長大なる大砲を基礎とせる、今日の戰術家の議論を確むると同時に、巡洋艦戰鬪艦の武裝中より、魚形水雷を除却するの正當なるを示すものなりと云ふも過言にあらず』と云ひ、潛航艇問題に對して曰く、『新聞紙上に於て屢々傳へられたる所によれば、日露兩國は共に潛航艇を得たりと云ふ、然れども未だ艇の曾て使用せられたるの形跡なし、普通水雷艇の効力僅少なりしに見て、潛航艇の効力は如何なるものなりや、潛航艇の速力遲緩及目標展望の困難は自己を他に見せざるの便利に對して、拂ふには隨分高價なる者にして、且つ此の他に己を現さゞるの便利と云ふも普通水雷艇が、夜暗を利用して己を隱すの便に比して、僅小の優る所あるのみ、若し潛航艇艦隊に隨從したりとせば、假し木浦よりダルニーまでの各港灣、悉く彼等の自由に使用するを得たりとするも、尙且つ大に艦隊の動作